

して北支北平官話に多くてそれに對するきつい原音は大體南清地方から安南あたりに見出される。北平音の鹽 *yen* が厦門(臺灣)で *kiam* であり、北平の續の音 *tsu* が安南で *tuk* として現はれて居るが如き又流音 (liquidale) では厦門音の人 *lang* が北平で *jen* となつて居るやうな状態である。從つて入聲で終る音などは無論北支北平官話にはなくて福州以南の原音の特徴とするところである。まれには上海音にも *K* の入聲だけは残つて居ることがある。尙此の外北平には語頭に立つ *G* 音が全く缺けて存しないが多少訛つて南支地方には少からず存して居る。

以上支那の音韻現象を三段に分けて結論を下して見たものの、これは唯方法上の便宜にしか過ぎないのであつて、その實孰れの觀察をも獨立分離させると云ふことは許されない。元來支那の古韻の研究に南支地方の音を看過すると云ふことは琉球語を顧みないで日本の古語を觀察しようとするのと同様で共に非常な不利益である。況して音韻研究殊に支那語の音韻研究にはその文字上の觀察が引いて莫大なる研究の手懸りを與へることになるのであることは再び繰返す迄もない。それ故此の三方面からの觀察は決して分離することは出来ない譯である。

要するに支那文字に現れた音韻の研究は今日の學界ではまだ其の緒にも着いて居ない有様であるが、若し上述の觀察にして幾分か研究の名實に價するものでもあるとすれば將來此の觀察を益々發展させて行きたいと思ふ。これは單に支那學建設の一部門である支那言語學の科學的基礎となるばかり

なく、尙支那學に於ける他の一大部門たる支那文字學でふ頗る重大なる難關に向つて一つの言語學的關鍵を與へる譯になると固く信じて疑はないのである。唯自分は *only a pioneer* として此の前未拓の荒野に分け入つたものの餘りに拓伐のむづかしさに、たゞ孤獨一臂の力の及ばざらんことをのみこれ恐れて居る次第である。

附記 本論文はこれで研究が全く完結したと云ふわけではないがひと先づ茲に一段落を結んで置き、餘は更に本編第十章の、説文の研究の方に譲つて置くこととした。

第五章 支那古韻 *K, T, P* の沿革と由來

The Essay on the Chinese Phonetics, *K, T, and P.*

此の論文は頗る困難なる研究を乏しき材料に依て仕遂げんと試みただけ未だ解決に達し得なかつた部分が少なくないが苦心のあとに明らかに認められる。論述の方法は大體に於てよく其の研究の法を窺したものと見てよい。今後の研究によつて、これが有益の *hint* を提供するに至らん事を望むのである。

明治四十年六月

言語學科主任 藤岡助教 授

序

由來支那學即ち *Sinology* (griech. *Sinolog*) の研究では支那の歴史、經學、文學などの方面が主と

第五章 支那古韻 *K, T, P* の沿革と由來

五二三

なつて居て音韻學などの方面は寧ろ疎んぜられて居た傾きがある。併しながら苟も支那學の科學的研究には音韻學の力を必要としなければならぬことは云ふ迄もない。若し舊來の經學、史學、文學にして言語學、音韻學などの助けを借りて進む時には往々にして從來の巨多の研究の結果を根本から一變せしむることもないに限らぬと云ふことは梵語發見後の歐洲の文獻學に徴して見て明かである。

併し言語の研究を他の學の研究の方便にして居る間は未だ眞の言語學ではない。寧ろ其の豫備の時代たるに過ぎないのである。眞の言語學の研究はその材料が言語學的に整理せられるやうになつてから後を云ふのであつて、印歐 (Indg.) の言語學史上ではこのうちが整理の時代 (1868—1885) と完成した研究の時代 (1885—now) との二つに別れて居る。今支那語の取扱ひ方の現狀を考へて見ると今日は未だ材料の整理の時代にも無論進んで居らず、まだ準備のところへも十分入つて居らない。漸くにして interest 興味の起りかゝつたと云ふ位なところに過ぎない。それ故支那學のうちに音韻の學が現はれる程に至つて居ないと云ふことは怪しむに足りない。

支那學を建設する上に缺けて居る基礎學は音韻の學、文字の學尙その他に種々あるけれどもそのうちでも殊に全く手のつけられて居ないのは新しい意義の支那音韻學即ち Chinese Phonetics である。純粹なる支那音その者の研究の眼には經學も文學も史學もあるわけの者ではないけれども、音の歴史的の沿革、由來の研究は引いて自ら此れ等諸學の上に影響を及ぼすことは至つて大である。研究の範

圍が大であればある程その結果の響影する範圍は愈廣くなる譯である。併し此の論文では支那音聲學に就いての最初の研究として先づ支那の子音全體のうちで最も元始的 primitive で且つ他の諸音よりも比較的根柢になつて居るらしい K, T, P の三音を選び出し、その沿革と由來について少しく觀察をして見たのである。散漫な支那の古記録の中から場合々々に適當する材料を探し出すのは人知れぬ勞力と多大の時間とを要し、それを又言語學上から取捨し整頓するに至つては更に數倍の苦心を要するので、無論據るに前人の説があるわけではなく又材料の整理ができて居るわけもなく、否材料の討求審査それすらがまだ十分に手がつけられて居ないのである。それ故歐洲で百年に亘つて三段の時期を経て完成された言語音韻の研究をば東洋にあてはめて僅かに三四年でしてしまふと云ふことは絶対に不可能であるから文科大學卒業論文としては單に以上三音と限つたわけである。無論それにしても未だ觀察の不十分な處、整理の足りない處、説の堅固でない處、その他色々始めての探險者にありがちな手落ちは多々あるを免れない。併しこの論文の一行半行と雖も聊かこれ自分の苦心の末になつたもののみである。唯今後自他の研究の捨石とでもならば本望である。終りに臨んでこの first attempt に對し少なからぬ同情と助力を賜りたる藤岡 (勝二) 助教授、上田教授、高楠教授、白鳥教授、市村教授、星野教授、服部教授、坪井 (九馬三) 教授、小川尙義氏伊澤修二氏などに向つて滿腔の感謝の意を述べる次第である。

明治四十年四月二十日日臺大辭典及辭林完成の頃

文科大學文學科(言語學) 後藤朝太郎識

研究項目

研究法

地理上の觀察
歴史上の觀察

資料及參考書

沿革の部

第一章 K音攷

G音攷

第二章 T音攷

D音攷

第三章 P音攷

B音攷

第四章 入聲音攷

附、入聲音分布地圖

由來の部

第五章 有史以前(Archaic Period)に於けるK, T, Pに就いての攷

結論の部

一、印歐語の音韻研究と支那語の音韻

二、北平官話

三、古音の地理學的分布

四、支那文獻上に現れた古音の沿革

五、音聲學上から觀た漢字

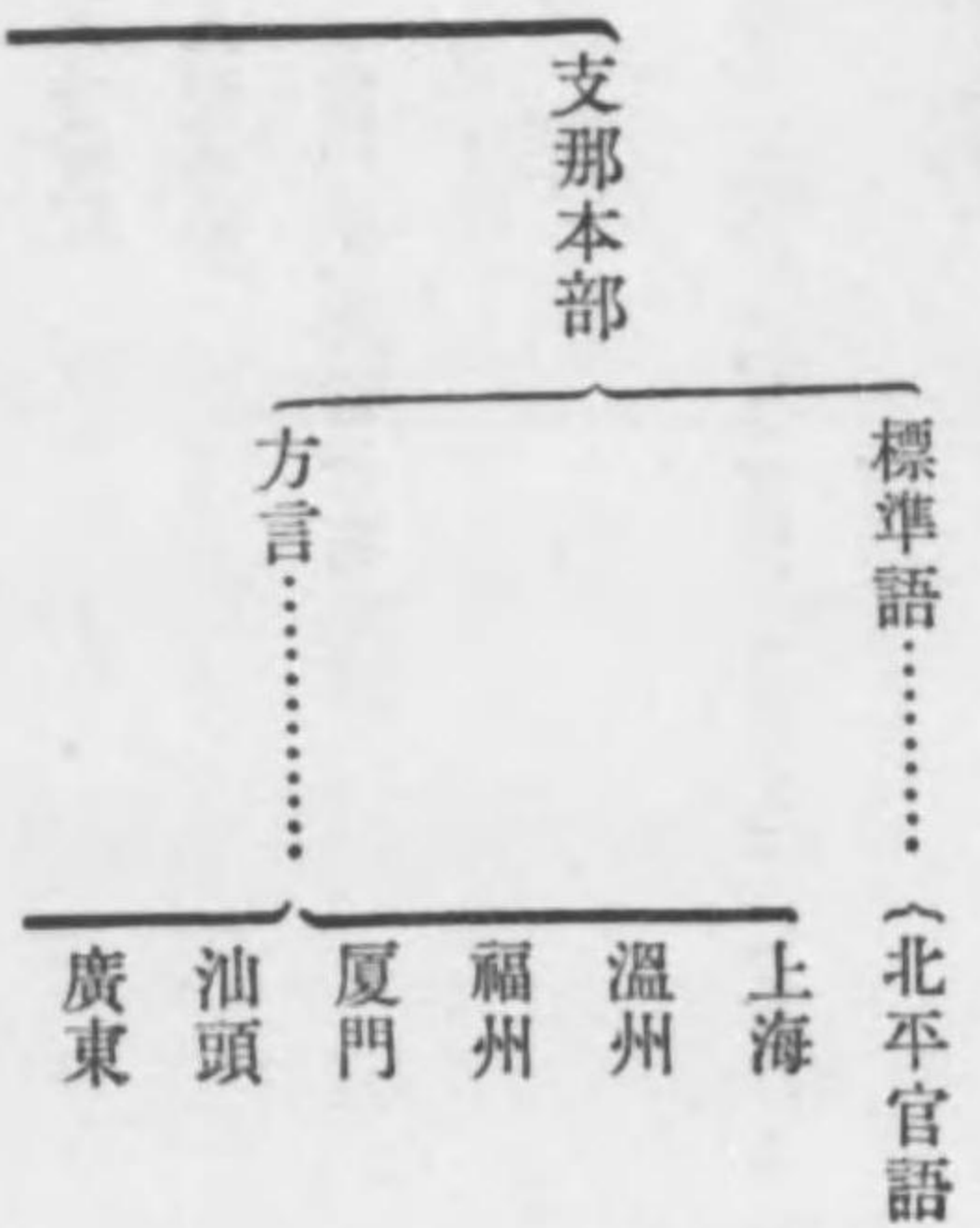
六、支那語の根本起源と發達に就いての攷

支那古韻 K, T, P の沿革と由來

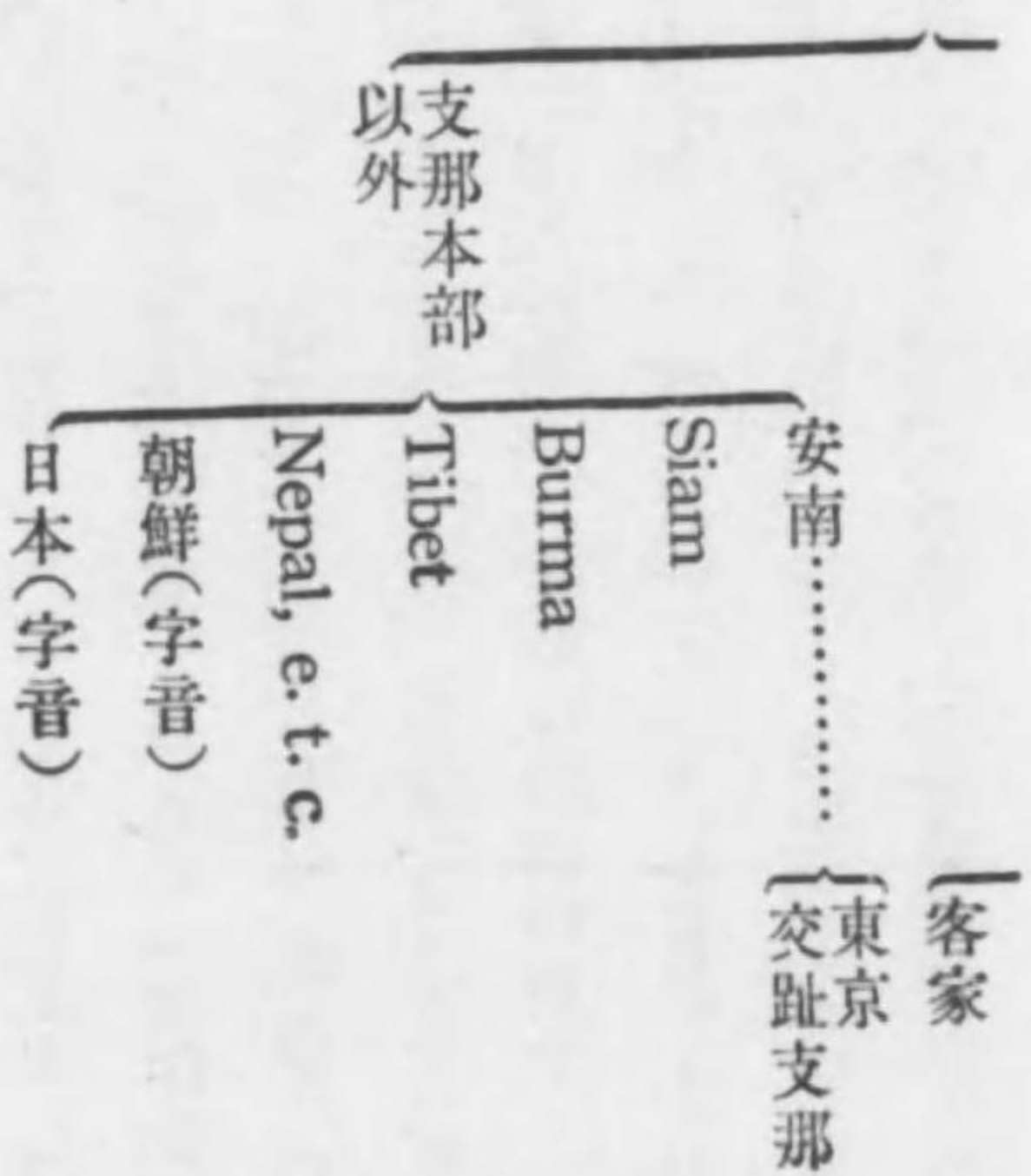
(一) 研究法及參考書

研究法

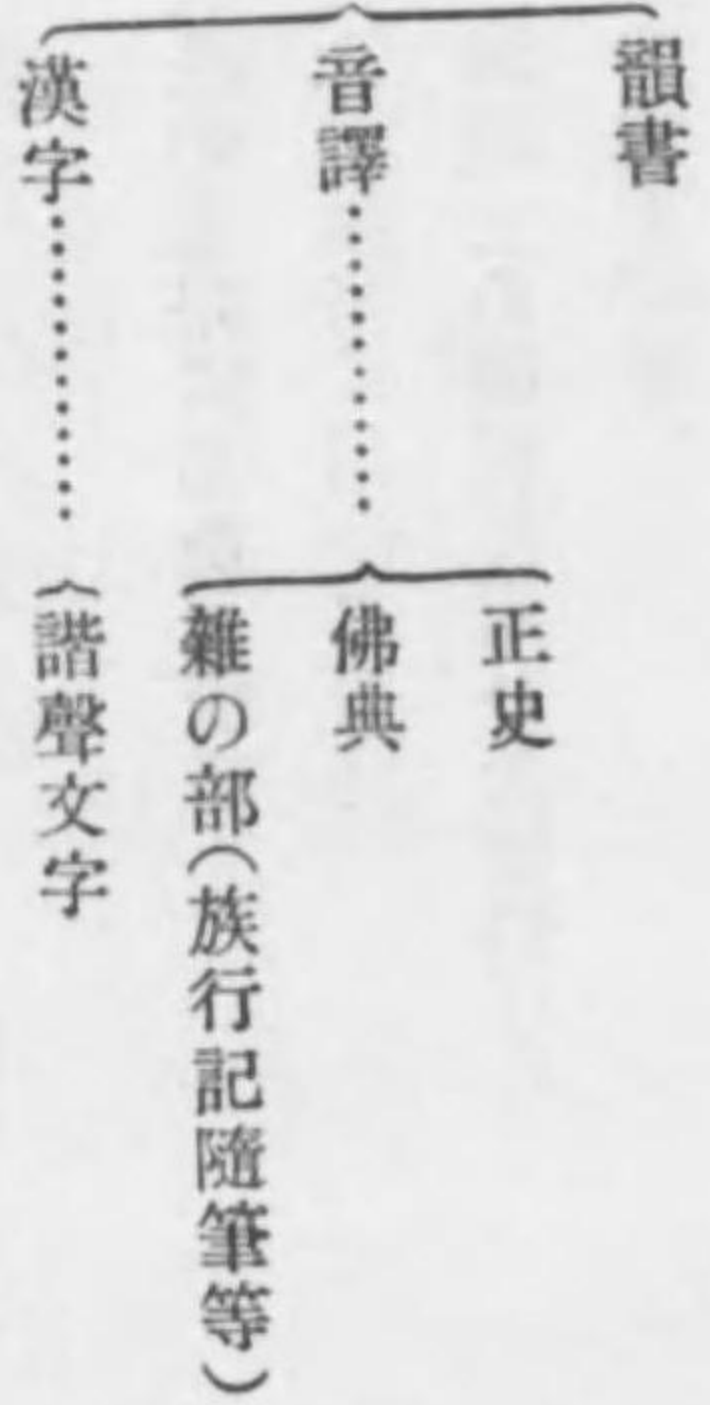
- 一、地理上の觀察
- 二、歴史上の觀察



(一) 地理上の觀察



(二) 歴史上の觀察



此の System によつて先づ Anlaut としつゝの K, T, P, 次に Auslaut としつゝの K, T, P, (即ち入聲)を觀察してその變遷沿革のあとをしらべ最後に古韻 K, T, P の由つて來たつた徑路に就いて研

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

究することとした。

資料及参考書

- 一、地理上の觀察に用ひた資料
- 二、歴史上の觀察に用ひた資料

(一) 地理上の觀察に用ひた資料

(一) 支那本部の方面。

- Arendt, C. Handbuch der Nordchinesische Umgangssprache.
Wade, T. F. Wen-chien tzü-erh chi. (文件自選集)
Williams, S. W. Syllabic Dictionary of the Chinese Language.
Edkins, J. English-Chinese Vocabulary of the Shanghai Dialect.
小川學士著、日臺小辭典(當時大辭典印刷中)
Mac Gowan, J. A Manual of the Amoy Colloquial.
Eitel, E. J. Chinese dictionary in the Cantonese Dialect.
Giles, H. A. Chinese-English Dictionary.

- Watters, T. Essays on the Chinese Language.
Parker, C. The Comparative Study of Chinese Dialects.
Playfair, G. M. H. Geographical Dictionary of China.
Gabelentz, G. v. der. Anfangsgründe der Chinesische Grammatik.
Baldwin, C. Manual of the Foochow Dialect.
Gabelentz, G. v. der. Chinesische Grammatik.
Schlegel, G. Nederlandsch-chineesch Woordenboek.
China Review.

(二) 支那本部以外の方面。

- The Journal of the Royal Asiatic Society.
Tung Pao (通報)
高楠博士、南條博士述、佛領印度支那
Cadier, L. Phonetique Annamite.
Trüông-vinh-ky. Abrégé de Grammaire Annamite.
Latham, R. The Descriptive Ethnography.

Rosny, L. de. Notice sur la langue Annamitique
(Extrait de la Revue de l'orient, Paris, 1855).

渡邊學士、各國語に於ける馬

Schleiermacher, A. A. E. De L'influence de L'écriture sur le Langue.

Henry, B. C. Ling nam or Interior Views of Southern China and Hainann.

Hosie, A. Three years in Western China.

Malcom, H. Travel in South-Eastern Asia.

Hunter, W. W. Comparative Dictionary of the Languages of India and High Asia

Lacouperie, T. de. The languages of China before the Chinese.

Hovelacque, A. La Linguistique.

Sarat Chandra Das, Tibetan-English Dictionary.

Jäschke, H. A. Tibetan-English Dictionary.

高楠博士、歴史以前に於ける印度支那人種及び大初同住根源地、(史學雜誌九編十一號)

Delbrück, Einleitung in das Studium der Indo-germanischen Sprachen.

Brugmann, K. Grundriss der Vergleichenden Grammatik der Indo-germanischen

Sprachen.

Paul, H. Die Grundriss der germ. Philologie.

奎章全韻

全韻玉編

小藤博士、金澤博士共編、朝鮮地名字彙

Underwood, H. G. & Gale, J. S. Concise Dictionary of the Korean Language.

太田方翁、漢吳音微

黒川春村翁、音韻考證

岡本保孝翁、韻鏡異同攷

白井寛蔭翁、音韻假字用例。破納 下學集

萬葉集(國歌大觀)

古事記(古事記傳)(古訓古事記)

飯田武卿翁、書紀通釋

狩谷望之翁、箋注倭名類聚鈔

萬葉用字格(僧春登)

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

本居宣長翁、漢字三音考

新井白石、同文通考

新井白石、東雅

(11) 歴史上の觀察に用ひた資料

釋文雄、磨光韻鏡 (1744) 享祿板の韻鏡 (1530)

顧野王、玉編 (543)

丁度等、集韻 (1034)

陸法言等、廣韻 (7th C.)

揚雄、方言 (1st C. B. C.)

司馬遷、史記 (1st C. B. C.)

班固、漢書 (1st C. B. C.)

范曄、司馬彪、後漢書 (5th C. A. D.)

陳壽、三國志 (4th C. A. D.)

魏收勅、魏書 (6th C. A. D.)

張照遠等、唐書 (10th C. A. D.)

歐陽修等、新唐書 (14th C.)

托克托等、遼史 (14th C.)

宋濂等、元史 (14th C.)

靈石楊、元朝祕史 (連筠篲書)(1347)

長春真人、西遊記 (1347)

洪鈞、元史譯文證補 (1897)

徐葆光、中山傳信錄 (1712)

釋玄奘、大唐西域記 (645)

Julien, St. Méthode pour dé chiffrer et transcrire les noms Sanskrits qui se rencontrent dans les livres Chinois.

Julien, St. Mélanges de Géographie Asiatique et de Philologie Sinico-indesume.

Eitel, E. J. Handbook for the Student of the Chinese Buddhism.

白鳥博士、Uber die sprache des Hiung-nu-Stammes und der Tungghu-stämme.

Hirth, F. Tonjukuk, 曠欲谷、Osttürken im 7 & 8 Jahrhundert nach Chinesischen

Quellen.

- Gerini, M. Notes on the Early Geography of Indo-China. (The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland for 1897.)
- Gerini, M. "Ptolémée: Inde transgangeitique."—Etudes D'extreme-orient 1902. Paul, H. Principien der Sprachgeschichte.
- 山下學士、セレス、セリカに就ての考(史學雜誌十七、十八編)
- 揚楨、石鼓文音譯
- 李貞芥、石鼓釋文本金石萃編及因宜堂帖
- 許慎、說文解字
- 鈕樹玉、說文新附攷
- 段玉裁註、說文解字
- 顧炎武、音學五書
- 江永、古韻標準
- 王引之、經傳釋詞
- 郭璞、爾雅註
- 猪狩學士、漢文典

- 廣池千九郎氏、支那文典
- 大島正健氏、支那古韻考
- 金井保三氏、支那古韻考、(東洋哲學雜誌六編十、十一)
- 陳第、毛詩古音攷
- 諧字諧聲要覽
- 虔德升、諧聲品字箋
- 音韻闡微(康熙勅撰)
- 元曲、殊に北曲
- 水滸傳
- 西廂記
- 紅樓夢
- 桃花扇傳奇

發音の寫しかた、Orthography の system.

支那語には支那特有の音があるから idg. (印歐) の orthography の system をそのまゝ適用すると云ふことはできない。嚴密に見てくれば支那獨特の system を立てなければ完全でな

いのである。併しこの論文につかつたものは従来最も普通に行はれて居る Sir Thomas Francis Wade の語言自彙集にある system でそれを主な據りどころとした。併し斟酌すべき部分は G. v. d. Gabelentz, *Chinesische Grammatik* 247頁 (S, ts, ts'ang) 又 Wade の *edg* の方の *o* 又は *e* の倒字に改めた。又・のしるしは *hard aspirate* を意味するのであって、*h* は *salzton* のしるし。

(二) 沿革の部

第一 K 音 攷

北平官話に於て K, 音及び K' (K の帶氣音) 音は Ć, H, Š (hs, sh) S などの音と關聯する所がある。

我看見了旱地了 (或は旱岸兒) (海岸が見える) *Wo k'an'čien la han ti' la (hou hau ar)*
 俗們快到那兒了 (程なくあすこに着く) *Tsa man k'uai'tao nar la*
 我覺着好點兒了 (私は心持が直つた) *Wo čüe čo hao'tienr la*
 那好極了 (それは結構) *Na hao č'i la*

偏的行李在那兒了 (御荷物はどこに) *Ni ti šing'li tsai nar'la*

還在海關那兒了 (まだ税關にゐる) *Hai tsai hai kuan' nar'la*

註・・のしるしは *Salzton* (全文中音調に力のこゝろをいふ) を示す。

上の例で關は *kuan*, 快は *k'uai*, 看は *k'an* 何れも K, K' に屬して居るが、次に早は *han*, 好は *hao* 海は *hai* 何れも *h* の音に屬して居る。この K, K', H は三者互に密接の關係がある。殊に H と云ふ音は極めて不安定の音である爲め K' と H との聲調 (*stimnton*) の上の差、發音機關の側 (*genetische Seite*) の差なども區別が確然として居ない。次には覺の *čüe*, 極の *č'i*, 見の *čien*, は皆 Ć の音 *č* 又行の *šing* などの S の音、此れ等皆 K 音が顎音化 (*palatalization*) の結果と見られる。K, K', H, Š, Ć は互に音の性質が近い爲めに轉換の現象が見られる。この轉換は多綴語 (*polysyllabic*) の言語では前後の音の關係で生ずることが多いが、支那語の場合には元來單綴語 (*monosyllabic*) である爲めに音の轉換は比較的自由にない。それ故に印度ゲルマン語 (*idg*) やウラルアルタイ (*Ural Altaic*) 語族にあるやうな音の同化即ち *Assimilations* (*progressive, regressive*) も左程には見出されない。音質に於てしかるのみならず四聲に於ても嚴重であつて、一つの單綴語の音と意義とに従つてその固定性 (*stability*) を多く有して居る。これ單綴語が多綴語に對して比較的音の不變性を有するわけである。次に K 音 (K') の音の轉化 (*Lantverschiebung*) について單語の例をとつて見るがその音は單獨

としての時も文章中にある時もその違ひは比較的少ないと思はれるから煩を避けて主なる字音の例を
 排列し、長々しき文は總べてこゝに省いておく。

K, (K') → H

會 kuei, hui	喊 k'an han ^o	壞 kuai huai	亢 k'ang hang
合 ko ho	況 k'uang huang	涸 ku hao	虹 kang hung

(一) Sir. T. Fr. Wade: Wen chien tzu erh chi.

K, (K') → Ċ

去 k'o ċü	傾 k'ang ċing	賈 ku ċia	恐 k'ung ċung
楷 k'ai ċai	將 kang ċiang	更 kang ċing	虹 kang ċiang
頸 kang ċing			

K, K', Ċ, H → Š

罇 k'an šien	蝦 ha šia	行 hang šing	較 ċiao šiao
巷 hang šiang	降 ċiang šiang		

これらの K, K', H, Ċ, Š の轉換ばかりでなく尙更にすゝんで、半母音に至るものがある。これは
 子音が消えて後に韻字の母音の始めに立つ U 又は I 音が發達して出來たものかと思はれる。例へば

K, K', H → W, Y

驗 sien yen	彙 (hui) wei	螢 (jung) yung	穢 (hui) wai
院 (juan) yuan	呱 ku wa		

四聲は必要でない限りは凡て省く。以下之による。

音韻上例へば kan, k'an が han となり更に han が san となり又は an となり、wan, yan とな
 り、kan から又 can となり、更に can から san が出でなどして總體これらの音の轉じ分れること
 は北平官話のうちだけにでも窺はれることは以上の如くである。次に之を地理上に廣くうかがふと如
 何。又歴史的に古代に派れば如何などのことを觀察して見よう。

地理上の觀察

北平に K 音でなくして南方の諸方言には K 音であるものが可成りにある。併しその種類は如何に擴
 がつて居ても自ら K, K', H, Ċ, Š, Y, W の範圍 series 以外には出でない。例へば

廈門方言

頭程幾里路	Thâu-tsām kui li to?
鏡肉好嫩歹	Kia ^a bah hó, kheng phain.
食了棹巾拿去	Tsiah soah tohkun the khi.

臺灣小方言

我有要緊事情來
備與我講

Goa ū yau kin tai ċin lai.
Li ka (p) goa kong.

これらの例に於て、K音であつて北平ではちがつて居るものを摘録すると

廈門	北平	臺灣	北平
幾 kái	ċi	緊 kin	ċin
鏡 kia ⁿ	ċing	講 kong	ċiang
巾 kun	ċin		
去 khi	ċü		

の如きものがある。即ちこれは南方の K, K' (kh) に對する北方の ċ音を比較したのであるが、尙北方のみでなく外の音で南方の K音に比定せられるものを列記して見ると

K→H.

廈門 ⁽¹⁾	北平	廈門	北平
糊 kō	hu	厚 kau	hu
客家	北平	廈門	北平

亨 k'an	hang	行 kiã ⁿ	hang
頑 kong	hang	寒 kôa ⁿ	han
哈 kap	ha		
馨 k'in	hing		

(1) Mac Goan: J. A Manual of the Amoy Colloquial.

K, K', H→S

廣東 ⁽¹⁾	客家	北平
携 k'wai	hie	si
狹 hap	k'iap	šia
協 hip	hiap	sie
曉 hiu	hiau	šiao
契 ket	k'a	sie

(1) Eitel E. J. Chinese Dictionary in the Canton dialect.

K, K', H, vowel→Y.

廣東	客家 ⁽¹⁾	寧波	温州	北平
----	-------------------	----	----	----

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

狹	hap	k'iap	yah	a	sia
洽	hap	kiap	yah	a	sia, čia
鴨	ap	ap	ah	a	ya
學	hok	hok	yuöh	oh	štie
銀	ngen	ngyin	ngyang	ngying	yin

(2) Giles, H. A. Chinese English Dictionary.

K, K', H, vowel → W.

廣東	福州	寧波	北平
護 wu	hou	wu	hu
戶 u	hou	wu	hu
我 ngo	ngo	ngo	wo
吳 ng	ngu	wu	wu
五 ng	ngou	wu	wu

以上の種々の例によつて見ても K, K' が Ć, H に關係深く、更に又 S となり、或は H が drop してあとに W, Y が生じ發達したことが察せられる。併し北平官話の現状からすると韻の母音の性質

如何によつて以上の子音は自ら三種類にわかつことが出来るのである。

- (一) K, K', H は北平では front vowels (I, E などの母音) をあとにとらない。
- (二) Ć, S は北平では素々 front vowel に連關して居た K, K', H から變轉して來たものが多い。
- (三) W, Y は北平では I, E, (front vowel) A, O, U (back vowel) の區別なく之をあとに取る。この W, Y なる語頭音 initials は前にも述べた通り、K, K', H とは直接に關係のあるものではなく母音そのものから生み出された如き形迹がある。尤も W と Y とは發音の場所は違つて居る。

支那本部の方言から見たばかりでも北方の H, Ć, S, W, Y にくらぶ可き K, K', H, (G) が南方諸方言にあることが見られた。併しこのことは同じ單綴言語をばなす安南にも、又單綴語をばなさない日本、朝鮮などの字音の上にもやはり同様にかがはれるものである。

安南	廣東	朝鮮	日本	浙江	北平
街 ngai	k'ai	ka	gai	ka, čie,	čie
甲 giap	kap	kap	ka(p)'	kah, čia	čia
函 ham	ham	ham	kan	ein, a	han
亨 hang	hêng	hiöng	kiou	hêng	hang

第五章 支那音韻 K, T, P の沿革と由来

協	hiap	hip	hiop	ke(p)'	ye	ſie	}
携	hwe	k'wai	hiu	kei	yü	ſie	
五	ngu	ng	o	go	ng	wu	}
耳	ngok	yuk	ok	gyok	ngüoh	yü	

(一) Giles. H. A. Chinese English Dictionary.

これによつて見ると安南、日本、朝鮮の音 G, K, H が廣東のそれの如く北平の H, C, S, W, Y にあつて居ることがわかる。

音の出かたについて發音機關 (genetisch) の側の性質を見ると、キケロなる音がシセロと云ふよりも古い音なるが如くに唯に K のみ限らず K, K', G なども他の H, C, S, W, Y などの諸音に對してもとに立つ音であつて、その逆に W, Y, C, S, (H) などなら K, K', G などに逆に變化することはむしろ普通でないのである。例へば drink の K が即ち C の音となる drench の eh の如し。又獨逸の Tag が英語の day となる。これは G が Y となつた例である。これらと反對に Y から G となり ch から K になることは音聲學上殆んどない現象である。然らば今日の北平にある W, Y, C, S, H などの諸種の音も素とは K, K', G などの音であつたと云ふことが迫られるかと云ふに、それは材料が凡ての場合を盡さないから、悉くと迄は云はれないけれども、大體に於ては、やはり K, G の方に近することが出来るやうである。これをみるには歴史的の觀察に入らなければならぬ。

歴史上の觀察

1) K → H, → (dropped H),

K, H の歴史的の關係はよほどまづりにくい。殊に H の音には軟口蓋音 (Weiche Gaumen) と舌根とで出すきつゝ H 即ち X もあれば又獨逸の ich 音の如き性質のとの音もある。又極めて母音に近いかすかな喉頭摩擦音 (kehkopfhautlaut) であることもある。その最もきつゝいものになると K の音に接近するのみでなく K' と云ふ K の帶氣音 (aspirate) も起りうる。此れを K, K', H とかきわけても、音聲上では區別が明確でない。まかもそれが漢字の上では到底表音的に現はれて居らず、又現はすことも出来ないのである。韻鏡の上でもハ行音に屬する文字が常に一定の位置に入れられて居ないのも全く此の理由に基づくものかと思はれる。日本でもフタムがタタム (即ち H が K) となり、印度歐羅巴 (ids) の方でも K, H, (X) の關係は頗る密であつて例へば

比較言語學上の

Greek	Xalpaγ	→	Later Latin	Galbaneun	……即ち X → G
Gothic	Dehein.	→	Portugese.	Degun.	……即ち H → G
Got.	Taha.	→	Portugese.	Taccola	……即ち H → K

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

の如きものもある。それ故今支那語の場合に今日の H がもと X であつたかも知れないと云つた所で、その K その H そのものの程度上の差、性質上の差を十分明かにすることは到底できない。たとひ K に歸することができても更にその前に X の如きものであつたかも知れないと云ふことが考へられないでもない。けれども後の章で云ふが如く支那の H であるもの（例ば血 hiet, 黒 hei, hok）などは支那の元始的の primitive の音を傳へて居る外族の言語では多くは K, G である。それ故暫く支那の古韻にて、もと K であつたものが K, H となつたと云ふ假定で論をすゝめて行くこととする。

水滸傳 長老喝道胡說且看權越之面

桃花扇傳奇 咳桃花薄命扇底飄零云々

に於ける胡説は hu so (ウソのいふこと) で、咳 (interjection) は hai, ければ H の音がきつければ K, (G) usō; kai, 弱まれば usō (うそ) ai (あい) となる。かくの如きものについては他の方面に表音的の文字で比較す可きものがないから果して K に關係のあつたものか否か、わからない。以下にあげた胡、候、呼、骨、賀、赫、害、渾、海、護、火、孤、咸、虎、哈、忽はそれに相對する音がかりにローマ字の示す通り K, G (K', G') であつたとすると、少くとも古音が H よりもつよい音であつたかも知れないと云ふ可能 (possibilities) の説が立つ。

胡 gu	漢	書……………東	胡	(後の通古斯 Tunguse)
候 ko	後漢	書……………鳥	候	Tök, Tüg (地)
候 ko	後漢	書……………胡	候	uguz, gus.
呼 ko	魏	書……………卑	呼	ひのい。
骨 kot	魏	書……………木	骨	mongkori (頭)
賀 ka	魏	書……………賀	若	khuduk (真)
赫 kak	晉	書……………赫	連	Kükler (天山) 一つに又祁連。
契 ket	南齊	書……………契	害	khagalkhu (切)
海 kai	新唐	書……………渤	海	(靺鞨 Bagatur)
護 go	新唐	書……………土	護	Tüg, Tök (地)
孤 ko	北史、隋書	……………多利思比孤	たらしひい。	
咸 kan	北史	……………不	咸	Bagatur
火 ko	唐書	……………吐	火	Tokhara, Thuguroi (地名)
貨 ka	魏書	……………都貨羅又吐呼羅	(Tokhara)	

虎 ku 遼 史……………虎 思 kitc (力)

(1) 白鳥博士 Ueber die Sprache des Hiung-nu-stammes und der Tunghu stamme. 及、山下學士、セレス、セリカに就ての考 (2) Ptolemaeus terms.

この外、忽必烈汗 khublai khan 哈密國 khanul 哈兒 sar (枝) 胡落 kar (小力) 哈刺 karak など
は K (K) G にあてたものらしく思はれる。これらの古代の K, K', G (假定) はともかくも今では
H となつて、かるい音にうつつて來た。以下にその例をあげる。

胡…………hu	(骨…………ku)	害…………hai	火…………huo
呼…………hu	賀…………ho	海…………hai	孤…………(ku)
候…………hou	赫…………ho	護…………huo	咸…………han
渾…………hun	虎…………hu	哈…………ha	忽…………hu

この外今日北平で壞 kuai が huai となり、況 k'uang が huang となり、廈門の音、湖 kô 行 kia¹
がそれぞれ北平で hu, hang (sing) となり。客家の狭 k'iap が廣東で hap² となつて居るなどを見て
も北平の今の H は新しい音で K の方は比較的古い素との音であるやうに想像せられる。併しその
時代は大體いつの時代に最も多くうつつたか。それはわからない。が古い時代の音譯ものには、却て
K の方でうつしたものが多くうかがはれるやうである。併し六朝以後唐宋にわたつて音譯せられ

たものには外國音の H を音譯する上に多く用ひられて居る。例へば

喜 hi	Mahicāsakas. ⁽³⁾	奚 hé	Hévaram.
希 hi	Vaidēhi	熙 hi	Hiranya.
胡 hou	Houdjikan.	哈 ha	Hari.

のみならず、更に古く恐らくは東晉以前に支那から百濟⁴などに傳へられたものに H の音で這入つた
のではあるまいかと云ふ想像がつく。金澤博士によると一般に朝鮮では音のうつりかはりが烈しくな
い。古音のことは明かでないが音の變遷は少なかつた故に古代から H は H の音であつたものと思
はれるとのことである。なる程韓音は古音に富む南支音と似る點が多いから H の場合にもかゝる適
用ができるならば従て朝鮮の H にかやうなことが云はれるかも知れない。

(1) Macgowan; Amoy Colloquial (2) Giles; Chinese Engl. (3) St. Julien; Méthode pour de chiffrer.
(4) 星野博士の直話

安南	廣東	客家	福州	朝鮮
韓 han	han	hon	hang	han
黑 hak	hak	het	haik	hik
何 ha	ho	ho	hoa	ha

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

けれども朝鮮に傳はる前に H であつたかどうかは朝鮮古韻の論法ではわからぬ。現にこの方言の音より更にもとの形と思はれるものに、例へば次ぎのものがある。

客家	安南	廣東	福州	朝鮮
亨 k'ên	hang	hêng	heing	hiông
頑 kong	hang	hong	houng	hang

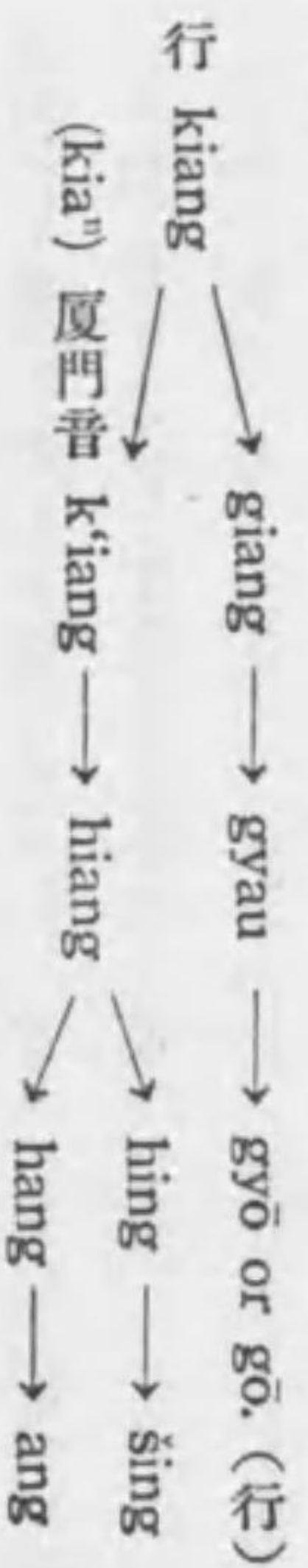
K, H 間の原則としての順序からすると K の方が本音と思はれる。併し已にあげた印度ゲルマン語 (ide) の例のこと、又日本の奈良朝以前の人々の發音の特質として H (X) が出しにくかつた爲め K としたやうな例を見ると、あながち客家に K を傳へて居るものを他の地方の H より古い音であるとは云へない。けれども更に深く這入つて西藏 (Tibet) などの之にあたるものをしらべると Tibet の K は支那で多く H に脱化して居るのであるから、こゝらで議論をとどめるならば兎もかく支那の H (X) は K より新しい音と大體に於て云はれる。日本の K 音に就てもそのカ行音の凡てが H (X) の發音の不可能 (unmöglichkeit) 一天張りて説くのはいかかであらう。或は太古に海流の關係で南方の K がそのまま傳はつたものもあるであらうし、その他種々の關係で支那で H となる前の K (K) が日本に K ではいつて居るものもあると考へられる。(にぎはやひ) の (にぎ) が熱 (Juk) の音便で nik, nig⁽ⁿ⁾で傳へられて居るなどのことを考へ合はすと益この可能 (Possibilities) はあるらしく思はれる。

以上は古音としての K (K') が X を經たか否か、とにかくも H 迄にすんで來て居ることを云つたのである。然るに H の音の性質として廣東の挾の hap が温州で a となり廣東の學 hok が温州で oh^(o)となつて居るが如く drop することのあると云ふことは又 K 音史上看過することのできな点である。

(1) 記紀素萬 (2) 白鳥博士の講義 (3) Giles: Ch. Engl. Dic.

安南で hau, 廣東で hou, 浙江で öe, oa の音である濠は、北平で hau であるが、これが濠洲 (Australia) の Au にあつて、濠洲 Aucou などとせるは浙江人の音譯か。廣東商人の音譯か。但しは北平でさうしたものであるか。これには議論もあるであらうが、strict にうつしたものとすると H が drop したものと見られる。

鎌倉時代から足利にかけて日本に這入つた宋音に行宮、行脚、行燈など云ふ行の音 ang, an の音もことによれば支那の方で既に H の drop して居たものかも知れないと云ふ疑がある。即ち行の音の沿革は



第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

それ故一般に K 音が現はれてから drop する迄の stage は支那語に於て次の如くに見られる。

K, K' → H → dropped H → (Vowel)

(1) K K' H → S

K の脱化したものから S が出て居るものは既に云つた通り front vowel の伴つて居るものに限られて居る。佛典に hi, hē をうごちまのひ

喜 hi Mahīcasahās

希 hi Vāidehi

興 hiŋg Hiŋgou

などは今日何れも S である。即ち喜 si, 希 si, 興 sing 之は Wade system によれば喜は hsi, 興は hsiŋg, Arendt system では喜は hsi 興は hsiŋg として居るものである。この hs, hs (即ち S) の音が H から轉訛して來たのはいつの時代であるか。その材料として次の如き類例は見出されたが、時代の上の委しいことは未だわからない。

希 he 希 臘……………he-lep, Hellenic.

希 he 希 伯 來……………hepulai, Hebrai.

喜 hi 喜 馬 拉 耶……………himalaya, Himalaya.

興 hin 興……………hiŋg, Hindkhus.

時代の上を大體きめる前にこれらの音譯が支那の北譯であるか、又は南譯であるかを先づきめなければならぬ。此れ等の音は南方、福建以南では現に hi のまゝの音で残つて居るのであるから。然しこの點は歴史地理の關係、西域との交通上のことなどが明かにならないうちは音だけで解くことは出来ない。

(1) St. Julien, Méthode pour chiffrer. (2) 宣長翁漢字三音考

近世では英國の貨幣の shilling を喜林とかく。喜は確かに *sh* の音であるのに唐代の佛典には H をうつつして居る。然るに本居宣長翁は南宋の鶴林玉露に日本語の雨(あめ)を『下米』とうつつして居るが、これは今の唐音(實は清朝の初め頃即ち十七八世紀の音ならん)で讀むならヒヤマイと讀まなければならぬのであると云ふことを云はれて居る。尙同書に見えたる沙嬉(酒、さけ)は唐音でサマヒと讀む可きものであると云つて居られる。これは少く共清朝の初め、十七八世紀頃迄は支那ではまだ hi, hia などの如き H の音の存して居たと云ふことを反證して居るものではあるまいか。果して然るならば、希臘(Hellenic)希伯來(Hebrai)などの音譯が出來た當時はまた希の音が S の stage になつて居なかつた時代であることは無論の事。或は又 S になつて居ない地方(即ち南方)の人の音譯であるか、何れかに歸する。兎に角、十七八世紀にはまだ H であつた、今日ではそれが全く S

となつて居るのであるから、その過渡の時代は十八九世紀の交かと思はれる。然らばこの種の S が H に派られることはわかつたが、更に H から K へ廻り得られるかどうか。地理上ではそれが可能である。即ちその一例をあぐると

客家	安南	廣東	温州	寧波	北平	
狹	k'iap	hiap	hap	a	ya	sia

之を歴史的に見ても同じくさうらしく思はれるものがある。例へば休 (siu) の字について之を派つて見るに

休	kiu	漢書 ⁽¹⁾ ……………休	密	kometri. (komedai)
		魏書に所謂……………伽	倍	kometri.
		唐書に所謂……………俱	密	kometri.

休密、伽倍、俱密が同一の komedi の音譯であると云ふことは該博なる歴史地理の考證によつて白鳥博士、山下學士の決定せられた所である。伽、俱が K, の Anlaut を有して居る限りは休も K の音を有して居たのであると思はれる。尤も之には母音の關係がある。魏書唐書に於て漢書にある休を他の同音異字で以てかきかへた理由は如何なる心理上のわけがあるのか知らないが單に音上の故であるとするに休に K の音のあつたのは漢の時代であつたので魏、唐の頃には後に S なるやうな音即

K と S との中間の状態の音 H となつて來たのではあるまいか。その證據に佛典に休 hieou, (pour hou, dans Bahou ratna.) Fan-i liv I.

(1) 宣長翁漢字三音考 (2) 漢書大月氏の條 (3) 唐書西域傳 (4) St. Julien: Méthode pour

これは明かに梵漢の翻譯時代に休が K の音となつて居たことを推察せしむる材料である。

單に休のみが S から K に派ることができるとのみならず今日の檻の字の音 sien についても同様の觀察ができるのである。即ち sien, hien, kien, kian, kan

K の音はかくの如く、H となり、dropped-H の母音となり、H は無聲 (stimm-los) 母音である。或はその H は更に轉じて S ともなる。既に前項の終りであげた例の行 kiang の字音についてもそれが S の stage にまで進んで居ることが見られる。

K	→	H	→	S	
支那	kiang	(行)	hang	ang	sing
支那	kiu	(休)	hiu	siu	
印度	kendhu		hindhu	sindhu	(身度)

(1) Brugmann: Grundriss der Vergl. Gramm. Vol. I. s. 261.

H の音の消えることは音調の力 (Accent) の爲めの「じふあるへく [h]istorian, h[umour]」。又地方

の訛りのことであるであらう。[Fr. v history を Histoir と改むが如く]。併しこの H の音は支那語の場合には I E など (front vowel) で伴はれて居るときは消滅しない。消滅することのあるのは A, O, U (back vowel) 殊に主として A の音に多量やうである。行 hang, ang, 濠 hao ao, の如きものがこれである。併し front vowel の I, E の音には drop しないのみか、H は更に發達して S の音をとる。H 及び S は共に摩擦音 (Reibe-laute) で生理的の側 (genetisch) から云つても極めてうつり易い性質を有して居る音である。それ故日本にも hi 火が si となり又 arimāsen が arimā-hen となきことが如きこともある位である。

それ故 H の音を経る支那の K 音はその實際の語詞の上で之に伴ふ母音の種類如何によつて H から S に来るものもあり来ないものもあるのである。その S に來得可きものは既に十八九世紀の交に於て S にうつつてしまつたから今日 hi, hi' など云ふ音は、國語としての支那語にはない。それ故今の S で K に關係のあるものの沿革を K の側から見ると次の如くなる。

$K' K' \rightarrow H \rightarrow (i) \rightarrow (i') \rightarrow S$

S 音に來る来ないに拘らず、この種の H の音はその性質上、K よりは K' のものに近いのであるから dropped H は無論のこと、S であれ普通の H であれ、これらは K' 即ち韻鏡などの所謂牙音の次清に近き音で、aspirate の伴はない方の K 即ち牙音の清音の方には比較的遠い理屈になる。そ

れ故 K を根本として考へて見ると、その關係は次の如くなる。

$K \rightarrow K' \rightarrow H \rightarrow S$

印度ゲルマン語 (idg.) の方面では Brugmann によると、素との印度ゲルマン語當時 (Uridg. Zeit) には比較的 kh 即 K' は稀であつたらしいとのことであるが支那の語は印度ゲルマン語 (idg.) などと違ふから元始的時代 (Urchinesisch Zeit) は別としても印度ゲルマン語 (idg.) よりは帶氣音の (aspirate) の必要があつたのであらうと想像せられる。併し乍ら音の性質を根本時代にあてて考へると、やはり K よりは K' の方が用ひかたが稀であつたらしく思はれる。それ故 K' を K と H との中間に置いて上述の公式 Formula をつくつたのである。

(一) Brugmann: Grundriss der Vergl. Gramma. Vol. I. S. 265.

iii) $K \rightarrow C$

前項で述べた S の地理上の分布は北平を中心として浙江に及んで居たのであるが、次に C は如何と云ふに K の分布の範圍が S によつて侵されて居たものよりも更に尙遠くに及び今日では福建臺灣に迄もわたつて居る。尙南支地方から北平に遊學にくるものについてしらべて見ても、C の音の發音などは殊に困難を感じて居ることである。北平山東の訛音によると、かういふことがある。即ち彼等は日本の五十音のカキクケコをばカチクケコと發音し、又ツキ (月) のこりをばツチと云ふ

傾きがあつてその訛音は頗る矯正しにくいと云ふ事實がある。

まてみると K の音が顎音化 (palatalize) すると云ふことは北平官話のみでなく殆んど全支にその傾向があるかと思はれる。最もこれは I の母音の前のことであつて若し南支のものをして強てツキ (月) と發音せしむるにはツク^ニ tsu-kuei (子貴) の如くせしむるならばやゝ似た發音が出るわけである。

(2) 伊澤修三氏直話 (3) 服部博士の直話

K の顎音化 (palatalization) は H の時と同様にかくの如く特別の場合で、I, E など (front vowel) に伴はれて居るときに限られて居るのである。けれども、時として ka (家) なども顎音化 (palatalize) される。それには I を挿入して kia から cia として居る。然し中支地方は之と異り家計 cia si をば漢口では、また kia ki と云ふ音で残つて居るなどは之に考へ合はす可きものである。

(1) Arendt: Handbuch der nordchin. Umgangsspr.

今顎音化 (palatalize) して C の音となるより前の K 音が記録の上では如何に現れて居たか云ふことを見るに、やはり K で多く現れて居る。

祁 ki 漢 書 祁連山 Kükler 天山
拘 ku 魏 書 卑拘 (hiko)

勣 kin 魏 書 勣 Tigin

拘 ku 大唐西域記 拘謎陀 Komedai^{Pal.}

屈 ku 唐 書 屈丹 Kustana

(女狎三藏の瞿薩旦那)

基 ki 元 史 突耳基斯丹 Turkistan

結 ket 結骨 Kirgis.

尙佛典に現れたるものでは、次の如きものがある。皆 K の音譯である。

迦 ka 奘哦囉迦 Añgaraka

究 kiū 究磨羅浮多 Koumārabhoṭṭa

拘 ku 拘蘇摩補羅 Kousoumapoura

佉 kio 吠舍佉 Vaiśākha

これらの K にあててあるものの今の音は次の如く北平で發音せられる。

祁 či 勣 čü 屈 čü 結 čie

句 čü 拘 čü 基 či 迦 čia

究 čiu 佉 čü

(1) Arendt: Handbuch der nordchin. Umgangsspr. (2) 漢書武帝紀 (3) 後漢書烏丸傳

以上は主として音譯の上から *ク* の古韻を見たのであるが又文字上から古韻に派することも出来る。一例を奇 *ク* の字にとつてその古韻が *K* であることを見るに、

今日奇は崎、騎、騎、琦に於いても何れも *ク* である。併し奇 *ク* と異字同義のものを求めるに、鬼、槐、媿、魁、危、愴、詭、跪、貴、潰、傀(以上 *kuei, k'uei*) 怪、塊、槐(以上 *kuai, k'uai*) がある。二次的以後の義に程度上の差はあるにしても少くとも、鬼、危、貴、怪は奇と根本に於て同義であつて、Awful, Formidable, Exciting, Bear. の概念 (Begriff) を現す語詞から分岐して來たものであるまいか。龜即ち龜 *kuei* 等もそれを具體的の動物にあてたまでであつてやがて神話、童話の起る源をなして居るものと思はれる。日本では奇は *ki* であるけれども朝鮮では *keni* 伊澤式の寫聲法でかけば *ハイ* (ひらたい *ハイ*) である。これによつても奇が意義のみでなく音の點に於ても鬼、貴、危、龜に連絡のあることがわかる。然るに鬼の音 *kuei* は鬼の諧聲文字なる槐塊にもとの *kuai* の音がのこつて居る。又奇と同義の怪に *kuai* の音がある。これらは音の性質から見ても *kuei* よりは更に古い形と見られる。即ち奇は *kuai* で *kuai* から *kuei* を經て *ki* となり *ク* となる。而して此の畏敬 (Awful) の義の語 (word) は日本などにも古くから傳はつて居たものである。即ち *ke* として知られて居るものがこれである。こは Ainu, Altaic, Malay の方面から説けないとする

支那起源の語かと思はれる。即ちそのケとは

天變しきりにさとし世の中しづかならぬはこのけなり⁽¹⁾。けしからず腹ぎたなくおはしけりなど云へば。[衛門こそけしからずなりにたれ、たといひはやすやうにいみじき御心をいふとうらみたまへば。]などに於けるけ⁽²⁾是れなり。

(1) 源氏物語 (2) 枕の草紙 (3) 落窪

こは日本に傳はるとも既に *kuei, kue* ではないつたものではあるまいか。書紀などに當麻蹶速を *Tagima no kue haya* などと讀んで居るのを見てもわかるが如く後世日本の方で *kuei, kue* を *ke* としたのであるかも知れぬ。併し根源を云へばこの *kuei* も *kuai* から出たものと思はれる。故に怪しき奇なるものは *kuai* の音である。尙 *ク* から *kuei* に派りうるものには『其』の字がある。朝鮮音 *kuei* 参照。

石鼓文

(其) (其) (其)

其旂越帛魚

其其其其其

黃帛其鱗などあるものより抄録す。其の字がもと有形名詞の語を符號化 (Symbol-)

lize)して居たことは明かであるが、なぜ kuei の音を取つて畏れの念 (Begriff) を現はす音の類義語 (Synonym) になつて居たのかわからない。石鼓に見える所ではその字の下部に 丩 即高杯の如きものがある。これは皿即ち 丩 の簡単なものと見えるが或は上古の支那人の思想として Awful な天でも拜する時の供へものの臺になりとして居たものであるか。要するに根源はわからない。其の諧聲で kuei の音をとつたものは葦、期などあまたあるけれども、また kuai の音で存して居るものは一つも見つからない。とにかくも古音 kuei の其は日本で ku となり今の支那で ku となつて居るのである。

次には氣の *xi* は愧にからうじて古音の俤をとどめて居る。即 kuai (kai は訛か) から kuei となり (朝鮮音)。ke (本牟智和氣御子) となり。x (氣) となり。今は *xi* である。帶氣音 (Aspirate) はうごくから確にわからないが韻鏡などに牙音次清に收めてある (内轉第九、開、) 所から見ると少なくとも八九世紀頃の江左音では氣が帶氣音で呼ばれて居たことが察せられる。併し本來の意義が氣息 (Breath, air) のつよいものを意味して居たのであればこは尙古くから帶氣音であつたかも知れない。

(1) 石鼓釋文本金石萃 (2) 古事記傳 (3) 磨光韻鏡

以上鬼、貴、奇、龜、危、其、氣などのうち鬼、貴、龜、怪は合口音として知られて居るけれども奇、氣などは開口音となつて居る。合口音は韻字が *ki* で始まるものを云ふので開口音はそれ以外の音で始まるものを云ふのである。これによると韻鏡のできた晩唐の江左には已に奇、氣には kuei な

どの *ki* の次に *ki* の音がなくなつて居たものと見られる。即ち奇も、氣も kei, ke, ki であつたと思はれる。次に韻鏡に此れを牙音にをさめて居るのは語頭音が *ki* であつた證據の一つとなる。朝鮮音、日本音を参照し又文字上の比較をなす時はその *ki* 音であつたことは殆んど疑はれぬ。

斯様に今日 *ki* で古くは *ki* であつたことの辿られるものはよほど多いのであるが、次に然らば變化の時代はいつが主として過度時代となつて居たか。

(1) 磨光韻鏡 (2) 猪狩學士、漢文典

康熙年間の終りに (1700) 出た音譯によつて見ると、まだ *ki* にうつらないで居る *ki* が見られる。

例へば中山傳信録に見えるもので

急 <i>ku</i>	排姑亦急	はやくいく
急	又急	ゆき(雪)
急	倭急拿必周	おきなはびつ
其 <i>ku</i>	屋其惹	おきなは
其	那其	なき(啼)
其	亞立其	ありく(歩)
氣 <i>ku</i>	氣摩	きも(肝)

氣	火氣	ほうき
吉	吐吉	とき(時)
吉	兀煞吉	うさぎ
鷄	鷄朶	けいとう
鷄	脚鷄母魯	かきもの no=lo
鷄	思鷄	すぎ(杉)
介	法介依	はかり li=yi
介	福子介	ふつか
加	哈加馬	はかま

北平音では急、吉、鷄は *ci* 其は *ci* 加は *cia* 介は *cie* であるのに同書では未だこの音に来て居ないで *K* であらはれて居る。併し以上の例のうちに *mono* を音譯するに母魯 *mo* として居る。今の湖北省あたりの音にも現に *L* の發音と同時に息を鼻腔 (*Nasenraum*) に抜く爲め *N* のひゞきを出して居る。羅甸を *naten* など云ふ。その例で母魯を *mono* としたものであるならば中山傳信録の音譯者徐葆光(翰林院編修)は南方の地方の音を以てして居ると云ふことになる。(徐葆光は康熙五十七年琉球國世子尙貞を冊封して國王となした時副使として琉球に來つた人であるとのこと)。若し中

支地方の音で音譯せられたとするとあてにはならぬが、もし北平(燕京)の音でうつしたものであるならば以上の音譯も當時まだ *K* が *ci* に進んでは居なかつたものと云ふ目あてがつく。併しこれはきめにくい。

日本に北京を *Peking* と云ふのは南京 *Nanking* に類推して京を *king* とよむのであるか、所謂宋音以來の讀み來りによつて居るのであるか。極めて近い頃の音によれるならば *Peking* で這入つてきた筈である。他の方面で禪宗の語などに看經を *Kan king* とよんで居るやうに既に *king* の音が傳はつて居るから *cing* はまた *king* 以上に勢力を得て居なかつたであらう。宋音(又は唐音)は唐以後宋元明清の音を凡て呼べる故 *ki* の宋音をいつの時代の音ともきめにくいが恐らくは支那で十七八世紀頃迄は存し行はれ、他方に *hi* が *si* となつた頃、この *ki* も *ci* にうつつたものかと推察せられる。音の顎音化 (*Palatalization*) は十八世紀の後半以後に最も多いのであるから、この *ci* が *K* から來たのも十八九世紀の交にあるものではあるまいか。

㉒ *K* → *W, Y*

支那語で *Awful, Danger* の *Begriff* を現はす古代音 *kuei* (又は *gwei*) は前項に述べたる如く或るものは *ci* にうつつたが又或るものは更に別の形をとつて *wei* となつて居る。

古 *kuei* → 今 *wei* 危

古 Guei → 今 wei 魏

又日本に傳はつて居る字音で K から W の出て居るものは奈良朝以來多々ある。例へば回の字について見ても次の如きものがある。

山澤回具乎、(萬葉十一)、苗 (倭) 回禮 (下)

(1) 國歌大觀 (2) 倭名抄 (3) 破衲の下學集

支那に於ても回を W にあてて居る音譯がある。即ち回鶻 (Uigur) をうつして居るものにそれが見られる。今次下に歷朝の音譯にこれがいかうつされて居るかを見る爲めに、これをならべてみると面白い結果が見られる。

- 後漢書……………伊吾廬……………Uigur.
- 隋書……………伊吾……………Uigur.
- 隋書……………烏護……………Uigur.
- 新唐書……………回紇……………Uigur.
- 新唐書……………韋紇……………Uigur.
- 新唐書……………袁紇……………Uigur.
- 元朝祕史……………委兀兒……………Uigur.

西遊記……………畏午兒……………Uigur.

(1) 新唐書 (2) 山下學士、セレス、セリカに就ての考 (史學雜誌十七篇)

伊、烏、韋、袁、委、畏が凡て唇のまるめ方 (Lippenrundung) で始まる音とは云へないけれども、伊の外は U 又は W で始まる音であるから、回がそれと同じく W, U の語頭音の音として用ひられて居たことは略察せられる。これは今日福州あたりの護戸の音 hon が寧波で wu となつて居るが如く語頭音 H が消えたためあとで W が發達したものであらう。この種の例はまた會 hui から wi が出で穢 hui から wai が出で居るが如くいくらでもある事實である。併しこれらの H はもと K 又は K であつたのであるから結局 W は K に關係のあるものである。實際は ku の K が漸次かゝるくなつて drop してあとの U が W となつたのである。

W から K に派生することが出来る類例について今少しく他の文字を見るに、今日 W の音としてのみ知られて居るものにもその實 K を Initial として居たものが可成りある。例へば

- 于 ku → wu ……………yü (北平官話)
- 越 kuot → wot ……………yüe
- 王 kung → wang ……………wang
- 爲 kuai → wei ……………wei

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

回 kuai → we ……………hui
 會 kuai → we ……………hui

以下に于、越、王が語頭音 (Initial) に K 音を有して居たことの證據をあげて説明して見ると

漢書 于闐 Khotan (藍市城)

單于 Tänguri (當戶)(善于)⁽¹⁾

唐書 于填 Khotan⁽²⁾

(大唐西域記の瞿薩丹那 Kustana)

(1) Hirth China & Roma Orient. P. 151.

(2) 唐書高僧傳

白鳥博士によると前漢に於て于の音が ku, gu の音であつたことは争はれぬ。冒頓單于、老上單于、などの于は又善于などの于と同様であつて Khotan の kho 又は Tängur の gu をうつつして居るのであるとのこと。

K 音の消ゆることは已にも云つた通り、回、會、穢又和、爲などに於て明かな事實であるが其の K が消えてすぐ U, W があとの母音から發達して出たのではなく、于の中間の stage に ku のあつたことは回 hui 會 hui 和 ho (Halland) と同様であると思はれる。

前漢時代に K であつて唐の時代に H となつて居た休が明末清初に尙 K であつたものと思はれ

るが (K → Y の項参照) この休を以て于の字の音を説いて居るものがある。即ち正韻によると于は吁と普通で休居切とある。これは元明の時代に于の音が hu であつたことを示して居るのである。それをば韻鏡には内轉十二、合、喉音 (清濁) の部に收めて居るから晩唐の江左音では或は U となつて居たものか。まかし韻鏡では多くの場合に所謂牙音と喉音 (H 及母音) の範疇を混同して居る恐れがあるのであるから必しも母音 U の場合でも信用はできないのである。韻鏡の方は別問題としても兎もかく于の音 U の前の状態に hu があつたことは認めなければならぬ。更にその前の状態に K 即ち K' があつてその前が K の音である筈であるから。果して K の stage の時が前漢であつたか否かはきめにくい書つて于に ku の音のあつたことは考へられる。

次に王の古韻が kung であつたかと云ふ考へがあるからそれを述べよう。

宋の丁度が編んだ集韻によると王于放切とあるけれども、宋の時に于に K の音は考へにくいから于放切とあつてもそれを古音とは思はれない。況して同書に于を雲俱切で解いて居ることに徴してもそれは考へにくい。王の字が wang として知られて居ることは日本でも王仁の語で古くから知られて居る。恐らく支那本土に於ても随分古いことであらう。現在の南方諸方言でさへ凡て W のみの語頭音を採つて居る。それ故現在の音からは K の手掛りは實際の言語の上に見つからない。普通の古韻として知られて居るものにも亦 K 音は見つからない。

まかし乍ら王と云ふ支那語の根本を考へて見ると、王なるものは所謂帝王であつて、天の命をうけた大なるものである。白鳥博士によると支那で古い時代に宏大なることを kan, kun, hang の音で現はして居ることである。宏の kung, hung 廣の kuang などは慥かにこれに關係がある。

古來支那人が天子又は人君或は之に關係ある words を如何に云つて居たかと云ふことを先づ見てみる。

kung	公	kun	君
kung	宮	kun	鯀 (大禹の父) (君の義か大の義か)
kuang	光	kuan	官
k'uang	皇	kuan	冠
kung	貢	kung	功

などがある。K. に對して ung, uang, un, uan の韻 rhyme の上の差のあるのは意義の種類の上の差に伴つて居るものである。かくの如く人君たるもの又は之から二次的以後に發達したと思はれる意味の言葉は皆 K 音と n, ng の韻とを有して居る。假りに Schema であらはずならば、

√kung……宏大又は人君の義

となる。今王の音 wang について考へるに獨り王のみがこの形式 (schema) に符合して居ないの

は疑ひの餘地がある。何となれば、

王の古音がワン wang でない理由は、

一、王の音 wang の韻 (rhime) ang は schema に類似を有し、殊にワン wang の音は (k') uang の音に音聲上の關係がある。

二、王の字の起源は schema の音のそのまゝである。即ちもとは kung であつたと云ふことが考へられる。そのわけは王の字を分解すると工と一となる。工は音 kung で功、貢などのときには即ちその音によつて發音せられて居る。工は天地間の連絡を象つたもので王者と云ふものは天の命を受け天徳によつて民衆を化し治めてゆくものである。それ故天の子であると云ふので工の天地間の中央よりは稍天の方に近い所に一線を引いて王者を象つたもので、それが即ち王である。後世ではその意が忘れられて王の如く書く。がそれは玉の字と混ぜられて王の原義が失はれたわけである。

王と同じ概念 (Begriff) を現はして居る語詞は凡て W ではなく kung, kun などの如き形であること。

三、王の字を一部分として居る漢字に k'wang, huang 又 kuang の音の出で居るものがある。即ち k'uang, huang 皇 (皇)

kuang. 匡筐 (狂は漑の略で別なり)

(1) 支那天子の名義とその古代祭天(史學雜誌十六の一) (2) 説文

以上のわけで王 wang は眞の古音ではあるまいと思はれる。

然らば獨り王になぜ W で始まる wang と云ふ音が出たか。此れは wang はもう uang であつて、その前は huang 今一の前は k'uang, kuang である。huang は今皇(皇)に残り、kuang は、光、廣に残つて居る。併し kuang は恐らく kung の U が Ablaut で ua となつたものであらう。今日でも穢の hui が uai, wai となつて居る如く、この例は少なくない。それ故王 wang の根源は kung で公 kung と同音同義と思はれる。王、公の稱呼たる kung が先づあつて功 kung 宮 kung 貢 kung などは二次的以後の發達であると思はれる。

(3) 中山久四郎氏玉の起源

君 kun, kum は然らばなぜ王公の kung から韻が違つて居るかと云ふに爰に單に音の上のみから説くと final, -m, n, ng は支那では不動のものでないと云ふことがわかる。genetisch にも亦音のひびき方から考へて見ても互に轉じ得る性質の音であると云ふことがわかる。例へば現在のもので見ても次の如きものがある。

安南 福州 北平

函	ham	hang	han
今	kim	king	cin
貪	tam	tang	t'an

又歴史的に古い方を見ても、凡の音 tam によつて居る風フウの字が tang の音となつて居る例が見られるのである。

それ故君 kun, kum が kung 即王公からわかれて出たと云ふことも可能 (probabilities) である。

(日本の kimi, kami, (君) 神) アイヌの kamui (熊) は朝鮮語その他ウラル、アルタイ語 (Ural Altaic) の方面に精細なしらべをして見なければわからない。然し kam, kim は支那の kam, (kang, kun) に全然無関係のものではあるまい。印度歐羅巴の König に對する關係よりは支那の kung の方に近い關係があると云ふ可能 (possibilities) はある。さかしてこれはほんの想像である。)

(1) Giles: Chinese English Dictionary. (2) 説文解字

次に越の古韻が kuot であつたかと云ふことを述べよう。現在、方言の上では越 yie に kuot の音は見出されない。然るに隋の陸方言の廣韻によると越王伐切、又作越とある。越を越とすることのあるのは音が同一の爲めであるとする。越の音が即ち越の音と認められる。然るに同書に越は古滑切とあり、これによると古音は韻鏡でも牙音清であるから越の音は kot と見られる。日本に傳はつた

古樂十二律のうちに盤涉(バンジキ)壹越(イチョツ)と云へる越 kot は、即ちこれである。又、邦語の kos-u (koyu) に、Ainu 語説があり、越の國などの kosi も Ainu 語 kot であらうと云つて居るけれども、又一方から見ると越の字の古いものと音 kot が既に日本語となつて居たのかも知れない。語頭音の T を S とするのは韓語の 𪛗 kat を日本では kasa (笠) とするやうに日本の側の訛りと見て少しも差支はない。ともかくも越に古韻として K の語頭音のあつたことは十分推察せられる。

然るに又佛典の音譯などにも越を以て Dat の音にあてて居る。こは kot の K が破障音一つに破裂音 (Verschlusslaute) で P と轉じて居たのかも知れないけれども、それよりは寧ろ K はそのまま消滅する方に近づいて、あとに残つた語頭の母音 (vowel Initial) に唇の丸め方 (Lippenrundung) を起さしめるやうなものがあつた爲めであるまいかと思はれる。

檀 越 Danapati⁽¹⁾

般 庶 越 師 Pancha Palishd (法顯傳)

迦 維 羅 越 Kapilavasti (後魏水經註)

この第三の例に維が pi にあててあるけれども元來 pi の音が維にあるのではない。wi, wi が本音で譯者の個人的の訛で pi の音にあてたものと思はれる。越が P の音にあててあるのも全くこれ

と同じ現象かと思はれる。即ち越は pat でなく wot, vot であつたのではあるまいか。日本でも越智を wot-ti とよむ。越 wet はなまり音であつて、その本音は K を語頭音とする。

(1) 金澤博士演義

(2) 山中學士及 St. Julien: Methode.

かく越の音に kot と wot とがある。之を解釋するには kot を古韻として K が K' H となりその H が drop すると見るならば、あとの形から wot が生じうるのである。が然しむしろ始めから knot の如きものではなかつたか。即 knot が huot, not となり更に wot となつたと見られる。これは會 kuai からして wai, we が出で、于 ku からして wu が出るのと同様である。故に越の眞のもとの古音は knot であつたらしむ。

以上にあげた K から脱化して發達した W の音は今の北平官話では Y となつて居ることがある。今それを Y となつたもの、及び W となつたものにかきわけてみるならば

1. K → W

危 kwei, k'wei → hwei → wei

巍 guei, guei → hwei → wei

爲 kwei, k'wei → hwei → wei

回 kuai, k'uai → huai → wei

會 kuai, k'uai → huai → wei
 穢 kuai, k'uai → hui → wei
 王 kung, k'uang → huang → wang
 二・K → Y

于 ku, k'u → hu → wu or yu
 越 kuot, kuot → huot → wot or yüe

の如くなる。

KがHを経てYに至るものは尙他に類例が少なからずある。併し多くは中間のHの状態がSの音に顎音化 (palatalize) されて居る。以下にその普通なるものを擧ぐるならば

古音

K → S → Y

gak 樂 樂 鏢 藥
 kok 谷 谷 俗 浴
 kuan 亘 喧 宜 垣
 kyo 興 舉 喚 譽

knng 公 公 松 翁
 kyang 羊 羌 祥 洋
 ga 牙 芽 邪 鴉
 kin 勻 均 酌 (蘇均切) 韻
 kei 殼 磬 聲 齒
 ki 止 企 齒 穢 (w)
 kuai 歲 穢 歲 穢 (w)

備考

□は未だ適當な字音を發見せざるにより暫くかくす。

此の類のものを尙拾集すれば

K → S → Y

kit 喬 橋 □ 鷓
 kuug 莢 螢 螢 □ 榮
 go 吾 衙 梧 □ 衛
 ken 肩 鵬 絹 □ 捐
 kuei 奇 崎 奇 □ 倚
 kun 軍 軍 □ 暈

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

ki	支	岐伎	枝	□
ki	只	枳	只	□
giao	堯	曉堯	燒	□
ki	旨	耆	指	□
kei	慧	慧	慧	□
ken	僉	險劍	僉	□
giak	朔	遡逆	朔(朔方)	□
kun	川	訓	川、順、巡	□
ket	契	契(契丹)	契(司徒)	□
ko	虜	虜虎	虜	□
kon	系	鯀(鯀)懸	孫	□
ku	區	區	區	歐

N, B (注意)

1. 川の古韻は *sen* でなくて、*kun* なること(四七八頁参照)。

川の音は巡順などでは *sun* であるが支那の *s* は多くの場合に *k* から出て居る。然らば *sun*

に對して *kun* があるかと云ふに、訓にそれが残つて居る。支那人がもと水に對するものに名をつけるのに *kun* を以てしたものは外にある。例へば江の古音 *kung* の如きもの、又洪の古韻 *kung* の如きものがそれである。

従來の説では銅は同とひびく故に、同の聲、江は工とひびく故に工の聲に由つたものであると云つて居るが、元來水の大いに集まる所を *kung* と云つて居たものであつて、必ずしも水の音によつたのではないと思ふのである。

釋文、江洪也。小江流入其中所公共也。

禹貢、岷山導江、などある。これによると江は海の入江と限らず水の共に集まる所なれば江即共 *kung* と云つて居たのである。朝鮮音江が *kang* と云ふは *kang* の訛音が傳へられた爲めである。後世の *kiang*, *ciang* は皆 *kang* の方から出て居つて本來の *kung* は洪 *kung* と訓の字の川の音 *kun* に残つて居るのである。語尾の *ng* と *n* とは普通に支那にある轉換であるから川 *sun* (*sen* は訛り) のもとは *kun*, *kung* であつたので川、江、洪はもと相似た音であつたと思はれる。

二、鯀、*kon* 大禹の父の名。この原義は宏大、又は大水の義か。*kon* と云ふ固有名詞は如何なる意義であつたか。傳説に徴すると舜の時に鯀は諸侯の間に勢力を有して共工、驩兜、三苗と結ん

で帝舜に反抗した位の強大のものであったとのこと。白鳥博士によると古代の *kan, kun* は大いなること、盛なることとの義を有し居ること。それ故 *kon* の名はこの意味ではないか。或は疑ふ、鯀は失敗では了つたが大洪水の治水の重任に先づあたつた人であるから水に因める *kun, kung* に関係のある名前を之に附したものと臆測される。

三、螢、榮は榮より出た文字で（説文）もとは光り榮えるの義であるが、その古音は如何と云ふと螢の今の音は *yung* 榮は *jung* であるが、もとは光 *kung, kuang* に関係のあつたものかと疑はれる。斯様に *kung* は多義である。従つて支那には古くから帶氣音 (Aspirate) や音調 (Tone) の上の區別の必要があつたであらう。

以上 *K* → *H* の項以來、*K* → *W*, *Y* に至る間で述べ来たつたものをその種類わけにして且つその轉換した音綴の数の多いものから統計の示す所によつて列べて見ると、次の如くなつた。

K, K' から脱化した音：——

古音	今音	例
<i>K</i>	→ <i>Ç, Ç'</i>	恐 <i>K'ung</i> 兇 <i>Ç'ung</i>
<i>K</i>	→ <i>H</i>	虹 <i>kang</i> 虹 <i>hung</i>
<i>K</i>	→ <i>S</i>	橙 <i>k'an</i> 橙 <i>shen</i>

<i>K</i>	→ <i>Y</i>	越 <i>kuot</i> 越 <i>güe</i>
<i>K</i>	→ <i>W</i>	王 <i>kung</i> 王 <i>wang</i>

計 1699

以上五種類のうち *Y, W* となるものは既に大體の例を多くあげて置いたから初めの三種のものについて詳らかにその音綴を掲げておく。

K, K' → *C, C'* = 726

<i>i</i>	<i>çi</i>	94	幾鷄極	<i>çi</i>	53	騎其起
<i>ua</i>	<i>çua</i>	2	樞爪	——	——	——
<i>ia</i>	<i>çia</i>	45	傢甲假	<i>çia</i>	10	呖卡踏
<i>iang</i>	<i>çiang</i>	25	江講港	<i>çiang</i>	13	強腔羌
<i>iao</i>	<i>çiao</i>	55	郊嬌教	<i>çiao</i>	11	喬翹競
<i>ie</i>	<i>çie</i>	47	街傑戒	<i>çie</i>	5	伽佉茄
<i>ien</i>	<i>çien</i>	49	間見諫	<i>çien</i>	20	騫欠謙
<i>ih</i>	<i>çih</i>	1	噤	<i>çih</i>	3	喫吃絺
<i>in</i>	<i>çin</i>	31	今緊近	<i>çin</i>	12	琴欽禽

ing	cing	32	經景境	c'ing	13	慶輕頃
iu	ciu	17	究救糾	c'iu	18	丘求球
iung	ciung	6	窘炯罔	c'iung	11	窮瓊穹
ü	cü	52	菊局居	c'ü	28	衢曲區
tian	čuan	17	卷眷鵠	c'üan	14	犬勸倦
tie	čüe	27	決譎佩	c'üe	10	缺確卻
ün	čün	8	軍均君	c'ün	3	羣裙囡
uang	čuang	1	釐		226	
		500				

K, K' → H = 456

ha	4	哈蛤蝦	hou	20	喉厚後
hai	13	害還骸	hu	64	忽壺滬
han	35	韓罕漢	hua	26	花話畫
hang	12	航巷穉	huai	8	壞淮懷
hao	25	毫好浩	huan	42	驪幼換

ho	42	喝賀鶴	huang	35	鳳黃荒
hei	1	黑	hung	35	覺洪紅
hon	7	很痕恨	huo	26	活火貨
hong	12	橫衡亨			
			456		

K, K' → S = 286

si	57	蔣養系	sing	16	刑行興
sia	28	轄夏匣	siu	6	休貅杰
siang	18	香向降	siung	7	兄凶胸
siao	18	孝効曉	siü	9	虛許旭
sie	27	協解駭	siuan	26	亘陷喧
sien	53	問閑險	siieh	6	學血靴
sin	6	欣馨昕	siün	8	勳訓獮
			286		

以上 C, C', H, S の三種のもので音綴の数の多いものから列べ直すと主なものは次の通りである。

çi94.....	幾	hu64.....	滬	si57.....	禧
çiao55.....	教	ho42.....	喝	si'en53.....	險
ç'i53.....	起	huan42.....	換	sia28.....	夏
çü52.....	局	han35.....	韓	sie27.....	協
çien49.....	見	hang35.....	黃	stian26.....	喧
çie47.....	街	hung35.....	紅	siao18.....	孝
çia45.....	家	huo26.....	貨	siang18.....	向
çing32.....	景	hao25.....	好	sing16.....	行

以上は凡て K, K' が脱化して變ずる方ばかりについて云つたのであるが、次に然らばまた脱化しないので K, K' のまゝで居ると見られるものは如何。その音綴の種類を先づ見てみると S, C の語頭音の場合とは違つて、寧ろ A, O, U など (Back vowels) をあとに取つて居るから H の語頭の場合によく似て居ることがわかる。これに依つてみても H の音が K, K' に直接近い關係があることが察せられる。

K, K' に残つて居るものはその音綴の数が 608 ある。即ち

ka 4 受嘎哈 k'a 2 下哈

kai	13	改垓蓋	k'ai	12	開凱愷
kan	34	敢感干	k'an	21	看勸刊
kang	13	岡肛橫	k'ang	11	康杭慷
kao	22	高膏誥	k'ao	21	攷拷靠
ka	39	攔歌腦	k'a	39	科顆刻
kei	1	給	k'ei	0	——
kan	6	長根互	k'an	6	懇艱肯
kang	18	更庚耕	k'ang	6	鏗坑硜
kou	30	勾姁購	k'ou	16	口寇叩
ku	54	姑觚鼓	k'u	19	枯庫哭
kua	18	瓜刮掛	k'ua	7	跨跨跨
kuai	6	怪拐乖	k'uai	11	快塊膾
kuan	35	官卯館	k'uan	3	寬款欸
kuang	7	光廣逛	k'uang	15	匡況壙
kuei	28	龜歸規	k'uei	28	揆虧魁

kun	7	一 鯨衰	k'un	19	崑崙困
kung	28	功弓攻	k'ung	9	空孔恐
kuo	27	國鍋郭	k'uo	8	括濁廓
		340		268	
608					

(1) 圖とかくは則天武氏の新字(黑板博士の講演)

(2) 濁は圖の俗字

今音綴を作る上に H の音と K 音とがいかに似て居るかを數の上で比較すると次の如くに見られる。

一、多い方からの比較

ku	— 54	— 穀	hu	— 64	— 滬
ka	39	個	ha	42	喝
kuan	35	官	huan	42	換
kan	34	敢	han	35	韓
kuai	33	歸	huang	35	黃
kuei	28	窺	hung	35	紅

kung	28	功	hou	26	後
kou	27	勾	huo	26	貨
kao	22	告	hao	25	好
k'ao	21	攷	hua	25	花

二、少い方からの比較

kei	— 1	— 給	hei	— 1	— 黑
kuai	6	怪	han	7	恨
ken	6	根	huai	8	壞
k'ang	6	坑	hang	12	橫
kuang	7	廣	hang	12	航
kang	13	岡	hai	13	害
kai	13	該	huang	35	凰
k'uang	15	遊			

かくの如く殆んど全くその順序が一致 (coincide) して居る。如何に支那語では K, (K') が H と音韻上で相近いかかわかる。南方方言に於てかゝる一致が見出されるか、どうかは、しらべなければわか

らないが、國語としての北平官話には確かにその K, H 間に一致がある。烏居龍藏氏の直話によると支那語塞外の蒙古語に於てもこの K と H との轉換 (interchange) は極めて親密で地方的の區別から云つても東部蒙古 (Khalkhas, Tumets, Tsakhars) の K, kh は Buriats, 又は西部蒙古の H にあつて居るとのことである。

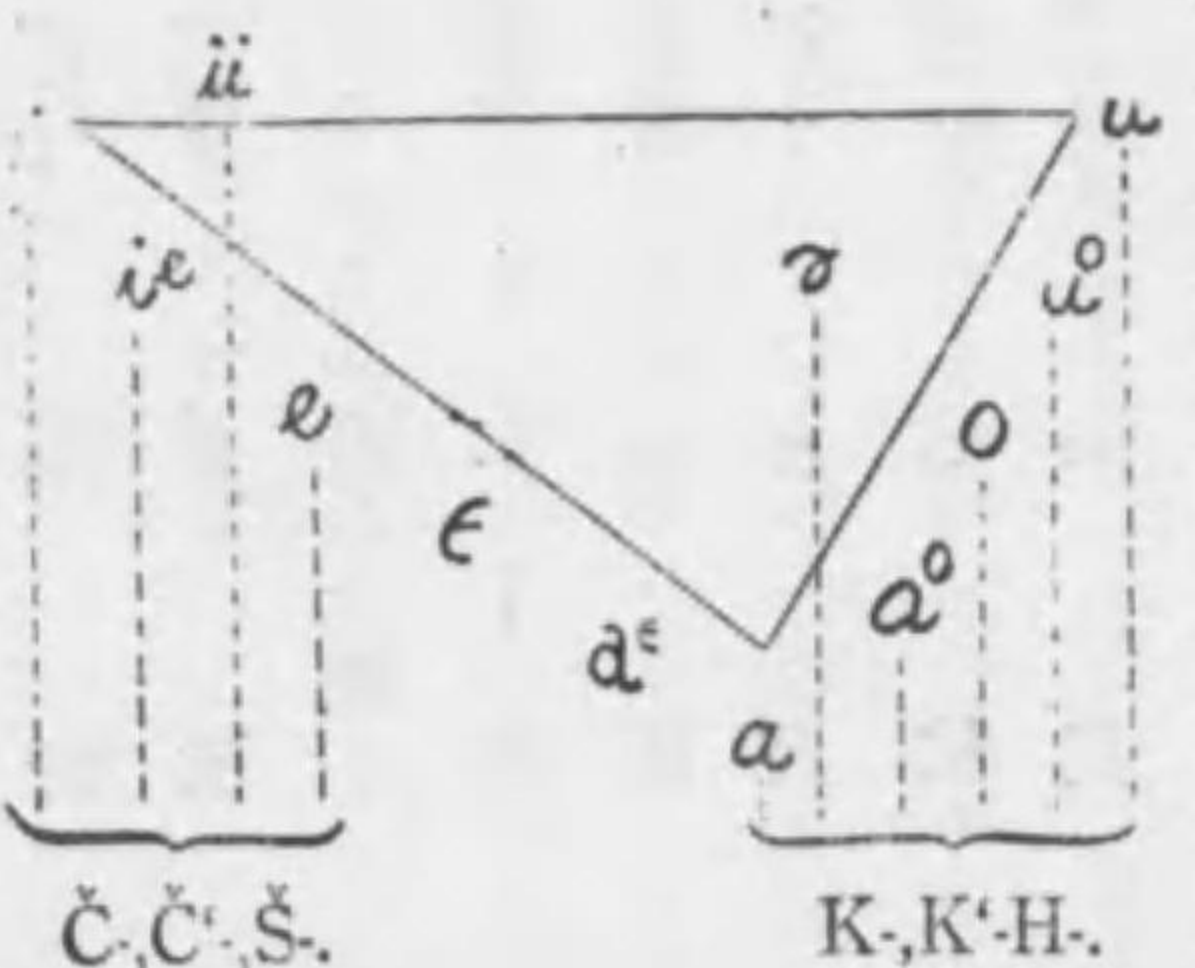
以上述べ来たつた多くの統計を本にして K, K, H 及 S, C, C' が母音に對する關係を母音三角形 (vocalic triangle) にあてて見ると自然に二様にわかれる。即ち茲に示す通りになる。

母音のしるしは主として獨逸の音聲學者 Trautmann の方式 (system) からとつたのである。

圖中解説

U に當るものは給の kei が一つあるのみで idg の a^o である。此の U (a) は殆んど國語としての支那語には見出されない。

(1) Trautmann, M. Die Spr. laute im allgemeinen und die Laute.



この圖の示す通りに、

K, K', H は三角形の a—u 側 (Basis) の全部の音と及び中立母音 neutral vowel の e と結合す

る。

S, C, C' は三角形の a—i 側 (Basis) のうち i から e あたりまでの母音と及び ü の音と結合する。

音の轉換は發音機關 (Genetisch) 及聲調 (Stimnton) の上で、いつもきまつて存して居ると云ふものではない。言語上の發達、音韻の轉換 (wechseln) することは常時あることである。然るに是迄各その範疇をきめて統計まで取つたのは嚴密に云ふなら不可能のことをなしたと云ふ譯ではあるが、そこは便宜上普通のものによつて斟酌をして統計をとつたのである。その参考したものは主として Wade の式によつて著者が自分で今日の北平音に就いてしらべたものである。

K 音放を終るに當つて日本のカ行音に關係のある諧聲文字を列舉しておく。諧聲文字の音要素 (phonetical elements) を多くの文字からしぼり上げると十分の一の數に簡單にせられるのであるが、之を音の側からしぼり上げると更に一層簡單なものになる。少くとも百分の一位の數に歸してしまふことが出来る。以下にあげる例で解けないものは既にあげた K—H, C, S, W, Y 又は後に云ふ K—L で解ける。

ka 段 假瑕瑕蝦遐霞霞

加 伽枷珈架袈袈嘉

可 何荷河何苛
家 傢稼嫁
夏 榎厦

(1) 此の表について更に詳細は別著『漢字音の系統』參照

kai

圭 桂哇鞋卦奎恚街闐
逕脛經輕勁頸逕莖

奚 溪峻谿雞鷄

京 景憬鯨鯨

开 刑形荆開 (小篆以前起源を別にす)

戒 械械誠

皆 楷偕諧

介 价界疥

kan

干 汗奸杆肝刊竿旱桿幹捍岸

咸 感憾喊撼憾鹹鹹

甘 柑紺紺疳

監 檻艦鑑

厂 雁鴈原

kang

工 江杠缸缸缸缸項缸缸缸缸缸貢楨鴻空攻

岡 崗綱鋼剛

亢 伉抗炕炕伉航

康 慷糠穰

行 桁衡

kao

高 稿稿蒿嚆嚆嚆敲敵膏藁豪濠毫

交 校狡較較較較效倣郊

告 浩皓皓皓皓皓皓皓皓皓

巧 巧攷鴉鴉號

kak

各 格恪客閣

kap

甲 押岬狎匣鴨(ap)押(ap)

合 恰閤恰給

kep

夾 狹峽挾挾莢頰

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

劫 協協脅
 決 決訣訣
 舌 活刮刮廣濶 (もと刮は刮、活は活)
 傑 傑傑
 僉 僉僉
 兼 兼兼
 現 現現
 健 健健
 共 共共
 己 己己
 支 支支
 几 几几
 奇 奇奇
 喬 喬喬
 董 董董

今 吟吟
 斤 斤斤
 久 久久
 九 九九
 求 求求
 凶 凶凶
 及 及及
 吉 吉吉
 口 口口
 古 古古
 良 良良
 昆 昆昆
 骨 骨骨
 區 區區
 果 果果

第三章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

化	訛靴花貨囿
品	禍過鍋鍋
kuai	回 徊廻蛔洄蛔
會	儉儉繪繪繪
kuan	灌權權權謹歡勸觀罐
官	棺館館菅管倌道
卯	辨寬聯關
kun	君 裙郡群窘
熏	燻熏勳
kuang	廣擴礦鑛橫曠曠
光	恍恍晃幌統
共	供拱拱烘哄洪洪閏恭港
kung	肱絃翊 (Y雄)

G 音 攷

國語としての北平官話には今日 G 音を有して居ない。

我原不知道⁽¹⁾ Wo Yuan pu ÷i tao. 全く知らない。

不用害怕沒甚麼危險的 Pu Yung hai p'ai; mei semo wei sien ti. 恐れるな、何も危いこと
はない。

海面上沒甚麼大耽悞 Hai mien sang, mei semo ta tan' wu. 航海はいくらの時間もかゝらぬ
我父親又說我不會說話了⁽²⁾ Wo fu ÷in' ye so wo pu hoi so hua' la. 爺はおれを話せないと云
ふ。

噯呀都被血點兒汚壞了這怎麼處⁽³⁾ Ai ya, tu pi s'ie tien' ou hui la ÷i cemo co. おや、血だ
らけ、こゝれは一體どうした。

漢大秦爲古之羅馬今之義大利……Italy

(1) 北平官話 (2) 紅樓夢 (3) 桃花扇 (4) 元史譯文證補

以上にあげた例のうちで日本でなら G で發音するものを官話では色々ちがつて發音して居るもの
を今左に列舉して見よう。

官話	日本	官話	日本
原	yuan	我	wo
	gen		ga

害	hai	gai	呀	ya	ga
悞	wu	go	義	i, yi	gi

の如くなる。即ち北平のものは G の音と音韻上の關係はあるが G 音としては現れて居ない。最も個人として安を ngan と發音するやうなことはある。が一般には音の結合 (Combination) のときでも G の音は現れないのである。

地理上の觀察

廣く地理上から見ると G を有する方言の著しいものがある。浙江、厦門がそれである。

上海方言 (Edkins: Shang-hai Dialect) ㄍㄨㄛㄨ

仍舊拉此地 Zung gieu la tzu di.

國旗 koh-gi 其中 gi-dung

之を北平官話の音にくらへるならぞ

上海	北平
----	----

舊	giou	ㄐㄩ
---	------	----

旗	gi	ㄑㄩ
---	----	----

其	gi	ㄑㄩ
---	----	----

厦門方言、によると

爾與我去 Li kap goa ki. 跪下 gōi i. 牛肉太塊 Gu bah siu toa te.

これらのうちに見られる G 音その他讀書音などに G 音で發音せられて居るものをみると北平音と著しい相違ある。

厦門	北平	厦門	北平		
我	goa	wu	宜	gi	i
跪	goi	kuei	銀	gùn	yin
牛	gù	wu	餘	goa	yü
危	gui	wei	月	geh	yüe
議	gi	i	額	giah	a
午	go	wu	虐	giak	nüe
眼	gieng	yen			

かくの如く方言に G 音がみとめられる。が、その G 音は北平では Ć, K, W, Y, N 又は單なる vowel のものにあつて居る。これらの關係は何れも發音機關 (genetisch) の側から説明がつく。音のひびきの方ではいくらか性質が違つては居るけれども互に連絡のあることはわかる。

次に隣國につたへられて居る字音では、朝鮮 (Corean) には昔しは G, の音 (或は *gəi:ɿ*) があつたけれども今はない。日本には古今を通じてそれが見えて居る。併し字音に連絡のある G の音は日本では次の三種類にわかれる。

(1) Mac Coan. I. A Manuel of the Amoy Colloquial.

一、支那で本来 G, NG であつたものを日本で G として傳へて居るもの。例へば

- 吾 go 萬葉十四 於毛比須吾左牟
- 宜 gi 萬葉五 波流楊奈宜 (奈良朝時代に宜は又ガの音あり蘇我を卷宜とせり)
- 剛 gu 萬葉五 奈久夜于剛比須

二、支那で K, K' であるものを日本でにごつたもの。尤もこのことは支那の方言的差で彼の地に既に G であつたのかも知れないが、まづ普通支那で G, G' になつて居ない方のものを取つて日本に比べて見ると、

- 賀 ga 古事記 阿良多麻能登斯賀岐布禮姿
- 具 gu 古事記 比佐迦多能阿米能迦具夜麻
- 求 gu 萬葉十四 阿佐許求布禰波

(1) 國歌大觀、萬葉の部 (2) 古事記傳

三、支那で語尾の NG となつて居るものから日本訛させて生じたもの。これは vowel を添へて NG をひびかせる。

- 鐘 sigu (cong-u) 萬葉 落鍾禮能
- 望 magu (mang-u) 萬葉に望多を字麻具多、又馬來田
- 香 kagu (kang-u) 香山
- 勇 yugu (yung-u) 勇禮
- 良 ragi (lang-i) 久良
- 相 saga (sang-a) 相良
- 當 tagi (tang-i) 當麻
- 雙 sugu (cong-u) 雙六
- 羊 yagi (yang-i) (山羊)

などの如き例は倭名鈔、古事記、書紀又は後世の俗語のうちにも少くない。

以上のうち語頭音の G 音比定に役立つものは一及二の場合のものである。一、二に屬するものを北平官話の音に比較すると次の如くなる。

	北平	日本		北平	日本
吾	wu	go	賀	ho	ga
宜	i, yi	gi	具	çii	gu
剛	yü	gu	求	çiu	gu, ku

即ち日本で G となつて居るものも今の北平で Ç, H, W, Y 又は母音であつて、宛もこの関係は上海、厦門の G が北平の Ç, K, W, Y などと相對して居ると同じ關係である。それ故日本、上海、厦門の G が大體に於て、北平では Ç, K, H, W, Y 又は母音となつて居るものと見られる。

吾、虐などは今の音の吾 wu 虐 nüe とならないうちに G の音で日本に傳へられたのであるが、日本へは支那の諸地方からの訛音が幾度かの浪で傳へられて居るのであるから一字に一音ではなく數音のあることがある。又此の G 音に屬するものでも G 音として傳はつて居るものの外に又 K, H, W, Y, N 又は vowel で傳はつて居るものもあるかも知れぬと云けことは拒まれない。例へば胡の音にでも go, ko, hu, wu, u の音がある。梵語の go (牛) は支那を経て日本にはいつてやはり go の音で、保たれて居るものに牛勞などがある。併しもと支那では ngu であつたのではあるまいか。今の牛莊の nu の音となり、厦門で nu の音である。ngu は後世の wu であるけれども古くから已に wu として存して居なかつたか。日本の wu:si (牛) ももと獅子などの子の suffix のまゝで

支那から傳へられたものではあるまいか。つまり、牛には ngo, go, nu, wu の音がある。猶魚についても、go, ngo, wo, no (na) の音が出て居る。それ故日本で牛 giu 魚 gio と云ふときだけが字音ではなく、牛 wu (si) 魚 w-wo, na など云ふときも、音のなまつたものと見られるかも知れない。尙このことは Ural Altaic, Ainu などの方面と比較してきめなければならぬから、こゝには斷言せずにおく。音の發達の順序から云つて NG, G がもとであつて、W, Y 又は唯の vowel はそれから導き出された發達した形であるとする。北平官話と朝鮮とは今日その最も進んだ域に達して居ることが云はれる。例へば次の比較の表でその一斑が推される。

	安南	廣東	客家	福州	寧波	日本	北平	朝鮮 ⁽¹⁾
五	ngu	ng	ngu	ngu	ng	go	wu	o
崖	ngai	ngai	ngai	ngoi	ye	gai	yai	ae
月	ngüet	yit	yet	ngwok	yüe	get	yüe	wöl
護	hou	wu	fu	hou	wu	go	hu	ho
午	ngo	ng	ng	ngu	wu	go	wu	o
兀	ngout	nget	ngut	wok	ngwah	got	wo	ol
瓦	ngwa	nget	ngut	ngo	nga	gwo	wa	wa

(1) Giles: Chinese Engl. Dictionary.

歴史上の観察

斯くの如く發達して居ない方の NG, G の音は方言の上にもたたく多く残つて居ることが見られる。然らば現在、W, Y, H の状態にすみ來たつて居る北部支那の音は古きに派れば宛も南方に現存して居るが如きもの音に歸することが出来るか、この問題をきめるには古代の音譯をその外國語の原語に比較して見なければならぬ。

併し音譯に G をうつして居るからすぐその古韻が G 音を有して居たとは見られない。例へば次の如き實例があるから。即ち

乾	陀	羅	Gandhara
恒	河	Ganga	
成	吉斯汗	Zenghiskan	
回	紇	Uigur	
午	護	烏護	Uigur
瓦	唐	蒙瓦	mongol
兀	元朝祕史	委兀兒	Uigur
兀	元史	麻里兀	marjins
吾	吾括子	吾括子	gogwatzu
吾	吾賈每	吾賈每	gomonne
邪	漢書	邪馬臺	Yamato
崖	後漢書	朱崖	Thagora (異説あり)

などに於て直ちに乾、恒、吉、紇を G 音なる語頭音と見るのはあまりに音譯を重く見たためである。併しや、當たつて居ると思はれるものには、例へば次の如きものがある。

護	Eu	隋書	烏護	Uigur
午	go	西遊記	畏午兒	Uigur
瓦	gua	唐書	蒙瓦	mongol
兀	got	元朝祕史	委兀兒	Uigur
兀	got	元史	麻里兀	marjins
兀	got	元史	兀刺赤	güro
吾	go	中山傳信錄	吾括子	gogwatzu
吾	go	中山傳信錄	吾賈每	gomonne

かくの如く歴史的に見ると G 音はよほど近世迄あつたが、併し今日ではこれらの音が凡て W, Y などの音となつて居るのであるからその大勢がいつ G → W, Y となるに至つたか。これは興味のある問題であるが或るものは早く W, Y となつて居るのであるから一概には云へない。例へば牙の音 ga に據つて居る邪が前漢に G を脱して Y となつて居るものも見える。

邪 ya 漢書 邪馬臺 Yamato

前漢でなくとも、既に遠く周の時代に吾(遊)我などの G で Y に轉じて居るものが見られる。即ち吾、我、余などが共に同義につかはれて居る。吾の音 go そのものが yo にうつつた。そこで yo

の音を有して居る余の字を代用した。余のものと音は σ であつたけれども當時既に τ — ν σ (T音 攷参照) — ν σ にうつつて居つたのである。それ故最初の音のことは忘れられて ν σ の音をうつす だけで用ひられたものと見える。

(1) ① ①は石鼓の始めの文にある文字であつて、即ち、

遯車既工

遯馬既同

遯車既好

遯

とあるもので所謂後世の吾の字はこの籀文に關係せる字である。尙その字の音は五の字の部 分の聲によつて居るのである。

(2) σ σ は天子來嗣

王始振復

古來我攸

止(云々)

我

とあるものの我の例をとつたのである。けれども

戈

周導道我
嗣攸除帥

とある所では茲に示す如き字形が見えて居る。

我は戎政などと同じく戈によつて居る文字である。

支那の(われ)なる語詞は σ の方が古くて、其の σ が σ となり更に ν σ となつたもの かと思はれる。

(1) 石鼓 (2) 石鼓釋文本金石華編

(3) ハハは公謂天子

余及如茲

邑害不余

及

余

とある所につかつてある余の字を取つたのである。尙石鼓文以外の諸文獻に於ても

吾、我は、左傳に 我張吾三軍而被我甲兵

詩經に 父兮生我母兮鞠我

共にわれの義で用ひられて居る。けれども、余は本來、餘の義である。説文には語之舒也と

ある。之を石鼓には吾に代用して居るまでである。

禮記には 凡其余聚以待頒賜

とあつて(われ)の義でないつかひかたが明に見えて居る。尙予の字ももとはto→yo→yoとなり、爲めにyo即ちgoから來たyoと同様につかはれて居る。然し又予の原意の與の義でつかはれて居ることもある。

論語 天生德於予桓魋其如予何

周禮 聽取予以書契……この予は與の義

凡て余に限らず予に限らず G の音が一方に於て或る一地方で早く Y にうつつた爲め音だけをか
りて他の文字がそれをうつして居ることが見られる。然し又或る部分ではわれ即ち go, ga を傳へて
居た所があつたから他方では G でつたはつて居るのである。

我吾にしる、邪の字の音にしる、嘗て G の音であつたことは疑はれぬ。然るに早くも、かくの如
く Y に進んで居るものがあると云ふは、是れ G の音がいつ Y 又は W の音にかはつたか。一概
に云へないと云ふ理由になる。尙これには genetisch の側から音のうつりかはることを見れば一層明
白なることで、音樂の時の gak が薬のとんじ yak となり、Chaucer 時代 (14th Cent.) の y-clept
より Gedipod^(es) に派生することが出來、又梵語の hari, (Gr. *Xiaporis*, Lat. *helvus*) にあたれる古代獨逸の

gelow が古代英語で yellow となり、後 yellow となれるが如く、これらの G→Y にうつれる實例
をみれば先秦であれ、前漢であれ、G が Y になることについては何等の不可能 (impossibilities) の
あらう筈はないのである。

(es) Chaucer: Canterbury tales.

然しさうは云ふものその間自ら大勢の上で略いつの時代に G が最も盛に W, G にうつつたか
と云ふ時代があるに違ひない。

今日擬 ni 倪 ni 逆 ni 藥 nie 虐 nie 又崖 yai 月 yü 眼 yen 五 wu 午 wu 瓦 wa その他岸 an
蟻 e 音の如 ng, g に關係ある N, Y, W, vowel の出た時代がいつであつたか。唯それについて
大體のことを云ふならばこの現象は十六七世紀即清朝の始めに現はれて居たものではあるまいかと思
はれる。否一方に於て、G の方で見え、他方に於て N, W の方で見えて居るやうな材料があるから清
朝の始めが或はその過渡時代であつたかとも思はれる。その材料とは

- 兀 wu 中山傳信錄 兀煞吉(ウサギ)
- 吾 wo 同 上 吾卜煞(オモサ)
- 吾 wu 同 上 吾失(ウシ)
- 吾 go 同 上 吾括子(ゴダワツ)

尙同書のうちに日本のイロハをうつすに次の如くにしてその中に ㄨ. であつたと思はれるものを ㄨ. の音であらして居るものがある。即ち個人的かも知れぬが義一^二、依魯花義夫揮都痴利奴祿烏哇^三、などがある。即ち、GともWともNともあるのはG又はㄨ. がやはらかになりかゝつた過渡の時代を反映して居るのではあるまいかと思はれるのである。果してゑかるならばG(ㄨ.)が最も多くW, N, Yになりかゝつたのは清朝の始め頃であると思われる。(中山傳信録は康熙五十七年—1718)

(1) Fr Wade, 自選集 (2) 中山傳信録の音譯

清初以前に於てまだGの音が大體に於て存して居たとすると韻書などに月||魚厥切、吾||五乎切、崖||宜佳切、午||疑古切、瓦||五寡切、兀||五忽切、我||語可切、余||以諸切、予||余呂切、などの標準も略さめられる。併し各の場合に適用して果して事實にあつて居るかどうかは尙うたがはしい。それよりも反て現在の南方諸方言の音を斟酌して比定する方がよほど明瞭(Anschaulich)に推量せられる。

次にあげたるW, Y, Nの三種のものはGの古韻に派りうるものの例である。これによつて古韻のg, NGがいかによく古音を脱して發達して居るかがわかる。

wa瓦 ya衙 ni倪
wai外 yai涯 ni擬

wan丸 yao嶢 ni逆
wan頑 yao樂 nie藥
wei僞 ye業 nie虐
wei魏 yen顏 an岸
wo梧 yü魚 ai礙
wu吳 yü玉 i, yi蟻
wu午 yüan原 i宜
wu兀 yüe岳 e蛾

第二 T 音 攷

北平官話で T (T) 音は大體次の三種の音轉換 (Lautverschiebung) を有して居る。即ち

- I T → Ç
- II T → Š
- III T → Y

今これを実例によつて觀察すると次の如きものがある。

一・T→C

禪	tan	→	č'an	禪宗	tan (č'an) tsung
澄	tong	→	č'ong	澄乾	tong (č'eng) kanla
推	t'ui	→	č'ui	推倒	t'ui (č'ui) tao
屯	t'un	→	č'un	屯兵	t'un (č'un) ping

二・T→S

單	tan	→	šan	開單子	kai tan (šan) tzu
釣	tiao	→	šiao	釣魚	tiao (šiao) yü
隋	t'u	→	šui	隋唐	t'u (sui) tang
杓	tiao	→	šiao	杓子	tiao (šiao) tzu
盾	tun	→	šun	矛盾	wutun (šun)
適	ti	→	si	不適	pu ti (si)

(一) Er. Wade: Wenchien tzu-erhchi, 及び岩部成充著支那新字典

三・T→Y

此れは純粹に子音の T のみが變化したとは云ひかねる。何となれば T + vowel のうち Y は消

滅してあとの母音が發達して半母音 (semi vowel) の Y となつたものであるから。このことは K の場合にも K → Y, W となつた現象と同様である。その T → Y の例は、即ち次の如きものである。

檐	tan	→	yen	房檐	fang tan (yen)
桃	tiao	→	yao	輕佻	cing tiao (yao)

以上三種の現象は音韻の上で互に連絡する所がある。即ち

T → C → Y

これは個人の上にも認められる現象であるが廣く地理、歴史上には如何に現れて居るか。このことについて觀察して見ても矢張り同様の結果が得られた。以下にその例をあげる。

地理上の觀察

一・T→C

安南	浙江	北平
左	左	左
緝	緝	緝
戢	戢	戢

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

・安南の口⁽¹⁾の音は高楠、白鳥兩博士によると印度ゲルマーネン語 (idg) の tr (try) とはよほどちがふ。一種の卷舌音 (lingual) の T の音で T の articulation をした時に R に似た音が伴ふ迄で R を重く視る可きものでないことである。Giles の Chinese English Dictionary によると安南の口⁽¹⁾の音は支那の口⁽¹⁾に當つて居る。併し支那の口⁽¹⁾の凡てが安南の口⁽¹⁾に當つては居ない。あるものは T にも當つて居るから。廣東音の ts'ap (雜、錘) は安南で t'ap 北平音の tsa (咱) は安南で trap 中部支那の ts'wan (傳) の音は安南で trüen と云ふ風である。

(1) Giles, Chinese English Dictionary.

11' T—>š

	安南 ⁽¹⁾	北平	安南	北平
手	tu	šou	舌	t'iet
寺	ti	si	涉	t'iep
宿	tuk	šu	市	ti
塞	tak	še		si

更に安南の方言又は暹羅 (Siamese) のうち之を見ても次の例がある。

東京 交趾支那 暹羅 北平

石	dra	ta	hing	si
三	tam	teng	sam	šan
十	tap	taap	sip	ši
四	tu	tu	si	su
足	tuk	tuk	ting	tsu

尙結合したものの例を「佛領印度支那」に散見して居るものから集めて見ると支那の S (時として s) が如何に安南方面で T として現はれて居るかがわかるのである。例へば、

順	化 ^(ca)	Tuan-hoa	河	僊	Ha-tien
宣	光	Tuyen guang	定	詳	Dinh tuong
衙	莊	Nha trang	清	華	Thanh hoa
河	靖	Ha thanh	西	部	Tai ao
山	西	Son tai			
聖	宗	Tang tong	世	宗	The tong
成	泰	Tang tai (現皇帝)			

これらの順 tuan 宣 tuyen 莊 trang 靖 thanh 西 tai 僊 tien 詳 tuong 清 thanh 聖 tang 宗 tong

世 the tang は皆 t (th) の語頭音 (anlaut) であるが北平では s (時として c) であらはれて居る。尙臺灣でもこの種の T が存して居る。例へば小川學士によると、

真珠 Ten tu

の如きものもある。

(1) Latham: Descriptive Ethnography. (2) 高橋・南條兩博士の佛領印度支那 (3) 同上

三 T → Y

安南	福州	北平
痒 tong	siang	yang
陽 ^(ce) duong	young	yang
danh		
弋 {djk	ek	yi, (i)
{tuk		

この外支那の Y で安南の T、又は D に比べられるものは少からずある。要するに北平の官話の C も S も Y も之を安南音に比べると T、T' 又は D に比較することが出来る。支那内部では安南のもの程多く T に比較されるものは稀である。北平の su (速) が廣東で ts'uk^(t) となつて居るやうに

北平の S が s に比べられても T に比べられるものは殆んどない。この s, S から T に比べられる方の例には珍らしいものがあるからその例を重ねて茲に挙げる。日本の s, S は必ずしも北平のそれに一致はしないが日本及び北平で共に s, S であるもので、安南の T にあつて居るもの例へば次の如きものがある。

	安南	北平	日本
書	tō	šu	šo
信	tin	šin	sin
星	ting	šing	šei, šō
尤	truēt	šu	djut-u
熟	t'uk	su, son	djuk
速	touk	su	sok
司	tī	su	si

(1) Giles: Chinese-English Dictionary.

例外のもの

第五章 支那古韻 k, T, P の沿革と由来

安南	北平	日本
朔	sok	so
縮	suk	so
		sak

併し安南音で索に tak, sak 兩様あることなどから見ると其の朔、縮の S, S も T に関係のあつたものかと思はれる。

以上安南の T, S (S) を地方的に広く見ると、T, S (S) はその T と S (S) との間に関係がある。單にこれが音韻上だけから支配されたのであれば云ふ迄もなく T がもとで S, S はそれから出たものと思はれる。殊に中途の stage に ts があるのは益この側の材料となる。例へば

安南	廣東	北平	日本
速	touk	ts'uk	su
			sok

T から S が出て居るばかりでなく、C も T からと見られる。例へば

安南	福州	北平	日本
手	tu	tiu	sou
			su

この tiu と云ふ福州音はかき代ふれば tchiu の音である。それ故 T から S (sh) にうつる中間の stage として考へられる。つまり、これで T, C, S の関係のあることが地理上にうかがはれた。そ

れから北平の Y 例へば陽 yang が安南の danh, duong にあたるのであるから陽を tanh, tuong とみなせば又 yang の音の Y も T に聯關する音であつて、つまり音聲學上 Y は T から脱化した音となるのである。

尙朝鮮音の C, S, Y で安南の T に比較せられるものをあげるならば、例へば次の如きものがある。

安南	朝鮮	
清	thanh	chhyōng (č'ýōng) ……………T→C
十	tap	sip ……………T→S
陽	danh, duong	yang ……………T→Y

この例のうち十の音 tap と sip の音との中途の stage をなして居るものは厦門、臺灣などにある tsap がそれではあるまいか。即ち

十 tap → tsap → sip, sap?

かくの如く地理上広く見ても T は C, S, Y に轉じて居る。更に C から S, S から Y に至る轉換があるかと云ふに、事實上 C→S は

安南	福州	北平	日本
綏	tui	çui	suei sui

などの如く現はれて居る。が更に Y に移つて居るもの例も亦可能である。が、まだ見あたらぬ。併し地方を異にしてこの Verschiebung が見えて居ないと云ふ迄であつて同一の地方で S から Y につる例は日本などの例から見てもありうると考へられる。勿論個人的には珍らしからずある。今地理上の観察で得られただけの T, Ç, S, Y の關係を示すならば次の如きものがある。

T → Ç → S → Y (<vowel)

以上の事實に依つて見ると北平に見出された T → Ç → S → Y の關係は大體に於て又地理上にも廣くうかがはれることが見られる。

(1) Giles: C. English Dictionary. (2) 高橋博士 (3) 小川學士直話 (4) Wade. S. T. F.

次に擧げた音韻轉換は北平には見られる現象であるがまだ廣く地方には見ない。併し音の Genetische Seite から見ると極めて近い性質のものである爲めか、互には云はないがその一方の T が N 又は L にかはるとは少なからず北平官話に見出される。その二三の例をあげると

鳥	tiao → niao	たとへば這個鳥	çei ko niao
襪	tei → lai	襪襪子	nong lai tzu

調	tiao → liao	調兵	liao ping
掉	tiao → liao	掉下來	liao s'ia lai

の如きものが即ちこれである。この種の現象は地方にも絶無ではあるまい。

これに依つて見ると T 音はつまり二方面に向つて Lautverschiebung をなして居ることがわかる。

T → Ç → S → Y
 T → L 又は N

歴史上の觀察

後世の Ç, S (時として ts) の音で昔 T の音につかはれたものと思はれるものがある。例へば次の如き音譯に於けるものは全然不可能 (impossible) でもあるまい。

撐	teng	…… çang	漢書に	撐犁	Tänguri ⁽¹⁾
				(當戸)	Tänguri
珠	tha	…… çu	後漢書	珠崖	Thagora*
尊	tun	…… tsun	周書	恪尊	Katun ⁽²⁾
眞	da	…… çon	南齊書	附眞	Buda ⁽²⁾

(1) 白鳥博士講義 (2) 白鳥博士著 'Uber die Sprache der Hiung-nu stämme,

● 後漢書の地理志の條、交州日南郡(秦時代の象郡也。Julien, St. の云ふ Tonguin?)の部に見えて居る朱吾、その外同、合浦郡(今の Cambodia に關係はないか)の部に見えて居る珠崖。これは地理志の文面では雒陽からの距離に大差がある(後漢書地理志參照)これが今の安南で云ふ Sagara にあたるか否かは歴史の考證を待たなければ言語の方面で専らきめるわけにはいかない。併し今の Sa-gara は經緯度のしらべによつて Gerini, M が昔 Ptolémée のかゝる Thagora (Nhatrang の近く)にあたつて居ると云ふて居る(Etude D'extreme orient, Hanoi, 1903.)支那で S, C が T から出て居るが如くに安南でも今の S がもとの T に關係があるものならば Ptolémée の Thagora は後漢書、朱崖吾などの地方を呼んだものに當つては居ないか。暫く記して史學研究の結果をまつ。……朱吾、朱崖、珠崖は Thagora に關係ありや否やの問題。

また撐犁 Tenguri の撐 teng は掌(掌)堂、檯、當、黨などと同じ Lautmaterial で今も朝鮮で t'ang 安南で danh 韻鏡にも撐と同種の撐をば外轉第三十三、開、舌上の音に入れ、説文にも撐は撐に作つてある。それ故もとは C でなく T であつたことがわかる。即ち撐の tang, t'ang を以て tenguri, teng をうつしたものであるか。

珠は集韻に鍾輪切。その鍾は董、動などと同じくも T の Anlaut であるから鍾輪の切は tu? と思はれる。然るに珠の南方音には今珠の音 tu があることは既に云つたとほりであるから珠崖の場

合には珠の tu 殊に T の音を眼目として Thagora の語頭音をうつしたものではあるまいか。或はそれとも Ptolemy の筆は今から二千二百年以前で後漢書の方は一千五六百年前で有るからその年代の差で tha が thu 又は tu にうつつて居たのかも知れない。何れにしても珠に T 又は tu の音の存して居たことは色々の方面から可能 (possible) である。

尊は今日では tsun の音であるが、これは tun が sun となる中間状態とみられると云ふことは既に云つた通りである。尊を tun の音であつたと見るのは奇のやうであるが尊と同じ音符を有する文字、例へば奠については集韻、廣韻に奠堂練切、集韻には一つに奠徒徑切音定とあるから、奠は ten 又は tang の音とみられる。その造字については、

説文 奠从會酒也下其卂也

説文 尊尊本酒器字从會卂以奉之或从寸或从缶作罇、又、注酒器

(1) Gerini, M. Etude D'extreme orient. 1092 (2) 廣光韻鏡 (3) 段注、説文解字

とあつて共に會を共有して居る。U, E は或る母音の分れたものか、又は變じたものとみることができらば尊の tsun, son の古形に tun の音を認め、以て奠の音 ten に比較する。tsun と impossible ではあるまい。つまり奠の音には素との T が残つたが、尊の方には残らないで ts, S にうつつた。併し Katun 恪尊などの音譯には T が僅かに残つて居る。つまり尊は tun, tsun, sun と云ふ沿革

を有して居ると見られる。こは音譯の原音を *Katun* として、*tun* が動がなく、又正しくその *tun* を尊の當時の音がうつして居たと假定してのみかたである。

真 *Can* が南齋書に *da*, (*ta*) にあててある。これも文字上の比較からして、この音符 (phonetical Symbol) を有して居るもの例へば填、嶺、痕、癩などについてみるに、

填、古文の寘、説文に、塞地、从穴眞聲、亦从土、廣韻徒年切 *ten*, *tien*

嶺寘、癩、廣韻、都年切、集韻、多年切 *ten*, *tien*

この外于闐、于寘 *Kotan*, *Kuten* などの闐、痕 *ten*

(一) 白鳥博士の講義

これらの音の凡て一致するわけは眞の字を一部分にいつれもが有して居るからである。故に眞の今の音は *Can* ではあるがもとは *ten*, *tien* の音であつたと察せられる。音譯にはそれが *da* (*ta*) として見える迄であつて眞の古音は *ten* (*tan*?) とみられる。かく原語の音が *č* の方でなく *T* であつてその *T* をうつしたと見ることは假定として必要である。

又必しも音譯によらずとも *T* に沂られ得る *č* の音もある。例へば蟲陳之などに於て少しく觀察するに

蟲 左傳に、同盟于蟲牢、その杜註に蟲牢を桐牢とある。單にこれが音のみから轉じたかきぶりであるならば蟲の音は桐であつたとみられる。集韻にも蟲徒中切、徒冬切、音形 *long* 韻鏡にも洞、同、

動などと同じ種類 (*line*) に收めて舌音と云ふ大なる範疇に入れてある。みな所謂齒 (*dental*) の音で蟲も *T* に屬して居たものと思はれる。更に韻鏡をくわしく見ると、蟲は仲などと共に舌上音として舌頭音の同、洞、動などから區別が立ててあるのは晩唐の江左音で已にその細別があつたものか。併しこの細別は *T* と *č* との別で韻鏡では共に同種類に屬する程度上のちがひとしてある迄である。

つまり蟲の古韻は *tung* で晩唐に *čung* 今は *čung*

陳は北平音 *Can* 日本、朝鮮音共に *cin* 韻鏡には内轉第十七開口、舌上音として陳田、朕陣を同種に見て、唯田丈は舌頭音として居る。併し陳と田とは古代に程度 *degree* 上に差があつたかどうか、これ疑問なり。然し陳の音が早く田の音からわかれて別になつたことは推察せられる。西曆紀元前二三世紀の頃即春秋の當時、齋の陳 (*Ten* 又は *Tien*) 氏が田氏と姓を改めた故事に徴して見ても、果してこれが音の關係だけの理由であつたのであるならば、其の田 (*Ten*, *Tien*) 氏と改めた當時には陳 (*Ten*, *Tien*) の音が *Can*, *čien* になつて居たか、已に *Can*, *čan* となつて居た爲めであるかと想像せられる。由來支那人は音譯の際に文字に拘泥する傾向があるから單に音上のみからの理由としては *possibilities* が少い。けれども、若しかゝる理由が存して居たとすると、陳氏と云ひ、田氏と云ひ、又陳齋と云ひ田齋と云ふ。皆文字を別にしただけで *Taut* そのものには大差はなかつた。否字

面をかへてまでもとの音を保たんとした結果であるらしく見られる。即ち、

齊の國 陳氏 → 田氏……異字

Ten = Ten ……同音

陳の古音は素と電(Den)の字と同音の系統に属するものである。(文字の解剖参考)。

韻鏡にも濁音として陳田は共に同種類のうちに入れてあるから終始 Ten = ten 氏の方ではなくて、Dien = Den 氏と云つて居たかも知。或は Tien, Den は共に又 Tien, Dien であつたのかも知れない。何となれば陳 ten は tin, cin の I にうづり田 ten は tien として後世發音せられて居るものがあるから。尙説文に陳从頁、東聲。東は東に非ず、東なり申の聲なり申は申で神の字にこもれり。電の下部もこれ也。安南で神の音 ten なり。而して陳、陣、電などは共に東より ten の音が出てゐる。

(1) 史記 (2) 石鼓釋文本金石萃編 (3) 段注、説文解字

最後に之、北平音 ㄅㄨㄣˊ 之が有形の意味で用ひられて居た時代即ち古文に ㄅ とあり石鼓文に上圖の



石 鼓

如きもので見えて居る根本意味を有して居た時代は別として、少くともこれが單純に助辭としてつかはれるに至つてからの音は、日本で之を ㄅ と云ひ、支那で ㄅ とよむ。併しこれは後世の音を以て昔を律したわけである。音の變遷

を認める吾々には受け取れにくい。之の元始的時代の音はこゝにはわからないが次の如き理由によつてみると、古音殊に古い時代(例へば周末春秋の時代)の音は

之の音……tej, tai?

であつたかと思はれる。(尙本編第十章一及び四四五頁、四四六頁参照)

その理由

一、廣池千九郎氏の著、支那文典 *Pinyin* によると之の役目の一として助辭的代名詞と云ふがある。それに之の字は語勢を急に爲めに用ひらるとある。然し之はその場合に必ずしも語勢を急にするのではなくして一種の *suffix* であるやうに思はれる。

禮記に 公日未之卜也。

詩經に 知子之來之。

などの未之の之は猶、翁如、自如などの如、翁然晏然などの然と云ふ如き役目であるそれ故未之と云ふは未然と云ふが如き心もちである。音上は然と同様でないが、後世撲地、一頭地、驀地、潑々地、哈哈地、(水滸傳)、怎生的(西廂記)、喜的(桃花扇傳奇)、などの地、的今日の危險的、困得などの的、得と同じもので音は *ti, te, ta* に近いもので唯字面で色々つかひわけられたものかと思はれる。即ち音そのものには古今大差はなく字の方で、時代變化の爲めに異なるものが用ひられた迄である。『之』

の眞の古音はつまり地、的、得 (ti, te, de) に近くあつたと思ふ。殊に又

詩經に 怪底⁽¹⁾

などのあるのも、末之、と相竝んでその之、その底は一種の音上の連絡のあるものであるまいかと思はれる。後世の到底の底などもこれに關係はなきか。

(1) 大槻博士、的の字の誤用 (明治三十四年七月、日本新聞)

二、安南の方言に之は 𠂔 である。又之の義符に依る市即、嵐も 𠂔 である。之は古文で 𠂔 又は 𠂔 である。尙 𠂔 の音によつた漢字で説文に見られるものには妻 tsai, tai 棲 tsei, tai 蚩 ti などがある。支那上古の tsai, tai の音は後世 tsei, tei, tsi, ti となり、更に si 又は ci にすすんで居るものが多い。このことはあとに詳述してある。結局後世の ti, ci, si はもとの形が tei 又は tai であつたことを豫想せしめる。故に之の古韻の場合にもそれが考へられはしないか。唯周末に底と同様に用ひられて居た之の古音が偶、妻、棲などの特別の文字の上にその倂を残して居ることから見ると之の古音も tei, tai ではなかつたかと推定せられるのである。

以上は T から C, S (S) に變遷したと思はれるもの又實際變遷して居るものに就いて觀察したのであるが、次には T から Y に變遷したものを見るに、先づ音譯では、

𠂔 tok → yok 後漢書 粟𠂔 (Sogd, Sogdiana)

魏書 粟特 Sogk, Sogdiana

𠂔 lek → yok 前漢書 烏𠂔山離 Alexandria (dek の代用か)

(1) 白鳥博士の講義

兩漢の時代には𠂔の音は lek (又は lek) としてつかはれて居る。lek は音韻上 tok から來ることはわかるが、なぜ𠂔の本音は lek でなく tok であつたかと云ふことは魏書の中に後漢書の粟𠂔を改めて粟特として居るのもわかる。これは𠂔 tok の音が tok になりかゝつたから魏書に特 tok を以つてしたので、つまり tok と云ふ音は同様で唯文字を更へただけである。それ故後漢書に粟𠂔とある𠂔は tok の方の音でよむ可きである (西域傳)。唐韻、集韻などに𠂔與職切又逸職切音翊とあるのは全く後世の音であつて古韻とは云ひがたい。

𠂔の今の音は I であるが宋の時代 (集韻) には yok である。魏書の時代にはいかなる本音を有して居たかわからないが、恐らく tok ではなかつたのであると思ふ。兩漢時代は𠂔は tok の音であつた。然らば tok から yok に向つる中間の stage はいかん。これは文字の字音比較でうかがはれる。𠂔の聲によつて居る式が即ちこれである。韻會にも式設職切とある。即 sok の音である。然るに此の sok の音は式の一次的の音ではなくて集韻などに式惕徳切 (tek) 蓄力切音敕 (tek, tiok) とあるのに徴してもその二次的の音であると云ふことがわかる。それ故式の字に於ける𠂔、兩漢書に於ける

る弋の音などを考へ合はすと、今日の弋の音 i (yi) より $ɔ$, t に派ることが出来る。即ち弋の音の沿革は次の如くなる。

弋 $tok \rightarrow ɔok \rightarrow ɔk \rightarrow yok \rightarrow yo \rightarrow yi$ or i

と云ふ順序とみられる。今日の安南音に弋が dik , duk であるのは幾分か tok , $ɔok$ に關係ある形の倂ではあるまいか。

以上は弋 tok の音の沿革である。次には陽 $tang$ の音の沿革を少しく観察して見よう。

陽の今の音は $yang$ である。太陽 $ta yang$ の陽の音の如きものが即ちこれである。今、陽の古韻を文字上の比較によつてその音の古い形に派つて観察してみると、

漢書藝文志 魯申公爲詩訓故是爲魯詩其經云陽如之何、

釋文に陽音腸

腸の音は $ɕang$ であるから釋文によると陽の音はかつて腸と同音であつたことが察せられる。

字典には腸の或體に腸がある。易は易に對する後世の俗字であるから腸も腸も同音で尙このことは場、場にも及ぼすことができる。今日では反て俗字が一般に用ひられて瘍、傷、觴などは易を以てかゝれない位である。併し音は凡べて易から出て居る。

その Y の音に屬するものに陽場などがこの類に這入る。

その S の音に屬するものは觴、傷、殤、傷、觴、傷、殤) で、その C の音に屬するものは腸、暢、場、腸、暢、場) 。

これを音韻の關係から見ると、

(1) 段注說文解字

$C \rightarrow S \rightarrow Y$

腸 暢、腸 瘍、觴 陽、場

即ち陽の Y は S (腸) などの子音 (consonant) の全く drop したもので、殤の

S は更に C (腸) などから來て居る。然るに腸、殤、腸は音韻の性質上更に根本の形に歸せしむることが出来る。その音韻の根本の形とは $tang$ の音で文字で云へば湯、盪などである。而してこの音の沿革は次ぎの如くである。

$T \rightarrow C \rightarrow S \rightarrow Y$

易・盪、湯 腸、暢 腸、傷 場、陽

(1) (2) (3) (4)

これらの四つの $stage$ が今日の音に現れて居る。即ち $tang$ の音の $ɕang$ にうつつたものがたまたま腸、暢などにのこり、 S にうつつたものが觴 $ɕang$ にのこつて居る。又場、陽は今日既に Y 迄に

すゝんで居る。まかし釋文の文面では陽音腸とあるからその時頃はまた(4)の *stage* には来て居なかつた。即ち(3)の所にあつたけれども、それは尙一層(2)の状態まで溯つて、陽の音にかつて一度は *tang* の音があつたと云ふことが考へられる。その理由は、

(1) 陽の安南の字音は現に *danh, duong* であること。

(2) 意義の側で、陽からわかれ出た多くの語詞 *words* は凡て皆 *tang* の音に似て近いこと。例へば次の如きもの、

旦	<i>tan</i>	曇	<i>dum</i>
吨	<i>ton</i>	噸	<i>dun</i>
春	<i>tjun</i>	𪛗	<i>djun</i>
東	<i>tong</i>		

附 *final -n* が *-ng* に轉訛することなどは福建その他、中支地方の方言にも珍らしくない現象である。

(3) 易と云ふ象形を音のしるしにして居る文字、例へば湯などに *tang* の音を現に保存して居ること。

(4) 太陽の陽の字は旦 *tan* を一部分としてそれで陽の字の義が起つて居る。また易は石鼓文によると、旦と勿から成り立ち、旦は太陽の☉と地平線の一とから出来て居る。易はもと之を *Ural Altaic* の方で云ふなら *vak* と云ふ如き義を有して居たものか。湯、陽、暢、湯などに共通せる義を見てもみな太陽を中心として居る。上にあげた旦吨噸𪛗春東もこの類例に漏れないことは今更云ふ迄もない。易は後漢書の地理志に交趾曲陽縣などあるその易について顔師古註には易古陽字とある。

許慎の説文に易開也、从日一勿、一曰飛揚、一曰長也とある。尙佩觿に易光也とある。何れも皆光明熱暢などのことに關しないものはない。

(1) 説文及び本書第三九五頁参照 (2) *Vambery, Turkish*, 参考

以上の事實によつて陽 *yang* の古韻は *cing* であつたと思ふのである。尙更に古くは *tang* の音であつてその *tang* と云ふは易の部にその音があつたからである。今は易も陽も意義こそ大體古と大差はないが音は共に *yang* と云ふに非常に原音から遠ざかつたものになつてしまつた。正韻に陽移章切音羊 (*yang*) 唐韻に陽興章切などあるが、決して古韻とはは云れない。反て今日安南にある *danh, duong* こそ古代の *tang* の音に近いと云はなければならぬ。陽が *yang* の音となつた故太をつけて *ta-yang* としたものかとも思はれる位である。

支那古音の T から Y になつて来て居る例は單に以上の弋と陽との場合だけではない。また種

々の例がある。あとでそれをまとめて表にして表はす場合があるから茲には一々かゝらないでおく。以上は T の音が性質が違つて居る他の音例へば S とか Y とかにうつり行くことを云つたのであるが、次には T が S なら S にうつるに至る前はいつも同じ性質の T として存在して居たかどうか。この點について観察して見る。

T が S にうつるのは音現象として著しいことには違ひないが、素とからあつた T が突然 S にうつるのではない。即ち T の性質が始め漸々、遂に S になるやうに少しづゝかはつて行くものと思はれる。實例で云ふならば現在安南にある寺の音 ㄊ は支那で ㄊ にうつつて現れて居る。が文字上から見ると待の音の ㄊ に最も古い形が見えて居る。それ故寺の音は $\text{tai} \rightarrow \text{tes} \rightarrow \text{te} \rightarrow \text{ti} \rightarrow \text{si}$ ではあるまいか。tai と si との両端を見ると全然無關係の如く見られるかも知れないが tai が ㄊ までうつり來たつたことが事實で見えて居る以上は ㄊ から ㄊ の出ることには敢て珍とするには足りないのであるから、結局 ㄊ から ㄊ が出たことが察せられるのである。題、醒などの音を出して居る是が tai, dai でそれが今の支那語で ㄊ となつて居るのもこの例ではあるまいか。併しこゝには T の範圍から S の範圍にうつり込むことに就いてくり返すのでない。唯 S の範圍にはいる前に T のものがいかに變じて居るか云ふ程度上の差を見たのである。起り得可き凡ての場合のうちから今 tai が ㄊ に至る迄の現象と、それから尙、 ㄊ にうつつた方の例ではないが矢張り T 音そのもの

の性質が古と今とでよほど違つて來て居るものの著しいものについて少しくその材料を集めて見る。その順序は 1' tai \rightarrow ti 1' tia \rightarrow ti 1' ta \rightarrow to と云ふ順で行く。

(1) Giles, Chinese English Dictionary.

I Tai \rightarrow ti

今 tai の古韻であつたものの一例として、帝(場帝)提(菩提)題、第(第一)などについて見るに、これらは皆古の江左音で dai の音として日本などに傳へられて居る。なる程、その朝鮮音も ㄊ 福州で toi 廣東で tai であるから昔の江左音(所謂吳音)でもこれに近い形の音があるかも知れない。併し今日では tai, dai は多く te, de の音になつて居る。然るに昔の江左音でかゝれて居ると傳へられて居る日本の萬葉集にも tai として使つてあるのはまだ見ないで、殆んど凡べて te 又は de としてのみ使つてある。その一例をあげて見るならば

帝	te	萬葉五	由吉帝已牟丹米 ¹⁾
提	de	萬葉十一	井提越浪之
提	de	萬葉十一	井提乃四賀良美

(1) 國歌大觀

などの如く te, de で見えて居る。無論母音の E にも ai, ai, ai などに近い性質のものもある。

とであれで萬葉及び今の江左の音がどちらも同じ E であつたとは速断しられない。けれども假りに萬葉の字音が幾分か浙江地方の音をうつし得たものと見ることが出来るならば（暫く百濟音の影響はぬきにして考へて）今の帝、提などの浙江音 *te, de* は既に古く七八世紀の頃にも現はれて居たものと察せられる。悉くがそれとは云へない迄も日本で所謂吳音と云ふ所の *tai, dai* の音から *te, de* の音が發達して居るのである。

然るに六朝より唐時代前後にかけて梵語の音譯が盛行はれた。そのうつしかたのうちで帝、提などがいかにつかはれて居るか云ふことを見るに益々、*tai, dai* からは遠ざかつた音をうつして居ることが多いやうである。例へば

- 帝 *ti* 般刺密帝 *Paramiti*⁽²⁾
- 提 *ti* 尼韃陀若提 *Nirgranthaditi*
- 題 *ti* *Sounati* の *ti*
- 第 *ti* *Atāvati* の *ti*

(2) St. Julien: Methode pour chiffrer.

此れらは萬葉に現はれた *te, de* よりも更にすゝんだ音現象である。音譯は主として江左音か廣東音でして居ることが多いやうであるが、帝、提、題、第などが *ti* の音にあててあるのは或はその方

面の音ではなくて隋唐前後の北方の音を以つてして居るが如くに見られて全然浙江の七八世紀の音とばかりも考へられないやうである。

要するにこれらの字音は八九世紀の頃に北方で *ti* の音、浙江地方で *te, de* 或は其以南にすゝめば *tai, dai* であつた。つまり今日の音の分布が既にその頃からさざして居た。宋の時代にできた集韻に次の如き反切を出して居る。

- 集韻 帝 丁計切音諦
- 題 田黎切音啼
- 第 大計切音弟

凡べて *tai?* と察せらる。これは既に當時の音では *ti* にすゝんで居たのである。けれども音韻學者が幾分古韻に支配されて居た爲めに *te* 音に近いものを出して居るのではあるまいか。それとも計、黎の韻 *Rhime* が今日の *ti, si* とは違ひ *ei* であり、従つて帝、題などは *tei* 即ち *ei* であつたか。日本で江左音と稱して帝、題、第を *dai* とよんで居るのは韻鏡にそれが外轉に收めてあるのが有力な理由である。こは外轉第十三、開、舌音にある反切からすると帝は都計切、又丁計切、題は杜奚切、又田黎切である。故に韻に *ei* のつくことは日本では考へにくいのである。日本では計、奚、黎には *ei* の韻がないから切字の上からは帝題第の *dai* の音は受取りにくい筈である。

帝題第の dai の音は音韻轉化の順から見ると de の音の前の stage であつて詳かに云へば dai → dai → dei → de となつたものかと思はれる。それ故一般には dei, de と發音せられて居て特殊の範圍に屬する人、例へば音韻學者、詩人などには尙 ɛi の音が本で ɛ は俗音と考へられて居た爲めに ɛ の韻によつて外轉に收められるやうになつたのではあるまいか。濁音の D は浙江の訛りに多いから之を T として考へるならば即ち ɛi が本で ɛ は末の音となるわけである。地理上で云へば ɛi は福州の ɛi 廣東の ɛi 朝鮮の ɛi に近く、 ɛ は北方の ɛ に近い。然るに福州、廣東、朝鮮には一般に古韻が残つて居る。若しこれがこの場合に考へることが許されるならば北方の ɛ 江左の ɛ 廣東朝鮮の tai, t'ai の間にも歴史的變遷の順序が見出されはしないか。即ち今日北平音で帝題第は ɛ であるが、嘗つては te, tei, t'ai, tai の音があつたことがあるのではあるまいか。殊に題の字に含まれて居る音符の是の字は今 ɛ であるがその ɛ の由つて起つた根源は ɛi から發して居ることが察せられる。それ故 tai と云ひ tei と云ひ、 ɛ と云ひ、又 ɛ と云ふ。皆同じ徑路を取つて居たものについてはその音の差が全く發達の時期の差、即程度上の差に過ぎないのであると云ふことがわかる。今日 tai, t'ai で残つて居るものは ti, t'i に變じて居るものの三分の一もない。今その兩方の例を少しくあげて見るならば、

ti 大代貨帶忘殆待

t'ai 苔泰

ti 提提鞮隄底抵抵邸帝帝諦締締遞遞第

t'i 侷梯提醍題啼蹄梯鶴體替悌剃薙

などの如きものがある

ii Tia → Ti (支那の ii (北平) di (浙江) は安南では dia)

これはまだ一般の音現象としては云はれないかも知れないが ɛ の語尾音を有するものには著しくその傾向が現はれて居る。併しそれは地理上で云はれる迄であつて、未だ歴史的には積極的の證左を得ない。地理上に見えるものに例へば次の如き例がある。茲には -ian 又は -iang が ing となるものの例をあげる。

仙頭 福州 北平

聽 t'ian tiang ting

定 tian tiang ting

ia 二重母音 (diphthong) は I と A とが互に影響し又音調の力が I の處に強く來る爲めに勢ひ ia が iae, ie, e, i となつて結局 tiang が ting となつたものか。或は之に加ふるに ing の音そのものが疊つた不明の音で發音機關 (Genetisch) の方から見ても、U, I などに變じうつり易いのであるから ɛ

ang が ting となるにも ng の影響が全くないとは考へられない。更に又他の外部の類推もあるかも知れない。例へば T は I と結合した t 口の音の非常に多い爲めにそれに引きつけられた爲めにうつる傾向を生じたものもあるであらう。

日本で云ふ聽の音 tiau は上に云つた tiang が tiau となつたもので更に tiau から tia, tio, tiao, tyo となつて居る。又定の音に tiau, diau とあるのも、これと同じ變化である。定の音に又 tei とあるのは tiang と ting との中間の状態が日本訛したものであつて、即ち、

定 tiang → ttaeng → teng → tei

ではあるまいかと思はれる。日本に定の音が tei とあるのは北平の定の音の ting がもと teng であつたと云ふことを反照して居ると見られるならば、その teng は ting, tiang, t'iang などから來たと見てはいかであらう。今日北平の天 ten が福州で teng であり、廣東で tin であり、北平の言 yen が廈門で gian であるなどは in, en, ien, ian の關聯する所があつたことを示して居るのではあるまいか。殊に北平の ien は廈門で多く ian で現はれて居る。例へば、

厦門	北平
千 t'ian	千 tien
念 lian	念 nien

險 hian sien

の如く必しも t Anlaut と限らず lian と hian と ien の韻ごうつて來て居る。この ian が ien となる現象は廣東で tin (天) の in がやがて生ずる傾向を現はしたもので、ian, ien, in の連鎖が考へられる。然らば ien と in の中間に又 en が認められる。それ故後世の tin (ting) にはもと ten, tien, t'ien, tian と云ふ形を豫期することが出来るかと思はれる。

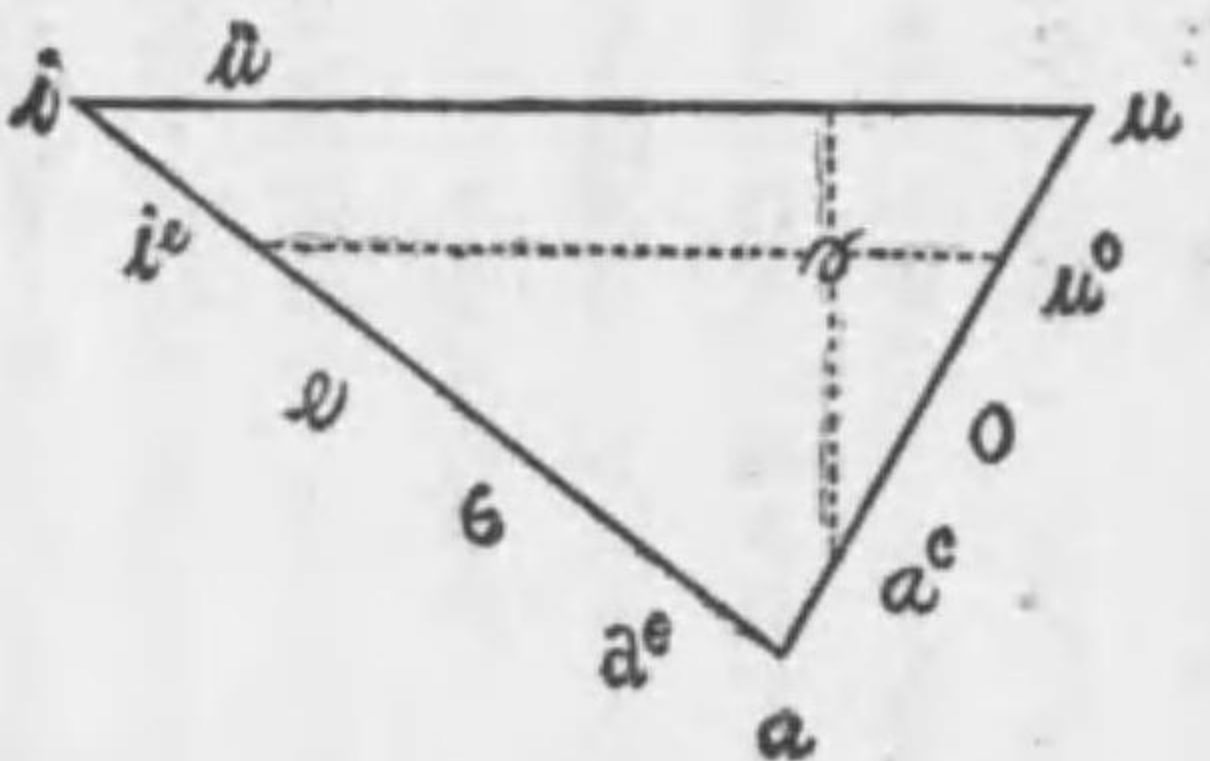
(1) MacGowan: A manual of Amoy colloquial. (2) Arendt: n. Handbuch der Nordchinesische Umgangssprache.

III Ta → To

北平官話に

有多少、yu to' so 您多嗜起身 Nin to' tsan ci sen に於いてその多の音は to' である。多を to' とよむのは大體に於て廣東、客家、福州、北平である。小川學士によると臺灣にもその傾向があり、臺灣だけでなく支那南北全體を通じて A の韻はその發音がせばまる傾向があるとのことである。

浙江では更にすゝんで多の音は du である。然らば du でもなく to' でもなく、更に Open の A はいづこにあるかと云へば、安南、朝鮮、



(日本で個が Ka 又は Ko とよまれて居るのは Ka から Ko がでたのではなく、もと中立的 (neutral) の不明音の Ke から出でて、それが Ka と Ko との二様にわかれたものではあるまいか。)

以上の事實から多の北平音 σ は古くは β であつたと察せられる。日本でも多の音は無論 β であるが、然し

萬葉の十三 伊多母須敵奈之

催馬樂 十餘り七つ、多宇萬利名名川

書紀 遠江 等倍多保美

などの多の音は訛りか又は β の音をうつした積りで σ にあてたのか。支那にも

倭國事略 野馬多 Yamato 倭

奴茄多 nagato 長門

國華集 賀多 koto 琴

日本風土記 索多 sato 郷里

許多 sito 人

中山傳信錄 雞朶 keito 雞頭

などの如く古韻の β と思はれるものが σ につかつてある。まかしこれは後世の文獻に多く見ら

れるので古い所では五胡十六國の時代の秦の僧管猛が西域の Bolan 國を波淪國として即ち pa を以て po, bo をうつして居るやうな特例もないが、多くは後世の O は古代の A に歸せられると思はれる。獨り ta の時に限つたことはないが、こゝには ta が to となつて居るものを列挙してみると、次の如くなる。例へば

多	鐸	朶	舵	惰	沓	託	脫	陀	駄
古音	ta	tak	ta	ta	ta	tak	tak	t'a	t'a
今昔	to	to	to	to	to	to	t'o	t'o	t'o

以上 tai, tia が ti になり ta が to になつて居ると云ふ現象は T の音 單純に見れば同一視せられるかも知れないが A の母音の前の T と O の母音の前の T 又 I の母音の前の T は、それぞれ皆全然同じ性質を具有するものではない。嚴密 (Strictly) に云へば T の發音に直接關係しない唇に於ても、その開きかたが ta, to, ti 皆それぞれ別である。けれども T 音そのものの根本の性質は或る程度迄保たれて居るから、謂はば ta から ti になつても、それは T 音の程度上の差に過ぎないと思はれる。tai, t'ai から ti までは閉鎖もあり破裂もある所謂破障音の T であるが、ti を一步すすむと破障の性質はうつつて摩擦音 (Reibelaute) となる。然の如きものが即ちこれである。

(1) 山下寅次氏の研究

然しながら、T から S に向つる状態は必しも ts のみから st に向つるものとは限らない、 ts から sa , sa ; to から so となるが如く色々の場合に於いて T が S に向つるのである。又 T と S との二様になつた爲めにあとにくる母音の性質も幾分か變化して來るものもある。尤もこは T が S になる場合でなくとも T そのものうちに随分ある、現象である。tak 濯と tek 擻との如きものはその一例である。それ故に T が S になつた爲めに母音の方、つまり韻 (Rhime) が音の轉換 (Lautverschiebung) をすることは珍とするに足らぬ。況して意義の方面から見てもその音に變種 (differentiation) の起る必要があるのである。

地理上並びに歴史上に見られた T 音の轉換 (Lautverschiebung) が文字の上に如何に現はれて居るか。これ亦極めて趣味の多い問題である。今日までの所ではその文字が諧聲文字である限りは殆んど皆音符の方式 (system) で取り扱はれるのである。以下に普通の文字について之を觀察して見る。無論 T, C, S, Y の四階級の完全に存して居る連鎖 (Series) が凡べて揃ふと云ふわけではないが、唯今日までに集め得たものを排列してみると左表の如くなる。(C は時として ts と區別せられないことがある)(段註説文參照)。

T → C → S → Y

易	tang	湯蕩盪	腸暢	觴瘍傷	場陽
失	tet	迭鉄跌	秩帙	失	佚
也	ta	他	池地	施	也
台	tai	殆駘苔	治咎	始	冶
葉	tep	蝶牒諫鯀	□	葉	葉
彡	tem	殄	珍	診參尋(尋)	□
尤	tam	耽	沈	沈	
蜀	tok	濁獨	獨	蜀燭屬	
者	to	都覩屠	著猪	諸諸閣者	
重	tong	董動働	重	種衝鍾	
出	tot	咄栳	黜	出	
直	tok	直	值	殖植	
商	tak	敵摘適滴	嫡(商本作管商从口帝聲)		
兆	too	桃洮(臨洮)	詵窕兆	□	

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

旦	但坦袒袒
尙	堂當鎗黨攬讜謔螳棠棠賞
湯	湯盪蕩錫錫
唐	塘塘糖糖糖
壽	壽壽壽壽壽
甸	洵陶掬菊絢
兆	桃逃洮挑
帝	滯啼諦締締蒂
弟	涕梯涕剃悌
氏	抵砥砥邸砥底
翟	濯濯濯
占	店點點站站砧
眞	填闡填眞(眞は別音)
田	佃佃甸
登	澄澄澄澄澄登登

葉	喋喋喋喋喋
失	迭跌鉄鉄鉄跌(疾は疾の誤字)
丁	成城行叮汀汀釘釘釘頂
壬	呈程廷庭挺挺艇聽
竹	竺筑筑築
者	都覩睹堵賭屠屠
土	吐杜肚塗
豆	脰逗餽頭痘豈
隹	堆堆魁
屯	春囤頓屯沌鈍鈍鈍鈍
同	洞峒桐銅術筒筒
東	凍棟棟(陳は申の聲)
童	僮潼腫腫腫
甬	桶通甬痛
冬	冬冬冬

重 動働
 嵩 tuan 潔端
 段 緞
 賣 tuk, tok 漬積讀讀讀讀讀

これらの例によつて見ると漢字の音を示す部分が獨立に用ひられた時に必ずしも本音の T 音を以て發音せられるとは限らないことがわかる。つまり者の字が to, tu 失が tet 重が tung 尙が tang の古音をかつて有して居たことがほぼ之によりて察せられる。このことは尙、醜、題、提などから是の tai 咄、拙などから出の音 tot の如きものの類例についても考へられる。

以上は古韻についてその諧文字を分類したのであるが、次に北平官話に今日残つて居る T (T') 音は如何なる音綴のものにあるかと云ふことを見るに T, T' 兩語頭音は對をなして常にその尾韻 (Rhimes) を取つて居る。以下に例をあてはめて T, T' の音綴を列擧すると、

ta	18	大	達	苔	t'a	17	他	榻	踏	35
tai	21	帶	代	怠	tai	21	台	太	檯	42
tan	34	單	耽	蛋	t'an	41	炭	探	貪	75
tang	19	當	黨	蕩	t'ang	28	湯	堂	唐	47

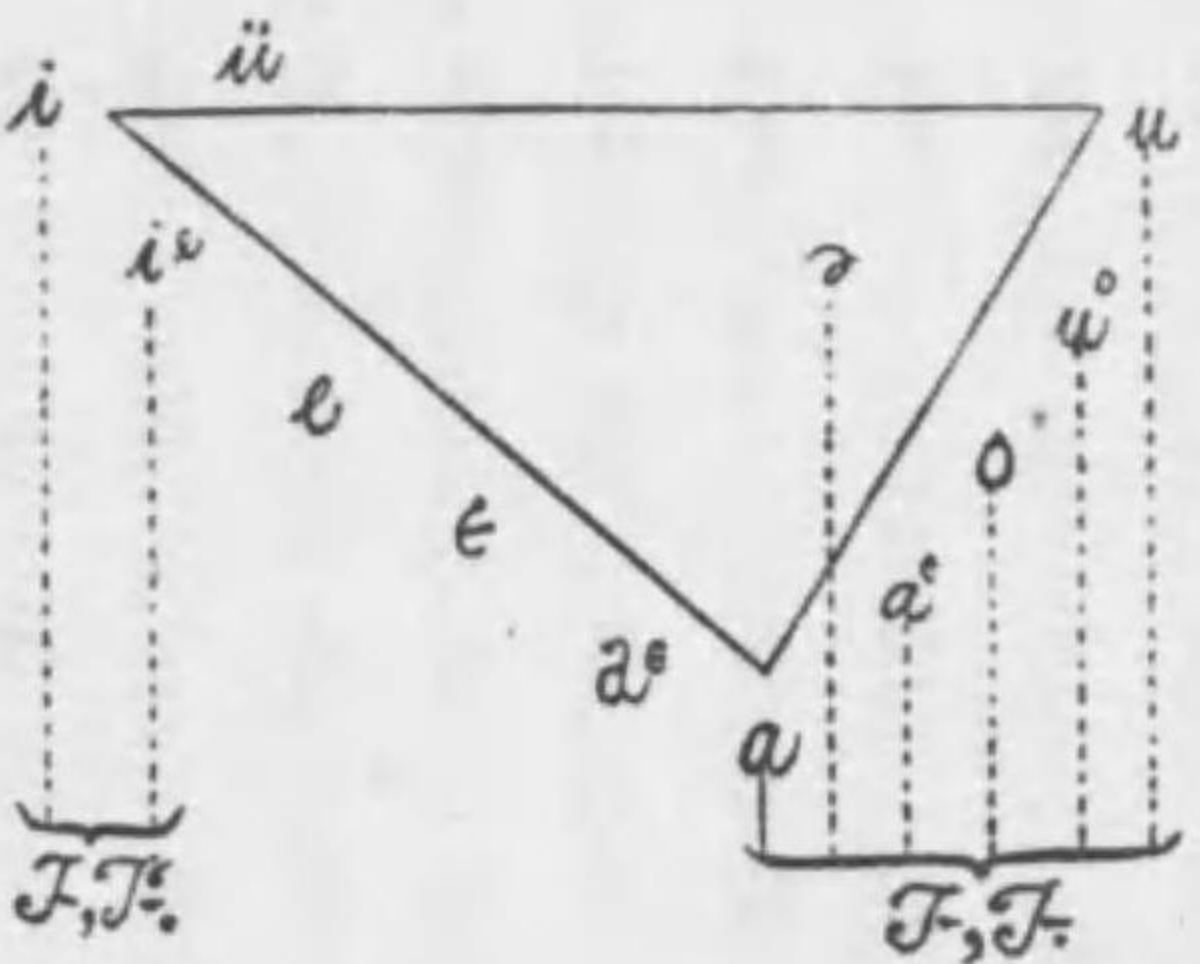
tao	22	道	倒	盜	t'ao	17	逃	討	套	39
ta	2	得	德	惇	t'a	4	特	慝	忒	6
tai	1	得	登	磴	t'ai	1	類	膽	櫟	2
tang	14	等	敵	地	t'ang	8	疼	膽	櫟	22
ti	45	的	敵	地	t'i	30	替	體	薙	75
tiao	19	弔	雕	條	t'iao	24	桃	糶	調	43
lie	23	疊	跌	蝶	t'ie	9	貼	鐵	贅	32
tien	28	店	顛	電	t'ien	20	天	闌	添	48
ting	17	定	訂	頂	t'ing	23	聽	亭	庭	40
tiu	2	丟			t'iu	0	(nil)			2
to	23	多	奪	鐸	t'o	17	妥	脫	柝	40
tou	22	豆	讀	鬪	t'ou	5	頭	偷	透	27
tu	36	賭	篤	督	t'u	24	土	禿	蠹	60
tuan	8	短	段	端	t'uan	9	團	湍	象	17
tui	9	對	確	隊	t'ui	10	退	廡	槌	19

tun	15	敦	頓	遁	t'un	12	吞	鈍	臀	27
tung	15	冬	東	動	t'ung	29	同	通	働	44
t.....	319				t'.....	348				667

唯の T- と T の帶氣音 (aspirate) のものを含んだものの總數 667 のうちを、更じ T, T' a; T, T' i T, T' u' T, T' e; T, T' o じやうじよの音綴 (syllable) を多く有するものから順にあげやう。

- T, T' i256
- T, T' a161
- T, T' u140
- T, T' o 55
- T, T' e 33

それ故これを母音三角形で云ふならば次の如くなる。



合することの極めて少ないこと。否、殆んど全くないと云ふことを述べておいたが、T 音の場合では Ti (その i に open と close とがあることは非常に注意す可きことである。普通の人は之に気がつ

いて居ないけれども) など多くて上にあげた五種のうちでも最大數 (667) を占めて居る。全數 667 の三分の一強を占めて居る。印歐の言語とちがつて支那北平官話には E a などの Vowels はない。従つて T 音の音綴にも Te, ta' として示す可きやうな音綴は殆んど見ない。

Initial としての T, T' には單に T, T' のみとしてのものと ts, ts' の如く T と S との結合したるが如くに思はれるものがある。この ts はもと T であつたものが後世 S, S' にうつつたその中間の stage として見られるものである。安南の tap (十) が厦門、臺灣で tsap 朝鮮音で sip 北平で si 又、古韻の ten, tun (尊) が北平で tsun 日本音の訛りで son となつて居るが如きものはその一例である。今その Syllable の種類を列挙してその一般をうかがはう。

tsa	雜	ts'a	擦	ts'ai	賊
tsai	在	ts'ai	才	tsen	怎
tsan	贊	ts'an	慚	tsong	增
tsang	葬	ts'ang	倉	tso	作
tsao	早	ts'ao	草	tsou	走
tso	則	tso	策	tsu	祖
ts'ai	寗	tsuan	寗	ts'uan	寗

ts'en	………	參	tsui	………	嘴	ts'ui	………	催
ts'ang	………	層	tsun	………	尊	ts'un	………	寸
ts'o	………	錯	ts'ung	………	宗	ts'ung	………	菘
ts'ou	………	湊						
ts'a	………	粗						

D 音 攷

北平官話には D に近く發音される T 音もあるが茲には純粹の D 音のみについて述べるのである。官話で、

您多僂來啊 Niu to' tsan lai a. (あなたはいつ來ます)

浪大不大 Lang' ta pu ta, ta, (浪は高か)

など云ふ。その第一の多の音 to' には文中音調の強き點 (Satzaccent) が落ちるから to' の音は明かであるとは云ふものの、その前に N と云ふもつた餘韻のある您 nin が立つて居るから、いくらか多 to' は do の氣味を帯びる。第二の例で Lang' のあとの ta は上に云つた點が凡て Lang' にあるから ta は勢ひくもつて、その結果 da とになる。最後の ta も別段の Druck を以て發音せら

れないから音がくもる。これらは皆音便で又は音調の力 (accent) の關係でにまつたのである。が、打這兒差不多有多少町呢 Ta çair çampudo' yu to šao ting ni.

の場合に於て差不多 çapudo' (殆んどの義) の多 do は、よし單獨のときには to であるにも拘らず、この熟語の上では do でまかもそれに力 (accent) が來て居る。

斯様に北平官話には特別のときには T が D ににこるがいつも D の音で發音せられると云ふものはまだ見ない。然らば之を地理上又歴史上に見たらば如何。

地理上の觀察

上海の方言音で、

先奪伊個機會 Sien dö'h i k'u ki we.

預先揀定 Yü sien Kan ding (又 sien-ding)

塞住進路 suh dzu tsing tu.

薄待別人 Böh dé bih niun.

など云ふ。このうちの奪 dö'h, 定 ding, 住 dzu, 待 de は北平の音ではみな T の音で發音されて居る。即ち、

第二編 音韻の部

上海 ⁽¹⁾	北平	上海	北平
奪	döh	住	dzu
定	ding	待	dé tai

(1) Edkins: Shanghai Dialect.

その外 D 音のものには尙次の如きものもある。

上海	北平	上海	北平
低	di	財	dzé t'sai
地	di	菊	doa t'ao
達	da	田	die tien
頭	dou	堂	dong t'ang

廈門の方言で⁽²⁾

第二日	dà nè nik.
上帝	siong Dá.
中間	dung gang
其中	gi dung.

傳 diong

(1) Mac Gowan. A Manual of Amoy Colloquial.

これらの第 dà 帝 dà 中 dung, 傳 diong を北平の音に比べると、

廈門	北平	廈門	北平
第	dà	中	dung
帝	dà	傳	diong
			é'uan (t'uan)

支那で D 音の著しいのは廈門と浙江地方であるが支那以外にも安南及び日本の字音には亦それが見はれて居ることがある。例へば先づ安南のものをこゝにあげてそれを浙江、北平のものと比較するに、

安南	浙江	北平
地	dia	di ti
大	dai	da ta
條	diao	dioe tiau
奪	dwat	do to
得	dek	de te

第五章 支那古韻 K. T. P の沿革と由來

の如くなる日本の字音で之を見ると、所謂吳音では多く D 音で現はれて居る。まかし吳音と云ふのは語弊がある。何となれば北方音即所謂漢音にも D 音が絶対にないとは云へない。日本に傳はつた字音は幾度となく大陸から浪の如くに一打寄せられたものである。そのおそく傳はつた D 音の中には北方のものがまじつて居ないかも知れないが、太古から傳はつて居るものには北方の音の D も全然ないと云ふことは云へない。何れにもせよその名稱に拘泥せずにとゞ D 音で知られて居るもののみを上例からとつて見ると、

日本の D 音

頭	du, dju	條	djau
大	dai	傳	den
菊	dao	田	den
財	dzai	定	diau (diang)
第	dai	堂	dau (dang)

地理上から見た D 音は北平の T, T', 何れに多くあるか。無論、音の性質から云ふと T' よりは T'の方が破裂がきつくないから D と云ふ有聲 (stimmhaft) のやはらかな音に幾分か近いと云はなければならぬ。けれども財 tsai 菊 tao 田 tien 堂 tang などのやうな T' であるものも他の地方で

D にあてられてあるから、一概に唯の T' の方のみのものが浙江、厦門で D にあたると云はれない。併しもし強ひて T, T' いづれのものに他の地方の D が多く對應して居るかと問はれるならば、今日迄の研究では T' には少く T と云ふ aspirate (帶氣音) でない方の T' に多くあるらしいと答へる。むろん文章 (satz) の上では決して格一にいかないからきまつた統計はとれない。まかし音の性質上から云つて (T+Aspirate) → D と云ふことも全然無理ではないがそれよりは T → D と思はれるから理論上又、實際上、後者の方に可能の度が多い。この現象は日本音を朝鮮音にくらべて見るとよくわかる。例へば

動 電 條 毒

朝鮮 ⁽¹⁾	ʔo tong	ʔi työn	ʔi tyo	ʔr tok
日本	dou	den	djau	do-k-u

(1) 查章全韻

の如く日本の D 音は朝體で唯の T' で現はれて居る。まかしながら之に反して

遞 通 痛

朝鮮	ʔi työi	ʔr t'yong	ʔr t'ong
日本	tei	tsu (tou)	tsu (tou)

の如きは日本の字音の T であるものが朝鮮で T の帶氣音 (aspirate) である。むろん朝鮮の帶氣音は支那のそれよりも數等はげしいから愈益 D 音には遠いわけである。まかし支那に果して西人のかいて居るもの、又予のしらべただけの個人の發音の如く D のかるいもののみで梵語 (Sanskrit) に云ふやうな th に對する dh はあるかどうか、その研究が出来なければこの問題は到底きめられないのである。けれども日本に dh のないことだけは一般にみとめられる。例へば土の do, 奪の datsu の如きものがそれである。然るに朝鮮ではそれが上の場合の例外として土 t'o, 奪 t'ai となつて居るのである。即ち、

	土	奪
朝鮮	ㅈ do	ㅊ t'ai (t'ai)
日本	do	datsu

日本の土の do と奪の datsu は果して朝鮮音と直接に關係せるかどうか、或は古の浙江音で日本のもと同じくきつくない D であつてそれが已にわが國には D として來たものか。それとも浙江に於ても D' であつたのを日本で D としたのか。そこらはわからない。けれどもとにかく此れ等は少數の例外である。

此れ等の少數の例外を例外とすることが出来るならば、支那に於いても方言の D はやはり T の方に關係のあるものが多くて T' 即ち T' aspirate にはなされてあると云はれる。

(1) 查章全韻

歴史上の觀察

支那の古代に T, D 共に存せしか。或は又それに本末の關係があつたか。こは P, B の關係の研究が困難なのと同じく頗るわかりにくい問題である。韻鏡では清濁の音がわけられてあるから、とも角も晩唐の江左にはそれがあつたと見ることは出來ても、更に古く、北方地方で其れがいかにあつたと云ふことはわかりにくい。

文獻の上の音譯の調査は、西人の方のうつつしたものとくらべなければその手懸りは得られないのであるが、さてその外國語の原音そのものの固定性 (stability) は容易に拉しがたい。けれども白鳥博士及西洋の東洋學者から認められてあるもので最も古代に派られ得るものは、前漢の當時位迄で、それ以前は中々わからない。即ち西曆紀元一二世紀から前のことはわからないとして、

史記匈奴傳	屠耆	Doghri. Çatatai 語 (かつ, ja)
史記匈奴傳	甌脫	Odar "

(穴)

後漢書襄楷傳 浮屠 Buddha. sanskrit (佛) (又浮圖、部多、母陀、沒陀とかく)

このうちの屠 do 脫 dar 屠 dha はこれを今の北平の官話その他、浙江地方の音でいかに現はれて

居るかと思ふことをみると、次の如くになつて居る。即ち

音譯	浙江	安南	北平
屠	do, dha	du	dou
屠	do, dha	du	t'u
脱	dar (dat)	d'ò	twat t'ò

前漢にかりに D であつたとしてもその D がいつ頃迄後世に傳はつたか。今日屠の音が *tu* 即ち *thu* であるのは古人が *Boudha* の *dha* にあてて居るものと偶然ではない一致があるか、否か。今の *tu* の T が *do, dha* の D からきたとするといつ D が T になつたか。晩唐の韻鏡に屠は見え居ない。まかし屠と同類の箸は内轉、十一、合の濁音にあるが、又同類の都、親は同十二、合の清にあるから者の部分が *to* とも *do* ともさまならない。然しながら箸が濁に收めてあるのは者に D の音があつた名残りとはみられないか。集韻に屠は同都の切とある。韻鏡内轉一、合、舌、濁の部にはその同が見えて居る。集韻が韻鏡の濁音同 *dung* をとつて屠の反切に用ひたか否かは疑問であるけれども、かりに之を前提とすることが出来るならば屠は同都切で *du* となる。唐宋に *du* であつたのみでなく、その *du* は兩漢の頃にも浜ることはできまいか。

地理上の觀察の處で云つておいた通り、浙江、厦門、安南には D 音が多く存して居るが、これは後世の特發であるか、古音の残りであるか。それには、勿論、後世の訛音で生じたものもあるであら

うが古音の名残りのものもあるらしく思はれる。如何に D 音に富む安南浙江でも自ら D でない T もかなりにある。例へば

	安南 ⁽¹⁾	寧波	北平
貪	t'am	t'aan	t'an
鐵	t'iet	t'ih	t'ie
多	ta	tou	to
雜	tap	dza	tza
天	t'ien	t'ien	t'ien

(1) Giles, Chinese English Dictionary.

の如きものがある。併し安南、寧波の T は寧ろ北方の T の帶氣音にあたるものが多いのである。かりに安南、寧波の T の帶氣音が北方支那の古代の音を現はして居るとすると、古今を通じて T は D になりにくく、依然 T のまゝで残つて居るものが多い。が唯の T はまかし極めて少數の例外の外、安南、浙江で多く D である。その D を以て絶対に北方支那の古を推すことは出来ないけれども、今を去る二千年以前頃にはまだ D が盛に存して居たかと思はれる。その D は比較的 T に近くて他の T 即ち T の帶氣音の方も音譯の上などには時として D の方にあてられて居ること

も有る。屠脱の例にてもわかるが如くに。併し前漢の時代よりやゝおくれて、T音の音譯に現今のTが當ててあるものがある。例へば次の如きもの、

後漢書 頭曼(單于) tuman⁽¹⁾
後漢書 土門(單于) tuman

(1) 白鳥博士の講義

この頭は今北平で tou 土は t'u である。地方の方言でも矢張り T の帶氣音で、韻鏡にも次清即ち T' に收めてある(内轉、第十二、合舌)。それ故北方支那で古く頭土が清音の T の方にあてて音譯せられてあるのもこゝらに關係のあるものではあるまいか。何となれば T の帶氣音 T' は T としてつかはれることの方が D としての方よりも可能 (possibilities) が多いから。それ故支那古代の T, T', D の三者について推察するに、歴史上から見ても、地理上から見ても、又音聲そのものの性質の上から見ても、T' は時としては D, T' 兩様に現はれる。まかし T' として現はれて居る方が普通で、又 T の音そのものは寧ろ D の音に關係が比較的密なのである。が三者の本末關係は十分にわからない。殊に兩漢の時代の帶氣音 (Aspirate) などは韻書、方言などから考察して見ても明かでないから、假りに T' をぬきにして T と D とで考へて見よう。北方支那では古代に D の方が先きに現はれて居たやうに思ふ。併し同時に T の方もなかつたとは云へない。かくて D と云ふ濁音が

北方人に適しなくなつた爲めか、早くから T 音が勃興し、爲めに D は勢力を失つた。今日でも字音としての p (ā) p (an) などは北方にないのである。而もこの傾向は既に遠く漢魏以前に兆して居たかと思はれる。その非常に古い北方の D 音はその名残を浙江、安南、厦門などの如き濁音にとむ地方の方言中に残しておいて、史記、漢書などには既に D のまゝの音譯はよほど少なくなつて居るかと思ふ。音譯上の D ですが當時の D 音そのものの觀察をすることは危険であるが、その音譯した原語の音が表音的に記してある場合には、これに依つて比較さへすれば幾分のよりどころは得られるわけである。勿論確かな結論を得ると云ふことを、云ふのでなく假定的に推斷するだけである。

北方支那で古く t'u, tu であつた土、頭は日本にはいつて、土 to, tu 頭 tou である。別音に又土は do 頭は du, diu 然るに浙江の音で、土 du, 頭 dou である。然らば日本の do, du, diu と云ふ方の音は浙江音であるか。又は昔し北方支那に du, diu の榮へて居たより前の音であるか。どちらともさめることはできない。宣長翁の吳音説、白石の漢音説もこの觀方からすると名實を混同して居る點がありはしないか。尙漢吳音の名稱上の範疇 categories に就いて、いかがはしむことは d, m の關係を云ふ所に詳述する。

要するに以上の事實から察するに北方にも古くは嘗つて D 音があつたものらしい。唯それをしるべるには文献によらねばわからぬ。然るに文献上では D, T, T' の別が明かでない爲めに識別がむづ

かしい。殊に古代にあつた D は T として後にあらはれて居つて、僅に D の名残りは浙江厦門、安南などに留めて居るのみである。されば日本などに D が傳へられて居ても、それは浙江音からのものなるか、北方の古音から来たものなるか。あながちに浙江の音のみとは考へられないのである。

第三 P 音考

P と P' との兩音は共に古くから支那に存して居た音であるが、此の兩音は共に B 音の起源をなして居る。此のうち P 音は北平官話で次の如くに轉換する。

- 一、P → P'
 - 僻 pi → p'í 這個地方兒是荒僻 Cei ko ti' fangr ši huang pi.
 - 畔 pan → p'an 上畔道去 Sang pan tao c'ü.
- 二、P' → F
 - 仆 p'u → fu 仆倒在地 P'u tao tsai ti.
 - 拚 p'an → fan 拚命了 P'an ming la.
- 三、P → B (連讀の結果)
 - 不 pu → bu 行不行 Sing bu sing.

P, P', F, B の轉換を更に地理上と歴史上から見ると。

地理上の觀察

P, P', F 三段の變化の見られるもの

廣東 ⁽¹⁾	福州	北平	安南 ⁽²⁾
品 pèn	p'ing	p'in	fem
攀 pan	p'wang	p'an	fan
扮 pan	paing	p'an	fèn

(1) Eitel, E. J. Chinese Dictionary in the Cantonese Dialect. (2) Giles, H. A, Chinese English Dictionary.

P, B 又は P, B 二段の變化の見られるもの

廣東 ⁽¹⁾	福州	北平	安南
把 pa	po	pa	ba
筆 put	peik	pi	but
逼 pik	peik	pi	bik
派 p'ai	p'wai	p'ai	bai
必 p'í	p'í	p'í	bi

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

娑 p'ó boa p'ó ba

(1) Eitel, E.J. Chinese Dictionary in the Cantonese Dialect.

以上は北平官話の P, P' に對する方言音との比較であるが、更にその F に對するものを見るとま
ま P' にあたれるものがある。

廣東 福州 北平 安南

肥 fi h'i fei p'i

甫 fu p'wo fu fu

沸 fai p,woi fei fi

又 H にあたれるものもある。但しこれは唯福州一地方のみの一特例である。

廣東 福州 北平 安南

廢 fi hi fei fi

廢 fai hie fei fe

佛 fet houk fu fi

これらの例が示す通り、北平の P, P', F はその頭に幾分の差はあるにせよ、廣東のそれと相似て
居る。安南では北平の P, P' が F の一種にあたり、北平の F はその P' 又は F にあたって居る。

小川學士に従ふと福州には F の音を缺いて居る。それ故北平その他の方言音の F は福州で P', P',
W, H で現はれて居ることである。

以上は福建省以南のものに較べたのであるが、浙江省では如何。今比較的交通の繁くなつた温州の
音で之を見ると、北平の P に對する F 音の多い點は安南に似て居る。又その北平の P', F に對す
る pw bw のある點は福建省の北部の音に似て居る。又その北平の P, P', F に對して、それぞれ H,
P, F を以てして居る點は廣東のものに稍や似て居る。つまり温州音には福建、廣東、安南の音の特
質が一部分宛現はれて居るものと見られる。即ち、

廣東 福州 温州 北平 安南

皮 pa pa po pa ba

皮 p'i p'i bi pi bi

裨 pai pai bi pai be

拔 pat p'wak bwō pa bat

斐 fi p'i fi fei fi

甫 fu p'wo fu fu fu

此の如く温州の語頭音 P' は南方諸方言のそれに當つて居ることが多いが、語尾音の點ではよほど

北平音に似て居る。殊に入聲音の缺けて居る點で、類似して居る。

次に日本音で現在のハ行頭音は普通のHでウ列音のものだけが日本式の開いたFの音である。開いた兩唇音(韻鏡の所謂重唇音)(open bilabiale)である。而して日本でPは特別の連讀の場合に現はれる。Bもまた一般には現はれないが拔辦等の字音にはまゝ見られる。

朝鮮には今日Fはなくしてたゞ、P, P'がある。Bは連讀の時のみにできる。今、日本、朝鮮の字音Pを北平その他の方言音に比較すると次の如くなる。

	廣東	福州	温州	北平	朝鮮	日本	安南
辦	pan	paing	ba	pan	p'an	ben	bien
蚌	p'aong	p'aung	bang	pang	paug	bau	bang
佛	fèt	houk	fai	fu	pul	but-su	fi
筆	put	peik	bie	pi	p'il	hit-su	but
品	pèn	p'ing	ping	p'in	pim	hin, (hon)	fém
必	pit	peik	bi	pi	p'il	hit-su	tèt
甫	fu	p,wo	fu	fu	po	ho	fu
肥	fi	p'i	vi	fei	pi	hi	p'i

P音が弛み弛んで結局Hの音を生じたものとする、このP, Hと云ふ兩極は即朝鮮又は廣東と日本との間に窺はれる。例を外國に求めなくとも南方方言の間にそれが見られる。今音韻轉訛の順でならべて見るならば、

	仙頭 ⁽¹⁾	北平	厦門	福州
飛	pue	fei	hu	hi
富	pu	fu	hu	hu
火	pè	huo	hu	hò

(1) Arendt, C. Handbuch der nordchinesische Umgangssprache.

無論PからFに、FからHにはP'(ph)の中間の状態がありうる。語頭音Pが弛んでP'又はFの状態にうつるのは音韻轉訛の自然の傾きであるとは云ふものの、時として發音調節の特質から支配せられてPの時の唇の閉鎖が弛められることもある。

	朝鮮	客家	廣東	臺灣
法	pöh	fap	fat	hoat
乏	pöh p'ip	fap	fät	hoat

この例に於て語頭音Pの變化を観ると、そのPが大第に弛んでPからFに、FからHにと音の性質

がうつつて行つて居ることがわかるのである。

尙臺灣のうちでもFが漸次Hにうつつて行く傾きの見られるものがある。即ち

讀書音 俗語音⁽¹⁾

犯 fam hoam
梵 fam hoam

これらの法乏、犯梵に起つて居る現象は小川學士及びガブレンツ (G. V. D. Gabelentz) などに據ると語尾音の子音 (もし子音と云はれるならば) が唇音である場合には、その音綴の語頭音が又唇音であると云ふことを嫌ふ。つまり同化しない (Dissimilation) のための結果であるとのこと。この觀察からすると支那に map, mam などの音綴の存しないわけも自然に合點されるのである。

fap, fam がそれぞれ hoat' hoam になる。その母音の部分にOが増して居るのは、FがHとなつた爲めHの音に伴はれてU, Oの如き音が出たのによるものらしい。福州でも髮 fat, fot が huak, huo となつて居る。頭髮 tou, huok' などの如く皆U, Oはあとからの發達にかゝるものと見られる。

又支那で破裂音 (Verschlusslaute) の P, P' が摩擦音 (Reibelaute) の F になり、更にHの音にも進む。然るにその途中にWのstageが缺けて居る。福州地方にPWはあつても單なるWはない。北平にはWはないではないが、それは素とM又はBに關係のあるものが多くてP, P', Fに連絡する

方のものは殆んど全くないと云ふてもよろしいのである。

廣東	北平	廈門	北平 ⁽²⁾
萬 man	wan	霧 bu	wu
文 man	wen	蚊 bang	wen
問 mon	wen	尾 bi	wei

以上は P, P' を音の弛む側から見たのであるが、次には唯同じ唇音と云ふ範疇の下にうつりあふものを觀察して見よう。例へば P → M

廣東	福州	温州	北平	朝鮮	日本	安南
靡 mei	p'i	mi	mei	mei	bi	mi

これはPの發音の時と同じ唇の姿で唯息を鼻腔 (Nasentraum) に抜いたためにPがMとなつたもので蹠蹠 man san が P'an san となる現象とは反對の場合である。

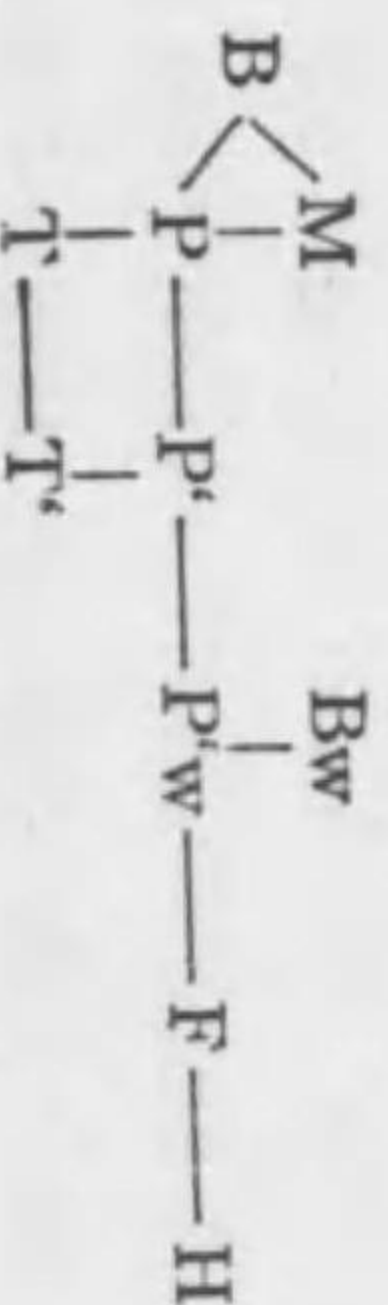
(1) 小川尙義氏の言に於て (2) Mac Gowan: Amoy colloquial.

上に擧げたP → Mの例の外に又P → Tの場合もある。PとTは勿論音の發音位置はちがうが音感覺 (Empfindung) の上では差のないものである。即ち

	北京	安南 ⁽¹⁾	北平	安南
必	pi	têt	匹 p'i	têt
比	pi	ti	弊 p'i	te
鼻	pi	ti	片 p'ien	t'ien
標	piao	tiou	蘋 p'in	tên
鞭	p'ien	tien	併 p'ing	ting

(1) Giles: Chinese English Dictionary.

地理上から観た語頭音P音韻轉換 (Lautverschiebung) は大體に於てこれ迄述べ來つた如きものである。P音致の立脚地からすると無論PからHとなつた series が主であつて他の B, M, T, T' 等になつた方はむしろ従である。若し今それらの諸音の間の關係を考へるならば或はこの如きものではあるまいか。



尙このことは歴史的の側からの研究と雙方相俟たなければ十分なことは云はれないのである。

歴史上の觀察

支那の古記録から古韻を推定するのはどの音の場合にでも困難でないことではないのであるが、殊に P, P', B bh, F などの變遷沿革を知りわけけることは最もむづかしい。こは原語の音譯に於て殊に甚だしくそれを感ずる。例へば

前漢書 鍛汗 (Ferghana)⁽²⁾

の音譯に於て歴史の考證で無論鍛汗は Ferghana であるとした所で音譯の上により得る色々の可能 (possibilities) を考へに入れると容易に鍛が文字通りに fer (fet, fat) であつたとは信じられない。疑ひの餘地はいくらでもある。これは獨り P, F のときにのみ限つたわけではない。

(2) 白鳥博士の講義

支那歴朝の音譯でその原語の動かないで記るされてあるものは佛典の音譯である。P音の沿革を見る場合には殊にこれに據つてしらべるのが便利である。併し漢字のあてかたに確然たるきまりがある譯ではないから其の間に一定の rule をさぐることは至つてむづかしい。佛人 St. Julien もその點に就いて箇々の場合の説明はなし得たけれども、きまつた規則を抽象してかくことは出来なかつた。

P音の場合に梵漢の音譯が如何に觀察せらるゝかと云ふに、無論一概には云へないけれども、大體次の如きことだけは云はれると思ふ。

一、梵語の P, ph, B, bh は主として跋、波 (pa) 頗發 (pha) 婆 (ba) 婆、梵 (bha) でうつされて居る。

二、梵語の V は嚙、婆 (va) でうつして居ること多し。

また統計は取つて居ないが、つまり後世の P, P', F の音から見ると、梵語の B, bh, V は主として F 又は P' の漢字でして居る。梵語の ph も亦多くはこれで音譯せられて居る。例へば上の頗、婆は今 p'ô で發は fa 梵は fan 即ち皆、何れも P の帶氣音 (aspirate) 又は F である。韻鏡にもこれらを次清 (唇音) の部に收めて居る。尙この類は外にも多くの例を見る。即ち、

盤 p'an が ban (Bandhou, H 11 505 16)
 佛 fo bou (Bouddha, H. 11 506. 21)
 扶 fou bhô (Soubhôtî Fani-i liv. XI)
 吠 fei fei (Vêda. H. 11 506. 4)
 伐 fa wa (Vasoumitra H. 11 505. 16)

無論音譯の常として例外も少くはない。P の漢字で梵語の bh をうつし又 F の漢字で P をうつしたのものもある。例へば、

魄 pe が bhê (Bhêlou, M. V. S. 243)

富 fou pou (pouma. Fani-i, liv. 11. 12)

併し F が P にあててある場合は寧ろ稀である。多くは B, bh, V をうつすが普通である。今支那の F が梵語の音譯にいかにつかはれてあるかを見るに、

一、梵語の B をうつせるもの、梵 (Brama) 浮 (Bouddha) 佛 (Koumârabôdhi) 扶 (Bôdhisattva)
 二、梵語の bh をうつせるもの、伐 (Bhartirihari) 梵 (Bhâchâ) 浮 (Viçvabhô) 佛 (Çribhôdja) 弗 (Bhoupadi) 扶 (Soubhôtî) 赴 (Prabhou) 附 (Viçvabhô)

(一) St. Julien Methode pour chiffrer.

三、梵語の V をうつせるもの、伐 (Vasoumitra) 梵 (Bhagavân) 吠 (Vâigya) 弗 (Hêlouvon) 富 (Vâtâla) 此れ等の梵浮佛弗扶赴附伐の音は凡て今日 F の音に屬し韻鏡にも弗、富の二つが唇音清に入れてある外は皆次清即ち F に近き方に收めてある。弗は内轉第二十、合口、唇音清、富は内轉三十七、開口、唇音清、弗、富いづれも P として韻鏡に見えて居る。尙佛典の音譯にも

弗 fo が pou (Pôurva, H. 11 506. 14)
 富 fou が pou (Pouroucha. Fani-i liv. 1)

にあてられて居る實例がある。これによると六朝の末から唐の時代頃には弗富の音はまた P の状態を脱せずして居たものと見られる。然るに今日では F の状態に變じて居る。この外韻鏡で唇音次清 (内

轉十二、合口)の敷は Vāchpa の pa 即ち P にあててあるやうな例もある。然るに今日では敷は fu 即ち F の stage に移つて居る。

之を要するに梵漢 (Sanskrit-Chinese) の音譯には支那の P, F 兩方乍らが梵語の B, bh, V にあてられて居る。併し主としてそれらにあててあるのは F の方である。けれども元來音譯なるものはそれ程にあてになるものではないのである。

音譯と韻鏡とにつかつてある字音は共に江左音が主としてあるやうに音の上で見られる。然るに音譯で P をうつせるものが、まゝ韻鏡では F, P として見えて居る。斯様に齟齬したものがあるかと思ふと韻鏡、音譯兩方の一致して居ることもある。つまり今の F は唐代では P, P, F の三通りの間に見えて居るが、併し今日では F と云ふ一種類の Reibelaut に歸してしまつて居る。

F 音の沿革に就いて印度ゲルマン (idg) の言語では如何。今 B. Delbrück: Studium der indogerm. Sprachen. s. 149 (Vierte, völligumgearbeitete Auflage) によつてこれを見ると、最初破障があるとすると、そのあとに先づ摩擦の氣音が起り、次にはそれによつて始めの破障音が同化せられてこゝに二重摩擦音即ち doppelspirans の音が生ずると云つて居る。これは今の ff の音の時とか又は他の摩擦音 (Reibelaute) zz, hh などに就いても同様に考へることができるのである。

Delbrück: Studium der indogermanischen Sprache s. 149

altsächsische	opan	"	étan	"	makon
	ophan	"	éthan	"	makhôn
ahd	offan	"	ezzau	"	mahhôn

これによると支那の富なども pou → phou → fhou 即ち P → P' → ff と云ふ理窟になる。まかし支那の F は doppelspirans ではない。加之 idg. の方のやうな唇齒音 (labio-dental) の F ではなく唇音 (labio-labial) 即ち bilabial f のである。韻鏡などの兩唇音はこゝまで切り込んで云つてはない。かくの如きわけであれば支那ではやゝ印度ゲルマン語の方とは違ふ。現に地理上から見ても、次の如き實例がある。

	富		品		扮
仙頭	pou ⁽¹⁾	廣東	pén	"	pan ……………p
	phou	北平	p'in	"	p'an ……………p' (ph)
北平	fou	安南	few	"	fén ……………f

(1) Arendt: Handbuch der Nordchinesische Umgangsspr.

北平官話のうちにも、同様のことが觀察せられる。

仆	拚	呻
(pu)	(pan)	pan.....p
p'u	p'an	p'an.....p'
fu	anf

これらのことを考へに入れると、歴史的の側にも假令悉くまでは云へない迄も大體に於てP音の沿革は支那に於ても、PからPaに移り、或はそれから更にFに移るのが順序であるととみられはしまいか。

尙PがMにうつれるものは文字の沿革の方で見ることが出来る。例へば

P → M P → M
 非——靡 蹠——滿
 必——蜜

この蹠は man と普通に讀まれ廣韻にも蹠、母官切とあるけれども、廣韻の第一音には薄官切とあり集韻、韻會にも蒲官切音聲とあり。類篇にも蹠一つに蹠としてある。それ故蹠 Pan は滿、蹠、顛の man の類推 (analogy) の結果ではあるまいか。もとはやはり Pan の音ならんと思はれる。

P → P' (ph) → F (bilabial)

次に P, B の關係を見るに、支那のPは時として外國のPをうつして居ることがあるが又Bをうつして居ることもある。

一、Pの音譯 古く文字製作時代は塞外民族の put, put'ce (schritt の義を今では有して居る言葉) を筆でうつして居る。

釋名に 筆述也

說文に 筆楚人謂之聿、吳人謂之不律、燕人謂之弗

秦謂之筆

爾雅釋器に 不律謂之筆

集韻 筆音莠、山東謂筆

正韻に 璧吉切竝音必

燕音で弗は put であつたかどうか。又秦及び、山東の筆の音はいかがであつたか不明である。然し今日の方言の上では次の如くに見られる。

安南	廣東	客家	福州	温州	朝鮮	北平
筆 but	put	pit	peik	bie	p'il	pi

說文に當時の方言に筆を不聿(即 put)と云つて居ると見えて居るのもこの後世のものに符合する

所がある。つまり筆の音の Initial は P であつたものとみられる。

二、B の音譯

漢書に	濮	Bak	濮達	(Bakhtria)
後漢書に	發	bat	發(羌)	(bad)
魏書に	髮	bat	秃髮	(tabarbei)

(1) 白鳥博士 *Über die Sprache des Hiung-nu stammes u. Tungustamme.*

尙多くの例は B 音に就いて述べる所にゆづるが、とにかく後世の P, P', F となつて居るものが B 音にあててある。此れは實際 B にあててあるまでであるか。或はそれらの本音が B の語頭音であつたのか、若し本音が B であつたのであれば B 音を音譯して居るのは最も適切である。若し左様でないならば唯外國の B のために假借して似た音でうつしたと云ふだけになる。これらは一つに兩漢當時の原語が果して B であつたか否か音譯したものの耳にいかにか聞こえて居たか。それら色々の可能のことがさまたないうちは明かな決定は出来ない。

P, B 何れが古いか。本末關係は如何かと云ふ問題はあとで云ふ所があるからここには詳論しない。唯音譯の上で兩漢の頃に B の音譯が多く見られ、その音譯文字は多くは後世では P, P', F となつて知られて居ると云ふ事實だけをのべておく。次ぎには根本は P に關係のなかつたもので後世 P, B

の音譯にあててあるものの一群がある。これは極めて稀な例であるが次の如きものである。

後魏水經註 維 pi 越 bat

迦維羅越 Kapilavastou⁽¹⁾

越 pat:—檀越 Danapati

越 pal:—般庶越師 Pancha palishad

(法顯傳に據る)

維、越、共に唇の丸め方 (Lippenrundung) によりて生ずる摩擦音 (Reibelaute) だ。維は維納 (Vienna) などの維である。越はエツ即 Wet 廣韻にも越王伐切とある。以上の音譯は有聲音の (stimmhaft) なる摩擦音 (Reibelaute) W で以て更に唇音たる性質の著しき摩擦音 (Verschlusslaute) P, B をうつしたに過ぎない。されども音譯の故を以て越維の本音を直ちに P, B とみなすことは出来ない。且つ W を以て P にあてた例はこれ以外にはあまり類例をみない。唯之に似たものは玄奘三藏が Lumbini (印度古代の俗語 Prakrit より出で藍毗尼園と譯さる) の bi に對して微 (wei) をあてて居る位のことがあるばかりである。(H. II. 513. 25)。殊に越の音に就いてその本音が P でなかつたと云ふことは既に K 音考の部で云つた通り、古音 knot 又は k'uat の語頭子音 (Initial Consonant) の消滅したのから更に發達したものとすることを見ればわかる。即ちその發達の順序は越—knot, k'uat—>huat—

→uat →wat →fat →bat →pat の如き音韻関係があるものではあるまいかと思はれる。

(1) St. Julien, Methode pour chiffrer.

單に兩極を見ると二様の形が見られるが。その間には上の如き関係がある。畢竟

越……(1) knot, k'uat

(11) wat, wet

越……(111) pat, bat

と云ふ順序で音譯に現はれて居るものと推定せられる。

以上P音の歴史上の觀察はまだ十分なことは云へないが地理上の觀察では

P →P' →F →H

P, P' →T, T'

P' →P w →F

と云ふ關係が存して居るのである。歴史的の側ではPがT又はPwとなることの證據はまだ見出さな
く。P, FがHとなつて居ることも支那の音韻史上には見出されない。何となれば支那のHは常にK
K'に關係のあるものでPには關係する所がないから。これは特に注意すべき點である。

けれども今假りに七八世紀以前に漢字の傳へられた日本で字音史上から之を見て上田博士のP音考

を前提とするとPからHに變遷して居ることが云はれる。少くとも日本の字音がFからHにうつつた
ことは殆んど疑ひを容れない。

日本で今日Hの語頭音で讀まれ七八世紀の頃にはハ行音(P, P', F)であつたと思はれる漢字はいかな
るものであるか。

記紀萬葉に用ひられたハ行音の文字は次の百〇八字でその全體が含まれる。

波 婆破簸播播畔判伴巴盤磐薄半泊貌八方芳房伐

比 譬避譬辟卑婢被彼秘必毗毗備嬪賓悲斐肥非飛

布 不否夫扶府俯符輔甫敷賦浮副赴粉負福

閉 篇弊幣蔽徹剖部陪倍別弁便陞平珮背俳抔沛戶鞞

閉反返遍

保 百倍菩褒衰哀報袍抱譜品本朋寶富帆凡煩方

ハのしるまのなないものは今日の支那でP音のもの、ハのあるものはFにうつつて居るもの。中間の
stage におけるP'は別にまゐるしを施さない。支那ではこれによると百〇八中僅に三十二だけが今Fであ
る。之に反して、日本では今日凡てその區別なしにHである。唯ウ列音のものだけが兩唇音(bilabial)
のFである。がそれも支那音程に唇(Lippen)をはたらかすことはしない。

(I) 古事記傳、飯田武朝書紀、國歌大觀

序でに、日本の奈良朝時代でバ行音につかはれて居たらしく思はれるものは、次の二十二字である。但しこゝには P, F に関係のあるもののみを云ふので M からのものは云はない。

- 婆 波
- 毘 備比氷婢卑鼻肥
- 夫} 扶
- 倍 敵戸部邊陪別便辨
- (ボ 缺く)

これらの中には B で讀まれるものもあるが、また H の音のものもある。その B の音に對する無聲 (stimulos) の破裂唇音 (Verschlusslippenlaut) は P でなければならぬ。且つ朝鮮、支那共に B (p, f) で發音して居るのであるから假りに奈良朝で P であつたとすると今の H は P から來たものとみられる。併しこれは假定である。

この假定は支那の P 音史と間接の関係があるけれども、これを以て支那の P → P' → F を動かすことは出来ない。況して日本に入つた時は之 P, F を區別して入れたのであるか、或は今の朝鮮音の如くその區別はなしに、どちらか一方のみとして入れたのであるか。もしあとの場合であれば更に

P としてであるか否か。果して P として入れたのであれば P → B → H は考へられるが、もし F として入れたのであれば B → H のみしか考へることは出来ない。或は事實はこれら兩方の場合の混じたものか。これらの問題はなんとも云へない。

けれども已に F, h の音が日本に存せる以上はそれ以前の stage に P を臆測せしむるは必ずしも無理ではない。 idg. 12a'

- Gr. πατρις p
- Lat. pater' p
- Got. fadar f
- Arm. hair h

の變遷のあるのはこの側の可能を證して居る一例である。

今字音の上で此の關係を見ると支那音韻史上に P → P' → F は明かにかがはれる。

- P → P' → F P → P' → F
- 撥 跋 髮 盆 盼 分
- 撥 發 賁 噴 墳
- 板 扳 反 踡 捧 奉

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

(1) Paul. Germ. phonologie.

P	→	P'	→	F	P	→	P'	→	F'
傍		勝		訪	部		剖		涪
補		舖		敷	卜		仆		訃
悲		裴		非	埠		□		阜
□		蟠		番	不		□		罟
□		攀		攀					

これに日本の現音を加へて考へるならば P → P' → F → H と云ふことが更に見られるのである。
 次には音符上から文字を見ると次の如くに分類せられる。

- 巴 pa 把杷爬琶葩
- 音 pai 倍培陪培剖部賠菩
- 白 pak 百伯泊拍珀柏舶魄箔帛碧追陌
博膊縛礴薄搏膊
- 暴 濃爆曝
- 友 pat 拔被跋蹠蔽髮

- 反 pan 扳版坂阪叛飯返叛
- 番 pan 蕃藩播播幡翻(翻)
- 半 伴胖絆判畔袷
- 般 磐盤搬搬
- 凡 帆梵汎風楓瘋
- 方 pang 坊妨妨防防訪訪放做房芳旁磅磅勞勞
- 包 pao 抱袍袍胞飽飽庖庖苞苞雹咆咆袍袍飽飽
- 保 堡褒褱
- 票 piao 標漂剽飄飄
- 井 ping 併餅駢逆屏瓶
- 平 坪枰評萍
- 敵 斃蔽弊幣蔽釐
- 丙 炳柄病柄
- 扁 pien 徧編編編遍副區篇偏
- 賓 pien 濱揆嬪嬪鬢

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

辟 pink 僻壁嬖嬖臂臂譬譬甞甞闢闢 (pi)
 皮 pi, pa 波 (pa) 彼披玻破跛被跛婆疲疲
 比 批枇毘庇毘毘
 非 pai 俳俳排排緋非霏扉斐輩匪
 碑婢裨牌
 丰 peng 邦蚌条峰蓬烽逢縫蠶豐奉、奉は奉なり
 朋 礮縹縹崩棚
 奉 俸捧捧
 彭 澎膨
 付 pu 咐附附鮪符俯府附腐
 不 罌丕杯否盃 (pai)
 卜 仆赴訃朴 (pok)
 夫 扶馱芙
 孚 浮俘俘
 父 斧釜甫(斧)

富 puk 副幅蝠蝠福菊匄富逼
 復 復復腹複覆
 弗 沸佛佛艶髮費 (pei)
 分 pun 扮紛紛盆
 賁 噴墳歆贖
 風 楓諷瘋
 甫 po, pu 浦哺捕脯蒲輔補舖黼逋匍圃傳敷簿舖
 孛 pot 勃勃悖

以上P音の變遷したあと及P語頭の音綴の模様、音符 (Phonetical symbol) Pの現象などに就いては大略かくの如きものである。次に然らば現今に於けるP音は如何なる尾韻、語頭音として役立つて居るかと云ふことを觀て見よう。

pa	27	八	把	拔	p'a	38	怕	爬	琶
pai	16	白	百	敗	p'ai	25	狛	牌	派
pan	20	頒	板	瓣	p'an	44	磐	蹠	叛
pang	16	邦	棒	榜	p'ang	34	磅	逢	胖

pao	30	包	p'ao	47	庖	砲	跑
pei	29	碑	p'ei	53	陪	沛	珝
pan	10	贄	p'an	16	盆	噴	珮
pang	15	崩	p'ang	37	烹	膨	捧
pi	68	必	p'i	47	霹	癖	
piao	19	標	p'iao	19	漂	瓢	粟
pie	9	魘	p'ie	7	瞥	弊	
pien	16	邊	p'ien	13	篇	便	片
pin	17	斌	p'in	10	貧	品	拚
ping	18	兵	p'ing	19	平	瓶	聘
po	52	波	p'o	22	頗	勃	朴
pou	1	不	p'ou	7	剖	杯	蓐
pu	23	補	p'u	29	仆	浦	僕
<hr/>							
386			292				

各数字は homonyms の数を示す。これによつて見るに pi, p'i, pei, pei: po, p'o, pao, p'ao, pa, p'a

の silben が最も多く、pou, pie は最も少いことがわかる。併し大體に於ては茲に母音三角形の示す

如き母音と結合することが多い。支那には idg. の ea はないから之とは結合しない。

更に帶氣音 (Aspirate) の多少を云くば Aspirate のつかなく sy-

llable の方が三分の一だけ多い。

B 音考

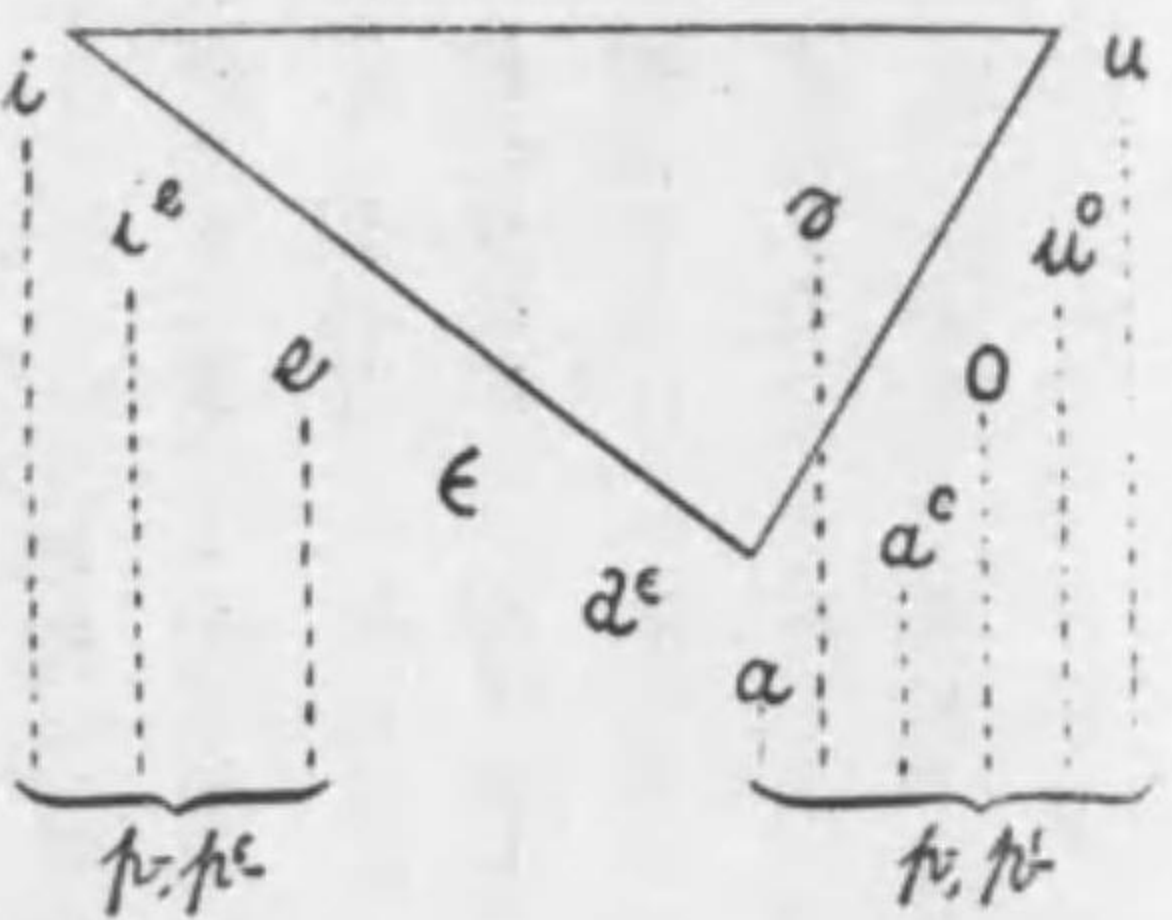
北平官話で

行不行。那行了 sing pu sing. Na sing la. と云ふ時は行不

pu の sing に Satzaccent が来て pu は不明に發音せられ且つ ng のあとをうけて自然と pu がやはらかに濁り bu の有聲 (stimnton) で発音される。又

不必拘泥 Pu bi cü' ni.

と云ふ時もあるの cü に文中の音の強さ Satzaccent が来て必ず bi はその發音の力の氣息 (Druckstr.-ohm) がよわまる爲めに自然と不明になり有聲 (stimmhaft) の p 即 B の語頭とかはつて bi の音になる。



支那音韻史上でBはP, Mに關係する所のあると云ふことは前にも云つたが今の北平官話にはP ↓Bの方はあつてもB, M相互間の關係はない。

甚麼東西不要甚麼 ʒe mo tung'si puyao semo.

那兒買的 Nar' mai ti.

これらに於て mo, mai のMは依然MであつてBとはならない。然し地方の方言音を比較にとりて今以下にB音より見たるPとMとの關係に就いて少しく觀察する。

地理上の觀察

北平のPに對する方言音Bは如何に現はれて居るかと云ふに

(一) 浙江

證出憑據來 Tsung ts'eh bing kü lé.

賠還銅錢 Bé wan dung dien.

打之敗仗 Ta tsza ba tsang.

(1) Edkins: Shanghai Dialect.

などに於ける憑 bing 賠 bé 敗 ba はそれぞれ北平では pei, pai, ba, pai である。尙

浙江 北平 浙江 北平

棹 ba pai 棹 bie p'a
筆 bie pi 棒 boa pang

(二) 福州

朋友 beng iu

明白 ming bek

この朋 beng 白 bek はそれぞれ北平でならば pang, pai の音尙北平の婆 (p'o) も福州では boa と云ふ風に北平の P, P' は福州でBであらはれて居ることがある。福州は地理上浙江に近いだけに語頭音などに於ても似た所が多い。然るに又安南とか日本とかのかけはなれた處にも浙江、福州と似た點が存して居る。即ち北平のPがP'であらはれて居る。

(1) Baldwin: Manual of the Foochow Dialect.

(三) 安南

安南 北平 安南 北平
婆 ba p'o 白 bak pai, po
巴 ba pa 筆 but pi
豹 bau pau 蚌 bang pang

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

(四) 日本で

日本	北平	日本	北平
婆	ba	備	bi
毘	bi	辨	ben
陪	be	唄	bai
			pai

北平の帶氣音のPと日本の濁音Bとの間には或る關係のあると云ふ説もあるが、それには尙朝鮮音のPの帶氣音がいかに關係して居るかのことと共に研究しなければならぬ。朝鮮の帶氣音は非常にきつくあとの母音もその爲めに聲(Stimme)を失ふ程の力(Druck)のある發音であるから、例へば p'ia, (p'ha) の音から ba となることは少しく考へにくい。むしろ唯の pa の方が ba に近いかとみられる。北平のMに對する方言音Bは如何に現はれて居るか云々

(一) 廈門

我を買紅紅有花之蓆 Goa beh hoe angang u hoe ê chih.
 若無 na hô 若無就 na hô tsui.
 後面 gau bin 面前 bin tseng

などの例で買は boe 無は hô, 面は bin への北平音は買 mai 無 wu (mai), nien である。尙、

類例は、

	廈門	北平	廈門	北平
米	bi	mi	眠	bin
尼	be	wei (mei)	俛	ban
未	boe	wei (")	網	bang
母	bu	mu	墨	bak
萬	ban	wan (man)	密	bit
				mi

(一) Mac Gowan J. A Manual of the Amoy Colloquial.

例外、物 mih, 屢 mih, 麵 min, bin, 門 nhg 總べて北平のMは廈門でBにあつて居る。その方言なる臺灣語に於いても同じことが見られる。例へば

蚊帳 bang ta (鼻にかゝる nasalierte a) 眠牀 bin ch'ing の蚊 bang 眠 bin なども北平で wen (mun,) min であるが如く、この地方にはMに對するBが多く行はれて居る。

(二) 日本で

日本のBで北平のMにあたるものは俗に謂ふ漢音即ち素の北方支那音で傳へられたと見られて居る字音である。これは書紀以後のものに見えかゝつて居る音で、大體は廈門音に一致する所が多い。古

事記、萬葉のものは所謂吳音即ち江左音で、中には朝鮮訛したものもあるにちがひないが、とにかくMのまゝで用ひられてある音である。今の北平のMと語頭音は似て居る。但し北平のものはMからWにうつつたものが多い。日本の方ではMがBにうつつたこともあるであらうがM, B二様の音が並び行はれることになつて居る。萬葉のマ行音も之を所謂漢音として讀むならばこのBとなるのである。即ち

- ma (ba) 萬馬末麻摩滿
- mi (bi) 民未味微彌美尾民
- mu (bu) 武牟無鷓謀夢務
- me (be) 賣馬梅妹咩面免米迷昧
- mo (be) 母茂文問聞門目物木毛忘儻

斯様に日本ではM, B兩方の場合があるから北平のMが必しもBのみであらはれて居るとも云へない。單に現在だけから云ふならばBの方は廈門に似てMの方は北平に似て居ると云ふことが云はれるのみである。江左では北方のMはそのまゝでBとなることはない。浙江のBは素とPからのにごりである。

日本(漢音) 廈門

日本(吳音) 北平

萬	ban	ban	nan	(wan, nan)
未	bi	boe	mi	wei (mei)
無	bu	bô	nu	wu (mu)
賣	bai	boe	mai	mai
米	bei	bí	mai	mi
文	bun	bâng	mon	wen (mun)
母	bo	bu	mo	mu

北平のMに對するB音の分布は單に廈門、臺灣、日本ぐらゐで比較的その範圍はせまい。そのBですらも中には例外があつてBとならないでMのまゝのものも少くない。

今、更に廣くM, Bの分布の關係を見る爲めに馬なる語詞についてその一斑をうかがへば、次の如きものがある。(渡邊學士の各國語に於ける馬參照)。

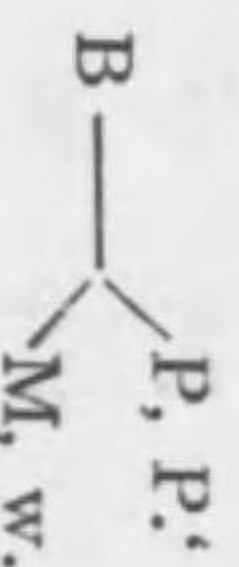
支那北平	ma	廈門	be	朝鮮	mal
南京	ma	日本 {mma		安南	ma
福州	ma	ba		甘蒲	Sê chhmoul
客家	ma	琉球	nma	暹羅 (Siam)	mā

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

廣東	ma	Ainu umma	Laos ma
上海	mo	臺灣 be	Ahom ma
温州	mo	熟蕃 be	苗族——ma
寧波	mo	生蕃	Tunguse, Yakut. murin
四川	ma	{ba chibayu	

即ち馬 ma に對してB-を有して居るのは厦門、日本、臺灣である。他は凡てM-である。臺灣は厦門の方言の細別であるとみれば、つまり日本と厦門とにそのB-を傳へて居ると云ふことになる。音の結合しない場合のB音はかくの如くに見られる。

以上B音は地方によつて或はP, P' に比較されるものもあり、或はM時としてWに比定せられるものがある。つまりこの種のBは次の如く現はされる。



(1) 渡邊良氏の各國語に於ける馬

支那内部の方言、又はその影響をうけた言語のうちからのB音に就いての考へは以上の如くにP, M兩様に比定せられる。然るに支那の方言と云ふよりは、寧ろ支那の西南にある他の種族の語で、比較

的その影響を受けて居ないと思はれるもののB音は之を支那の方面で見るとMにはあたらないでPにあつて居るやうに見られる。今その一二の例を採つてみれば、

父	八 ⁽¹⁾	百 ⁽²⁾
Tibet	boba	brgyad brgya
Naga.	aba	puga
Thäkšya.	ava	bhrē bhrā
廣東	fu	pat pak
安南	—	bat ba
日本	fu	hat-ci hyak-u
北平	fu	pa pai
朝鮮	pu	pal pak

(1) 高楠博士、印度支那人種及其の大初同住根源地
 (2) G. v. d. Gabelentz Chineseische Grammatik.

の如きものがある。これによるとBは次の如く比較せられる。



第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由来

けれどもP, FがBから直ちに來たと断定することは出来ない。
尙歴史的の方面でBが如何に變遷して居るか。又音譯上には如何に表はれて居るかなどの點を觀察
しなければならぬ。

歴史上の觀察

音譯の上にB音で現はれたものは可成り古くからある。

浮	bou	後漢書	浮屠	Bouddha
發	bod	後漢書	發(羌)	bod
蒲	ba	後漢書	蒲類	barluk
撲漢	bak	兩漢書	撲達	bakhtria
布	bu	唐書	布豁	bukhara
不	ba	魏書	不咸	bagatur
弗	ba	魏書	弗敵沙	badakhšan

これらのB音の音譯したものは後世P, P', Fのいづれかに屬して發音せられて居る。次には後世Mの
音で知られて居るものでB音の音譯にあてられてあるものに次の如きものがある。

冒	bag	後漢書	冒頓	bagatur
---	-----	-----	----	---------

莫	bog	漢書	(昆莫)	bäg (烏孫王)
靡	bi	史記	(昆)靡	bi, be
母	bö	史記	母寡	bäg
慕	ba	魏書	慕容	bayan
抹	bat	隋書	麻囉抹	mirbat
靺	bat	唐書	靺鞨	bagatur
(暴)	bo	遼史	暴里	boruhu)
勿	bat	北史	勿吉	bagatur

(1) 白鳥博士講義

これらのBにあててある文字の現代の音は北平で冒 mao, 莫 mo, mu, 靡 mi, 母 nu, 慕 nu, 抹 mo
靺 mo, (暴 pao) 勿 wu (not)であつて、いづれも語頭音 (Anlaut) である。

斯くの如く音譯上ではBにあててあるものが今日ではP, Fの系統(series)とM, Wの系統(series)
との兩様に歸した。今日では或る特別の連聲とか何かの時だけにBがあつて一般にはPの方もMの方
もBとなることは殆んどないと云つてもよろしい。

然らば古代の音譯にBとして現はれたる音譯よりも先きにP又はMとして現はれたものがあるかと
云ふに、それは何とも云へない。

けれども、今

(一) Pに就いて、これは例へば筆の音 *pit*, *put* が更に古く尙Pの語頭音で居たのか。それとも今の安南の方言に見られる *but* の音に近いものであつたのか。これらの問題はよし、説文に見えた前漢當時の方言音を斟酌して考へても決定することは容易でない。併し兩漢書魏書などの音譯に徴して見ると、事實B音の音譯にのみPの系統(*series*)があつてある。P音の音譯にPの系統(*series*)の見え始めたのは六朝の末以後で梵漢對譯にそれがうかがはれる。この事實は或は六朝以後に見えたPが今の支那のPの系統(*series*)朝鮮のP日本のHと連絡があつて、その前に古く見えたBは今の安南 *Thi* *ikksya*, 西藏 (*Tibet*) などの方面に残つて居るB又は *br* など云ふ様なものとの間に極めて遠いかも知れないが、とにかく或る關係があつたものと云ふことを示して居るのではあるまいか。

地理上と歴史上からP, Bの關係を見ると或は以上のやうに考へては如何であらうかと思はれる。(二) 次にMに就いて、これは例へば漢の音 *mak* が始めから *mak* であつたか。後世の *Fino ugric* 語が沙、砂原を *mak*, *mag* 又は *myg* と云ふ。白鳥博士によると漢字の漢はそれをうつしたのであるといふ。果して *mak* が漢の始めの音であるならば漢字 *bak* の音は後の音か。又は方言の上の訛り音でもあるかと見られる。漢書に烏孫王の王にあたる *Turk* 語 *bäg* を莫でうつして居るのも果して莫の本音のMからBと訛つた音であるか。但しはBが莫の本音であるか。莫に限らず、靡、母、

冒などが或は史記に或は後漢書に見はれて居るその音もBの音譯として見られる。けれども他の語詞(*word*)でその文字上の音はB, Mの二様の音もあるものがMの方でうつされて居るものがある。それは次の如き例で見出される。

馬	<i>ma</i>	前漢書	邪馬臺	<i>Yamato</i>
馬	<i>ma</i>	魏志	投(殺の誤か)馬	<i>satuma</i>
麻	<i>mi</i>	隋書	麻囉抹	<i>Mirbat</i>
蠻	<i>man</i>	唐書	蠻	<i>man</i> (南詔王に納られたるもの)

この外唐以後の音譯であれば沒來、*mulen*, *muren*, 彌里 *maol*, 蒙瓦 *mangol*, 捷母 *ongmo*, 忙谿勒 *mongol* などの沒、彌、蒙、母、忙は疑ひもなくMをうつして居る例である。その外尙唐前後に見はれた佛書の音譯などにもM, B兩様ある如くに見えて居る文字は殆んど凡てMの方のみにあつてあつてBを寫しては居ないのである。

馬	<i>mā</i> , <i>maṅga</i>	米	<i>māi</i> , <i>māitṛya</i> ⁽²⁾
梅	<i>māi</i> , <i>māitṛya</i>	莫	<i>ma mayōra</i>
某	<i>mou</i> , <i>koumouda</i>	歿	<i>mou</i> , <i>moudgala</i>
暮	<i>ma</i> , <i>padma</i>	母	<i>mou</i> , <i>samoula</i>

例外、漫 ban, soubanta

又、ごく近代のもので康熙五十七年の頃の音譯にも（中山傳信錄による）

馬 ma 哈加馬 hakama

馬 ma 谷馬 kuma

馬 ma 嚙馬 uma

(1) 白鳥博士 Über der Sprache der Hiun-gnu stammen. Tungustammes. (2) St. Julien: Methode.

斯様にMの音譯は何れの時代にも現はれて居る。近くは清朝音などで馬の音Mが既に遠く前漢の時代の音譯にも同様につかつてある。今日の方言で馬の音のBである處は日本と厦門地方である。日本で馬の字音は萬葉集にもまた摩麻末滿萬などと共にMの方であつて、Bの音では使用されて居ない。書紀には當時の支那北方音が多く混用されてあるから馬の北方音のBは恐らく書紀の當時或はそれ以後の音に屬するかと思はれる。馬に限らず凡てMの方は浙江地方の音として當時入つて來てBの方は北方長安洛陽の音として入つて來たらしい。然るに支那歷朝の音譯史上では漢魏のとき已にMがBの音譯にあてられて居ることが多いのであるから、例へば馬なども兩漢魏の時代には普通にMとBとの兩音が行はれて居たのではあるまいか。果して然らば日本の奈良朝の末、平安朝の始めにかけて北部支那と文化上、交通のあつた時には彼れのM、B兩方共に日本へ所謂漢音即ち北方音として傳へられた筈

である。此の觀察からするとMの音を一概に吳音即ち浙江音とばかり考へることは間違ひが生ずるのである。況して北方の特色の一つなるB音そのものが漸次M音に類推せられ、B音は益あつて絶つて、Mのみがあとに残る傾向を見られるに於てをやである。梵漢の音譯は江左、廣東などを主として居るやうであるけれども、音譯した場所そのものは北部支那にあつたことが多いのであるから、假令歴史的 (traditionally) には南方の音譯を受けついで點はあるにしても亦北方音を以つて音譯に手心した所は決して少くはあるまい。然るにそのうちにMの方の字音を以て梵語のMにあてて、Bの方の音は全く音譯につかはれて居る處が見えない (Bの音をうつすときには支那のP, P', F, Vの系統 (series) の字音を以てして居るのみである)。これは梵漢音譯當時いかに馬、梅、某、米、莫、母などにBの方の音が北部の方面にB音を失つて居たかと云ふことを示して居るのではあるまいか。

要するに漢魏より六朝にかけてはまだ北部支那にM, B兩方共あつた。それが唐宋にかけてBがなくなりかけた。あとに残つたMは江左方面の素とからのMと共に今日に傳へられた。日本の馬、梅、米、などのBの音は北部にBの未だ消えない前に傳へられたもので、今の厦門に現はれて居るBなども若しその土地の後世の特別の訛りでない以上は偶然に漢魏時代のBの佛をば幾分留めて居るものと見られるのである。併しそれには日本の方のと引きくらべることが必要である。

以上は北部支那にもとM, B相並んで古くからあつて、それが音譯の上にも表はれて居ると云ふ

ことを述べたのである。然らば B, M いづれが先きに現はれたか、その本末の關係はいかがであるか。馬などの特別の箇々のものに就ては或は ma の方が先きではあるまいかと、方言の分布から考へられるけれども、一般には果して M が始めであるかどうかは、全く疑問であつて、この決定は頗る困難である。然し、

日本で kemutai → kebutai
 amunai → abunai
 Lit. P milcht → blicht⁽¹⁾
 mlaith → bläith
 Gr. P mporde → bporde

などの例が若し支那の場合にあてはめて考へることが許されるならば、馬、漢その他 B, M 兩様で見えて居る漢字音は其の實、上述の結論とは反對に、

M → B

の關係があつたものではあるまいかとも臆測せられる。

(1) Paul: Grundriss der Germ. Philologie.

附説一 日本の漢音、吳音の二つの範疇 (categories) は單に M, B の點から見ても明かに疑ふ餘

地がある。漢音は B、吳音は M と定められて居る。無、武、米、文、武、物などの B, M 兩方のあるものに於て B が厦門から來たのでない以上は古く北方支那の音が傳はつたものとみられる。併し M も北方に古くから有つたのであるから、あながちに吳音即江左の音ばかりとはきめられない。即ち一つの文字について B, M 共に北方から來たものがないとは云へない。M 音そのものが吳音であるとすると北方には漢吳兩音を有して居たわけになる。又江左の方から見ると江左の M と同じ M が北方にあつたのであるから、吳音の M のうちに北方の M が侵入して來て居たとも見られる。これは B を漢、M を吳と、かつきりときめたから、その爲めに生じた不都合である。若し北方の B 音が傳はらずしてその北方の M の方が傳へられた場合にも尙その M は吳音であると云ひ得るか。然らば吳音の吳は地理上の意味でなくなつて單に M の音と云ふことを示す餘分な名稱となる。例へば假りに民、密、明などの音で B の方は傳はらなかつたとする。然らば直ちにこれらの M の音は江左の音であると云ひ得るか。宜長翁などの論法によると凡て吳音の方が先きに傳へられては吳音日本人の口に既に慣れて居たから漢音があとから來てもその勢力を斥けるに至らなかつたこと。即ち民、密、明などの吳音 M が先入主となつてあとから B の音が傳はつたのであつても、それは日本ではそだたなかつたと云ふことになる。併しそは他の一般の無、文、武、米、物などの例に徴すると矛盾が起る。必ずや北方の M も早くから日本に來て居るに違ひはない。

殊に梵漢音譯當時或はそれ以後北方にBは殆どなくなりかゝつて居たのだからBでない故に北方音(即ち漢音)でないとは一概に云へないのである。要するにMを吳音のみの特色の如く見るのは漢吳音の範疇を互に交錯せしむるのみで、反て實際の事實を曲解せしむる恐れがある。

附説二 字音から來た日本の單語。これはMの時にのみ限つたことではないのであるが、次の如き例はBの方をのみ字音と考へて他のMの方は日本語の方であると見られて居る。併しまた斷言はできない

B	M	
麥 bak-u	muk-i	居るものが存外あるのではあるまいかと思れる。そのMは北方音
幕 lak-u	mak-u	であるか江左の音であるか、或は百濟音訛したる音であるか、と
牧 bok-u	maki	もかくも字音らしく見られるものが斯様にある。

以上本章のP音考とB音考とで述べた所は地理上、歴史上の兩方面から見てP, P^hはもと初めはP^h(支那のP^hは日本などのBではなく今少しくきつくしてPに近きB音である。北平、浙江、廣東などに之がある。Edkins はBを斜にして之を現はして居る)であつたらしく思はれ、そのP, P^hは後にFに造うつつた。地方的にはそれが更にHにすゝんで居るが支那の音韻史上ではP, P^h, FがHにすゝむことはまだ見出されない。Pは字音の上ではPからMにもうつつて居ることがある。次にPの有聲音Bは後にPから發達したのもあるであらうが多くはMに關係のあるものであつてM音の類推

でBはその迹をかくし遂に今日ではMのみとして現はれ結局FとMと、及びもとのP, P^hとが今の北平官話に並び残つて居るのである。

(1) 宣長翁漢字三考音

第四 入聲音考

入聲音は北平官話には全然見えない音である。

這個是很有益處的書 Cei ka si han yu i ču ti šu.

買賣很蕭索 Mai mai han šiao so.

備別張羅 Ni pie čang lo.

など云ふが如く益¹, 的¹, 索¹, 別¹ pie は日本音に比べても益¹ yek, yak, 的¹ tek, 索¹ sak, tsak, 別¹ piet, bet の如き入聲音である筈が、北平には上の如くその入聲音たる形を失つて居る。尙入聲音に本來屬するもので北平官話には左様でないものがある。即ち例へば、

Kの入聲音

活或惑霍獲……………huo

卓棹捉涿酌濁擢着……………čo

第五章 支那官韻 K, T, P の沿革と由來

即寂籍極劇積績……………ci
白百伯泊帛栢箔舶博膊……………po

-Tの入聲音

綴綴拙……………tso
疾吉嫉……………ci
勃犇跋鉞敝襍……………po

-Pの入聲音

及急笈級集△給楫輯……………ci
押鴨……………ya

尙一般に北平官話で入聲音でなくなつて居るものを廣く地理上で見れば如何、古く歴史上で見れば如何との問題、それに次いでは素と入聲であつたものが北平官話の音綴でいかなる音質(Lautmaterial)に主としてはいつて居るか。又もとの入聲は今の四聲即上平、下平、上聲、去聲のうちの何れに主として關係を有して居るかなどを以下に少しく觀察して見ることとする。

地理上の觀察

浙江以南には入聲音が大體存して居る。

例へば厦門で熟 sick — 枇杷熟盡黃 Gi pè sick tsin ng. 日 jit — 暝日有行 Min jit u kia. の熟 sick 日 jit はそれぞれ北平官話で sou, ji である。即ち厦門には官話に全く窺はれない入聲を有して居る。尙厦門の入聲を多くの例にあたつて之を北平の音に比較して見ると、

-Kの入聲音

	厦門	北平		厦門	北平
墨	bak	mo	虐	giok	niè
木	bak	mu	局	kek	cü
腹	pak	fu	克	khek	ka
曠	pak	p'u	學	hok	süe
逐	tiok	cu	福	hok	fu
落	lok	lo	肉	jiok	iu

-Tの入聲音

	厦門	北平		厦門	北平
滅	bfet	mie	骨	kut	ku
蜜	bit	mi	法	hoat	fa

不	put	pu	罰	hoat	fa
筆	pit	pi	漆	ç'at	ç'i
栗	lat	ji	出	ç'ut	ç'u
			熱	jiət	jo
Pの入聲音					
濕	sip	sa	夾	kap	cia
集	tsip	çi	業	giap	ye
貼	t'iep	t'je	十	tsap	si
合	hap	hə'ka	粒	liap	ii
協	hiap	sie	立	lip	ii
級	k'ip	çi	入	jip	ju

(1) MacGowan. A Manual of Amoy Colloquial.

入聲音の整然たるものは南方でもこの厦門が最もその正しいものの一つである。厦門の外廣東、安南などにも比較的新しく入聲音が存して居る。福州にも入聲はあるがKの入聲のみに歸して、Tは總べてのKの類推に引きつけられた爲めか、今日ではKの形をとつて現はれて居る。その大要を今次

の表に依つて示す。

-Kの入聲音

角	giak	廣東	福州	北平
學	hok	kok	kauk	çiao
石	t'ak	hok	huoh	ç'ie
熟	t'uik	şek	şik	si
伏	fuk	şuk	şuk	şou
逼	bik	fuk	huk	fu
獨	douk	pik	peik	pi
		tuk	tuk	to

(1) Giles: Chinese English Dictionary.

-Tの入聲音

安南	廣東	福州	北平
七	ts'ët	ts'ët	c'eik
滑	hwat	wat	huak
			huo

第五章 支那古韻 K, T, P の沿革と由來

突	dout	têt	touk	t'ü
必	têt	pit	peik	pi
蜜	mêt	mêt	mik	mi

.Pの入聲音

	安南	廣東	福州	北平
甲	giap	kap	kak	cia
挾	hiep	hip	hieik	sia
帖	t'iep	t'ip	t'aik	t'ie
立	lêp	lap	lik	li
納	nap	nap	nak	na
法	fap	fat	huak	fa

以上の例によつて見ても安南と廣東は入聲の正しいことがわかる。唯最後の法の音が法 fap (朝鮮音 pöp) であるのを廣東に fat として居る。G, V, D, Gabelentz は之に説をなして支那では語尾音に P, M のある時はその P, M は若し語頭音に唇音 (Labia) の音のある場合に T 又は N にかへると云ふことを云つて居る。(Ch. Grammatik S. 114) 兎にかく語頭と語尾の兩唇音 (Labial) の音のあること

は、多くの方言には見ないで一種の音の不同化 (dissimilation) が行はれて居る。即ち法 fap は仙頭で hwap, 廈門で huat, 臺灣で hoat 又梵の fam が仙頭で hwam, 廣東で fân, 臺灣で hoan その他凡の fam も同様、又乏 fap, pöp も同様である。

法乏 fap, hōp → fat, hoat or hwap⁽¹⁾
 凡梵 fam, pam → fân, hoan or hwam.

支那本部の沿岸の諸省一帯を言語上入聲音の存否如何に依つて大別すると、直隸、山東、江蘇には入聲がなく、福建、廣東にはある。中間の浙江にはある地方もありない地方もある。ない地方とは温州あたりであつて、ある地方とは上海である。併し上海の入聲は K, T, P 三種の完全して居るわけではなくて K の一種に K も T も引⁽²⁾つけて居るのである。例へば

(1) Gabelentz: chinesische Grammatik. § 114 (2) 小川尚義氏直話

	廣東	福州 ⁽¹⁾	上海 ^(*)	北平
K	食 sik	sik	zok	si
T	室 sat	sek	sek	si
P	級 kep	keik	kiak	çi

即ち上海の入聲音 K の現象は諸州のそれと一致して居る。